

569-142



1200500690186

康文造改

篇十二百第 部二第

(篇六第) 集全寬池菊

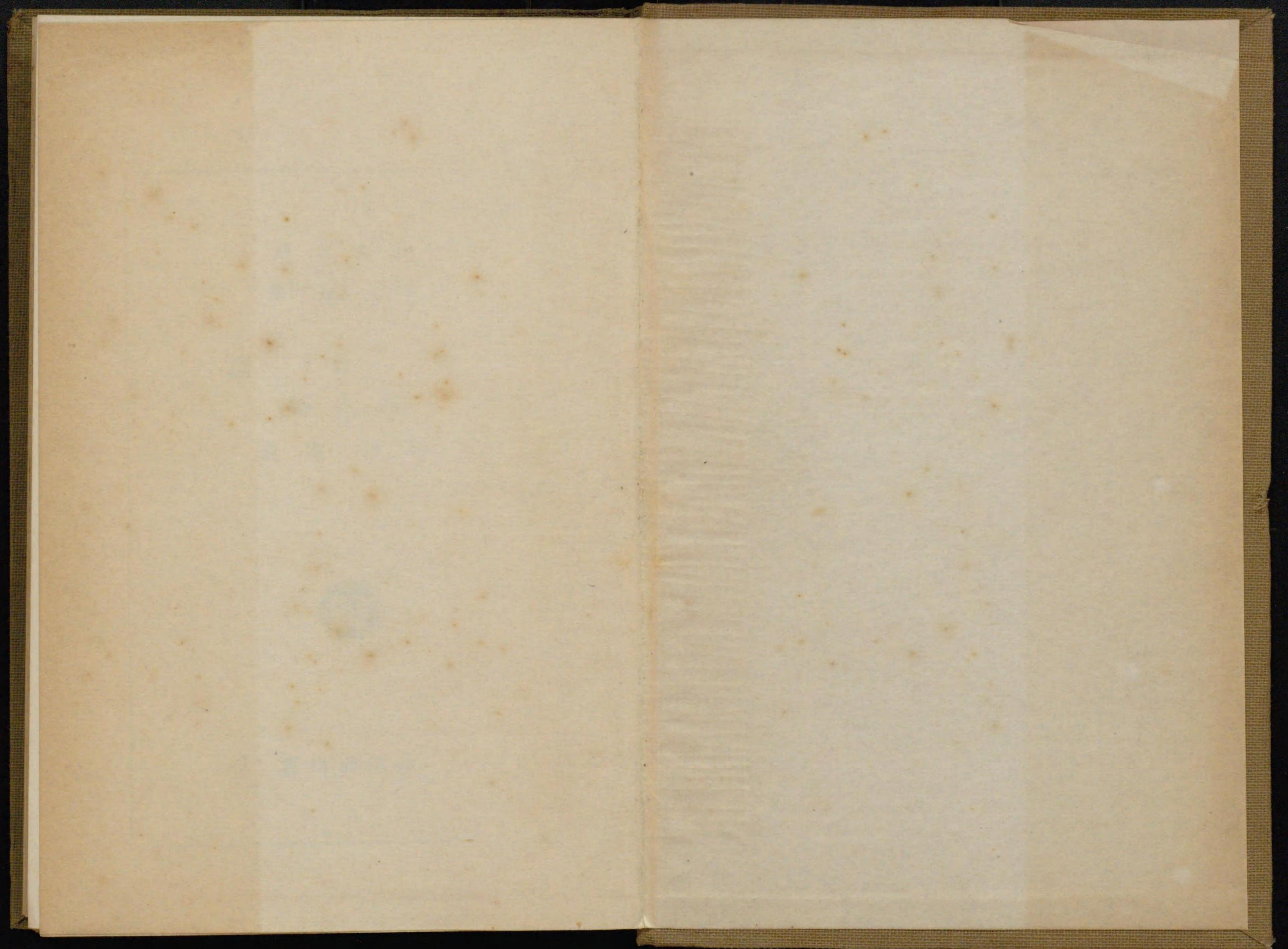
篇 曲 戲

(物代時)

著寬池菊

版出社造改





改 造 文 庫

第 二 部 第 二 十 二 篇

戲 曲 篇

(時 代 物)

菊 池 寬 著



改 造 社 出 版

時代物戯曲篇

歌舞伎若衆……………五

奇蹟……………一五

敵討以上……………三三

藤十郎の戀……………七五

茅の屋根……………九九

時勢は移る……………一二一

岩見重太郎……………一四五

玄宗の心持……………一六九

袈裟の良人……………一九五

569
142



I種
W



1200500690186

人物

玉村 吉彌 歌舞伎若衆

水木辰之助 同じく

玉村 千彌 吉彌弟子

都 萬 太夫 劇場座元

時

若衆と云ふが散文的にわかいしゆと讀まれない頃、エロチックな對象が女とばかりは極まらずわか
しゆと云ふ言葉が美しさと懐しさを含んで居た頃。時代で云へば元祿に手のとどかうとする延寶の
末年。

所

都萬太夫座の吉彌の部屋、吉彌結びの創始者たる吉彌の美しさも年毎に衰へ初めて居る。五年前の
東下りに江戸の男や女の魂を悉く奪ひ歸つた孔雀王の誇りは今彼にはもう見出されないほど凋落の
悲しさが何處となく纏はつて居る。歌舞伎若衆なればこそ前髪を残して居るものゝ少年時代をとつ
くに過ぎて居ることは輝かぬ眸が語つて居る。開け放たれた障子からはたそがれ初めた祇園村の火

影がチラ／＼と見える。折しも春逝く頃ゆゑなまめかしい淋しさがどこもなく漂ふ。吉彌は弟子の千彌と話しながら合せ鏡を使つて椿油にほのめく自分の黒髪をみつめて居る。

吉 お前はもう出る幕はないのだね。

千 え。

吉 ぢや私の事は介意はんで宿へお歸りな。お座敷があつたのぢやないかえ。

千 え、あつても七つからでんす。

吉 さうかい、それなら待つて居てお呉れ、何んだかお前が居て呉れぬと淋しいから。

千 あなたはお顔の色が悪うんすわ。

吉 お前にもさう見えるかえ、私も今度の芝居は氣が進まないで、初日から之ではほんたうに困るけれど。

千 何處か工合が悪いのではんせんかえ。

吉 いゝえ身體が悪いのではなしに心が傷んで居るからぢや。

千 お氣に觸つた事でもんすかえ。

吉 子供のお前に云うても分るまいけれど、此の頃の私と云ふ者は見る影もない者になつてしまつてなあ、賣出しの辰之助さんの威勢と云ふものは憎らしうなる程じゃ。私の弟子のお前迄が、藝も器量もずんと劣つた辰之助さんのお弟子の爲にいゝ役を取られてしまふのだから、自分に役のつか

ないのは諦めもつくけれど、之からのお前が日の目を見ぬやうではほんたうに立つ瀬がありません。

千 私はお小姓一役で澤山でんす。

吉 お前昨夜の辰之助さんのお客は誰だか知つて居るかえ。

千 え、やつぱり丹波の大盡さんでんす。

吉 さうかえ、どうも綺麗で若い者が勝つ世界なんだから、それでも昨日迄あんな事を云つて置きながら、大盡さんも大盡さんだが辰之助さんもお客を横取りしなくつてもよささうなもんだ。お前も之からたんと磨いて綺麗にならなけりやいけません、茲の世界は美しい者が王様になる世界だから、どんなに藝がよくても舞が出来ても綺麗で若くなけりや見向きもして呉れないんだから。私が初めてお江戸へ下つた時にはお前も一所に連れて行つて見せたかつた程だよ、八百八町の人達は皆磁石に吸はれる鐵のやうに猿若町へ引きつけられて来た。ある大名のお姫様は私が東へ下つた春から御病氣になつて。その年の顔見世月にとり／＼亡くなつておしまひになつたがそのお床の下から出たのは私の繪姿であつた。御遺言によつて送られた髪を見た私は、見ぬ戀人の死を悲しむ心よりも自分の美しさを誇る心で胸が一杯であつた。その頃の私は孔雀のやうに思ひ上がつて居たし、（現在の淋しさをまぎらす爲にしきりに回想に耽るものゝ如く）あゝさう／＼まあ可笑しい話があるよ。近江の國の狐が道中の私の美しさに見とれてお江戸迄慕つて来たと云ふ噂があつた。こんな話はとりとめもない偽りだらうけれど、その頃の私の評判と云ふものは、それは／＼大したも

のだし、それに自分だつて自分の美しさを疑つたことは夢にもなかつただけけれど。
 千 今でも見とれるほど綺麗でムんすのに。
 吉 私達は年の行かない内が命さ。若衆の命は短いもので大鑑の中にあるやうに角入るれば風吹きさ
 前髪を置いて居るのもこんな稼業なればこそ、それに男や女を数限りもなう迷はせた報もあつて、
 此頃は身體が端から端に腐つて行くやうに手も足も自由でない、所作事の上手な辰之助さんに及ば
 ないのも無理はないけれど。

千 でも太夫さんは二十を超したばかりでムんすのに。
 吉 そら普通の人のなら三十でも若いだらうけど、私のやうに若衆歌舞伎の國に住んで居る者の命はか
 げろふのやうに短いもの、もう此頃は宮川町を通つたつてあれが吉彌だと指して呉れる人の數も減
 つた。私たちは若さの美しい酒を人が吸つてしまつたらボンと捨てられる變のやうなものさ。見物
 が年の寄らぬ藝を見て呉れるのなら私達の命はもつと長いんだけれど。ほんたうに美しさは藝より
 も力強いけれど悲しい事には藝より命が短い、世間の人は皆私達の美しさを弄ばうとするんだ
 もの、どんなに美しい顔だつて何時迄も續くものか。お年の寄らず綺麗なのは辨財天ばかりさ。辰
 之助さんの全盛だつてやがて凋む花と同じ事、一刺の花代が銀十枚だと云つても私は羨しくは思
 ふまい、どうせ一刻々々若さを人に吸ひ取られて居るやうなものだからね。今こそあんなに思
 上つて私を見下したつて、あの人の持つて居る變だつてどうせ底があるんだから。お前は數へて十
 五だつたな。

千 はいさうでムんす。

吉 お前はふくらみそめた蕾のやうに之からの身體だから、たんと綺麗になつて辰之助さんを見下し
 てお呉れよ、私の追善と思つて。

千 まあ追善などと仰つて、私が十七になるのもたつた二年しかかゝりませんのに。

吉 私は美しさが無くなつたら死んだと同然だと思つて居るのさ。私たちの命は美しさなんだから。
 美しさに生きて美しさに苦しんでやがて美しさに死なうと思つて居る私は、あれが吉彌のなれの果
 だと云はれて皺のある褐色の顔を誰にも指ささしはしない。私は出世狂言の楊貴妃のやうな美しさ
 と誇とを以て死にたい。私は二十の年も暮れようとする秋に緋縮緬の振袖を着て京の街々を歩いた
 が、あれは私を離れようとする若さを引き止めようとする爲の果敢ない力盡しであつただけけれど
 何も知らない人達は私の心に湧き初めた悲しみを知らないで皆私の美しさを今更のやうに賞め讃へ
 て呉れた。あの時の人達と今の人達は寸分も變らないけれど、私の顔には時が取り返しのつかぬ足
 跡をつけて行つてしまつた。然し中には私達の美しさよりも藝を味はつて呉れる人達や。昔のひい
 きは舞臺に出れば言葉を掛けて呉れるのが何よりの慰めさ。辰之助さんと並ぶと辰之助さんには嵐
 のやうに聲がかゝる。でも嵐の中に漂ひながら鳴きしきる千鳥の様に私を賞めて呉れる聲が必ず交
 る、之が私に與へられる唯一つの命の水さ。一人でも二人でもいゝ私の美しさを認めて呉れる人が
 ある限りは生きて行くつもりなのだけれど、私が舞臺へ出て一人も私を呼んで呉れる人ない時
 はその場で死なうと思つて居る。

千 どうして死ぬなど云はれるのでムんすか。

吉 私心はお前には分らぬかも知れぬ。私だつて小さい時から誰かに頭を押へて居られたらこんな心も起らぬだらうけど、之迄はずつと歌舞伎の國の王様であつたんだからな。もとから家來なら家來のつもりで居ようけれど一度王様になれば、人に先へ立たれることは死んでも嫌ぢや。去年の秋の顔見世に初めて辰之助さんにいゝ役を取られた時にはよつぽど死なうと思つたんだけれど、あの丹波の大盡が、お前の美しさは年を知らないと言つて下さつたものだからつい私も迷つたんだ。その大盡迄が辰之助さんの爲に私を捨てしまつたのだから、此の頃の辰之助さんの威勢と云ふものは鴨の流をせきとめてしまふ程だから。

千 太夫さんに分れたら：私。

吉 そんな心配はいらぬこと、茲は美しければ誰も頼むことはいらぬ。王様の冠は自然と足下に降

つて来る。お前の美しい顔立では辰之助さんを蹴落すことだつて何でもあるまい。

千 そんな悲しいことは云はずにいつ迄も私の傍に居て下さい、太夫さんはやつぱり座頭ぢやありませんか。

吉 そら、私がかうして居れば座頭には違ひないけれど、なんぼ座頭をしたつてお客から何とも云はれなければ辛抱の出来るものではない。それだと云うても茲を逃れて山の中へなど逃げ隠れるのも嫌ぢや。舞臺で生れたものはやつぱり舞臺で死にたい。愚痴のやうだけれど今度の芝居は私は嫌で仕方がない。辰之助さんはもうけ役だのに私にくまれ者のお小姓になつて、辰之助さんにかゝる

呼聲の渦巻の中に一人シヨンボリと立つて居なければならぬ。

千 それで若し聲が少しもかゝらなかつたときには……

吉 それは私の誓の言葉さ、東から歸つた時京の街の男も女も逢坂の麓迄私を迎へて来た。その時の私は自分の美しさを信じ切つて京の人達は何時迄も私の美しさに随喜するものだと思ひ定め、私の美しい身體に降りかゝる讚嘆の言葉は咲く花のやうに年々變はらぬものだと思つて居たものだから私は八坂のお堂の下を通る時、吉彌の美しさは未來永劫變るときはございませぬ。もし舞臺で吉彌の名を呼ばないときはその場で直ぐに死にますと私は思ひ上つたまゝに誓ひ捨てた。身の程も知らぬ大それた誇の誓であつたけれど、私は今も悔いては居らぬ。假令その誓のために身を亡さうとも私は自分の美しさの若い誇のためになら喜んで死にもせう。

(部屋の前をガヤ／＼と通り過ぎる一群がある)

吉 辰之助さんの樂屋入りだらう。大したお伴ぢやのう。あゝ拍子木が鳴つ、居る。話に實が入つて扮装が遅うなつてしまつた。千彌や、この手文庫はお前に預けて置くから大事にしまうて置くのだよ。

見る目もあでやかなる美しい若衆に扮し終りし吉彌は一人淋びしく部屋を出でて行く。見送つた千彌はやがて歸つて来て紅の行燈に灯を入れると片膝立てながら鏡に顔を映して見る。おぼろな鏡の中に艶妖な少年の貌が現はれる。しばらくして居ると辰之助を喝采する嵐のやうな聲が舞臺からどよめいて来る。鏡に映つた顔は段段蒼白くなつて来る。鏡を持つ白い可愛い手がふるへて居る。急

に見物の驚駭の聲が起る。騷擾の音が響いて来る。千彌は驚きながら立ち上つて舞臺の方へ走つて行く。見物の叫びは大なる喧騒の聲に變つてゆく。暫くすると千彌が先に立つて吉彌が武士に扮した俳優に擔がれながら歸つて来る。吉彌の白い咽喉からひわ色の着付に迄赤い血が流れて居る。座元の都萬太夫、及び水木辰之助も吉彌の後から這入つて来る。

千 太夫さんエの……。

吉 千彌か、かたきをく。

吉 (千彌は『はい』と云つたまゝ、刀に手をかけて立ち上らうとする) 刀でなしにお前の美しさで……。

(と云つたまゝガクリとなつて死んでしまふ。見物の喧騒の聲は嵐のやうに響いて来る。勝利者水木辰之助は傍に坐つて居たが蒼白の顔が段々恢復してやがてさびしくニツコリ笑つた。)

奇

蹟

人物

秀	寛
お	僧形の少年
若	僧
	辨
	少女
	甲、乙、丙、丁

時

定めず

處

ある大都會の山の手

情景

ある大寺の境内なる閻魔堂の内部。夜。蒼明な月光が大なる閻魔の姿をおぼろげに浮き出させて居る。遠き彼方より大都の雑音に交りて笛の音など聞えて来る。秀寛小姓上りと見え美しき雛僧、忍び足にて右の戸口より入り来て周圍を見廻す。

秀寛 何だつまらない、お辨坊はまだ来て居ないんだなあ。ぢやお經をもつと町嚙に讀むんだつた。

仕方がねえや、お閻魔様の相手でもして居ようかな。

閻魔と同じ上段に並んで腰をかけて、足で羽目板を軽く叩いて居る。暫くすると閻魔堂に近づくと

聲がするので驚いて延び上つて見る。それは若僧の乙、丙、丁の三人であつたので秀寛はあわて、隠れ場所を探し、到頭閻魔の背後に隠れる、三人の若僧左の入口より這入つて来る。

乙

うまく行くだらうか。

丁

了観の事だから大丈夫だ。

丙

若し彼奴が失敗するしたら、今夜はおとなしく寝なければならぬ。

乙

たまには夫もいゝさ。

丙

併し俺は今夜行くと約束したのだ。

丁

俺だつて同じ事だ。

丙

染彌が俺を待つて居るんだ。

乙

俺だつて待つて居る奴がある。

丙

ぢや皆行かなければならぬのだ。

乙

了観の奴うまくやるか知らん。

丙

大丈夫だ。彼奴はとつくに良心を捨て、しまつて居る。良心を邪魔がつて居る奴だ。泥棒するこ

乙

とを何とも思つて居ないんだ。泥棒を追害する世間が悪いと云つて居る奴だ。

丙

もう歸つて来る頃だ

乙

長老も所化も小姓も、まだ起きて居るんだから可成り骨が折れるだらう。

甲 (他の一人の若僧、法衣の袖に、何物かを隠して右の扉より這入つて来る) 随分骨を折らせた。(法

衣の下から金色の佛體を取り出して三人に見せる)

乙 うまく行つたなあ。

丙

長老様は氣が附かなかつたかい。

丁

小姓も役僧も氣がつかかなかつたかい。

甲

潰して二、三度は遊べるぜ。

乙

潰してたまるものか、此のまゝで三十兩は確かだ。

甲

今夜もやつぱり島庄だらうな。彼處なら大手を振つて行けるからな。

丙

併し今夜は早目に引き上げるとしよう。先度のやうに長老様に疑ぐられるといけないから。あの

丁

人はまだ他人の行爲丈には、良心を働かせることを知つて居るから。

乙

なに！ 彼奴に俺達を何うする事も出来るものか。彼奴は女のために、大師様御直筆の波羅密多

丙

經を質に入れて居る。あの事をあばくと彼奴の方が寺に居られなくなる。

丁

俺はそんな事までは知らなかつた。

丙

夫どころか、よく俗縁の姪だと云つて尋ねて来る女だつて、考へて見りや怪しいものさ。

乙

それぢや、長老様からして腐つて居るのだな。

丁

人ばかりぢやない。佛様が腐つて居るんだ。長老は長老で女犯を犯して居る。所化や役僧は寶錢

丙

をくすねる事ばかり考へて居る。俺たちは俺達で宮垣町花島町へ通つて居る。小姓上りの秀寛はお

辨坊と逢曳をして居る。併し御本尊はどうする事も出来ない。佛罰一つ當てることも出来ない。秀寛などは接吻をした口でお燈明を吹き消して居る。

丙 俺達はお經の煙管讀をやつて居る。

丁 人間の腐るのは佛様が先きに腐るからだ。

甲 いやさうぢやない。人間が腐るから従つて佛様が腐るんだ。人間が正しかつた昔は、佛様だつて皆生きて居たのだ。

丁 とにかく、この閻魔様を見る。俺達が佛體を盗んで賣り飛ばさうとして居るのに、どうともする事が出来ないのだ。

丙 併し随分恐ろしい顔をして居るな。

丁 いや恐ろしい顔で、人間の恐れた時代もあつたのだ。金色の光丈で、人間の信じた時代もあつたのだ。併し此頃の人間はさうでない、恐ろしい顔に段々馴れて來たのだ。見かけ丈ではどうとも思はなくなつたのだ。

乙 ほんたうだ。お閻魔様を恐れるのは婆やにおんぶして居る子供だ。あの大きい圖體も、人間を脅す案山子であつた事が分つてからと云ふものは、からきし駄目になつてしまつたのだ。

丙 もう彼是七つだらう、出かけるとしようか。彼奴が待ち疲れて居るだらう。

乙 (お閻魔様の前に進んで嘲弄的に) 偷盗も女犯も妄語もみんな犯して居る者共で御座ります。お閻魔様、地獄へ参りましたらお馴染み甲斐にお手柔かに願ひます、ハ、ハ、ハ、ハ。(他の三人も一

緒に笑ふ立ち上りてや、芝居がかりに) かう、御願申して置けばどんなわるい事でも出来るよと云ふものだ。さあ、出かけよう。道で何處かの居酒屋で一杯やらうぢやないか。

甲 よからう。

丁 ぢやそろく出かけよう。

丙 (最後に歩み出さんとして、ふと閻魔の顔を振り返りて) おや今お閻魔様の目玉がギロリとしたやうだぜ。

甲、乙、丁 (一寸驚いたが直ぐ氣を取り直し) 何を馬鹿な事を云ふのだ。

丙 (黙つて閻魔を見詰めて居る) ……

乙 居酒屋と云ふよりも、裏門前の梅源でコッソリ一杯やらうぢやないか。彼處なら勘定は後でい

のだから。

甲 其奴は思附きた。

丙 ぢや梅源にしよう。

丁 それでもいい。

乙 行かう。

丙 行かう。

甲 (ふと手に持つて居る佛體に氣がつき) 梅屋へ行くとすれば此奴が邪魔だな。

乙 それぢや一度引返す事にすればいい。其處等あたりへ隠して置くさ。

甲 見附かりはしまいかな。

丁 俺がいゝ處へ隠してやる。皆見て居ろ！ (佛體を甲から受け取り閻魔の口の中へ押し入れる) 此

丙 一つは名高い空洞影で腹の中には何も無いのさ。茲に入れて置けばお釋迦様でも御存じあるめい。

芳澤小源次と云ふ役者が、そんな臺辭を云つた事がある。

甲 さあ行かう。

丁 行かう。

丙 行かう。(二三歩、歩き出しながら)一寸から振返つて見るとやつぱり恐い顔だね。

丁 いくら恐い顔だつて俺だちにかう甘く見られちや、やり切れまいな。ハ、ハ、ハ。(打ち連れて去

る少年秀寛閻魔の肩口より顔を出す)

秀寛 ひどい奴等だな。併し此の俺だつてひどくない方でもないなあ。お辨坊が来る迄茲に隠れて居

よう。

(暫くの間静である。少女お辨、夜目にも白く愛くるしき少女、飛び足にて左の扉より入り来る。この少女さへ少しも閻魔を怖れざる如く、平氣にて周圍を見廻す。最後に右の扉を細目にあけ本堂の方向を見て居る)

秀寛 お辨ちやん。(少女驚いて逃げんとす)俺だよ、秀寛だよ。(床へ飛び下りる)

お辨 (やゝ蓮葉に) あら吃驚しましたよ。まあ人の悪い。わしやお閻魔様に呼ばれたのかと思つた。

秀寛 お閻魔様と間違はれりや世話はねえ、併し俺だつてお閻魔様よりはいゝ男のつもりだが。

お辨 顔丈はきれいで、戀の亡者を取つて喰ふ心根はお閻魔様より上手ぢやないかねえ。

秀寛 今宵は久方振りで、逢つたのだからお互に悪口はよして、つもる話をしようぢやないか。……

馬鹿に遅かつたね。

お辨 阿母さんが君若町のお芝居へ行つて歸りがひどく遅かつたからさ。

秀寛 でもまあよく来て呉れたねえ。

お辨 来ないでどうするものかねえ。昨日、お布施と一緒に包んで置いた手紙は見てお呉れだらうね。

秀寛 之からあんな危かしい藝當はよしにしねえ。

お辨 いゝぢやないかねえ。お前は長老様のお氣に入りで、お布施の包はみんなお前が始末するのだ

もの。よしんば見つかつて寺を追はれるやうな事があつても妾の家へ連れ込んで可愛がつて上げる

迄の事ぢやないかねえ。

秀寛 併し俺は此寺を出るのは不承知だよ。この大きい智徳院が俺の物になる日があるだらうな。

お辨 まあお前も人がいゝ。お稚兒で居た頃に、長老様が嬉しからせを云つたのを、眞にうける人が

あるものかねえ。

秀寛 おいお辨坊、この秀寛を甘く見て貰ふまいぜ。得度して、頭こそ丸めて居るが長老様は俺にか

かつちや傀儡同然だ。見て居ろ、今に智徳院の縁の下の塵まで俺が掻き廻して見せるから。

お辨 まあ、お前のやうな人が住職にならうなら智徳院は閻だわねえ。

秀寛 なに！ 今より悪くはならないよ。此間やつた錦繪を見ただらう、長老様はあんなものを見て

楽しんで居るのだ。

お辨 まあ!

秀寛 お辨坊にも氣に入つたらうな。

お辨 氣に入つたともさ。肌身離さず持つて居るわねえ。(懐より錦繪を取り出す) この若衆はお前にどこか似て居るやうだわ。小鼻のところや口元がお前に何處か似て居るやうだわ。

秀寛 こりや、お前、南都山村座の峰島玉之助と云つて三國一の色若衆さ。

お辨 でも妾はお前の方が、いつそ好きさ。

秀寛 そりや無理もない事さ。俺だつて十一の年には寺方と、菱屋の金剛とで奪ひ合ひをしたものさ。寺方の方が十兩ばかり身の代が高かつたので結局こんな坊主頭になつた。俺だつて野良帽子を着せたら此の都の三十一人の太夫子にだつて負けはしないさ。

お辨 豪氣な事をお云ひだね。

秀寛 まだ前髪で居た頃は智徳院の秀之丞と云へば小唄に迄も歌はれたものさ。今だつて抹香なぶりをさせて置くのは全く以て惜しいものさ。

お辨 それぢや、お前は佛様の事などは眞身に考へた事はないんだね。

秀寛 そりや當り前さ。偶にしか佛様を拜まない人には有難く見えるかも知れねえが、俺のやうに朝夕世話をやいて居るとしまひには、うるさくなつていつそ叩き壊してしまひたくなる。毎日傍に居るものだから、木で拵へてあることがよく分つてしまつて、何う考へ直しても有難くは思へない。

お辨 それぢや、お前は佛様の事などは眞身に考へた事はないんだね。

秀寛 そりや當り前さ。偶にしか佛様を拜まない人には有難く見えるかも知れねえが、俺のやうに朝夕世話をやいて居るとしまひには、うるさくなつていつそ叩き壊してしまひたくなる。毎日傍に居るものだから、木で拵へてあることがよく分つてしまつて、何う考へ直しても有難くは思へない。

人間の中で一番坊主が佛様を馬鹿にして居る。長老様は酒の肴にからすみを喰つた口を洗はずに直ぐ讀經する。若僧どもは、毎晩花鳥町通ひをする。何もしないのはこの俺位だな。

お辨 そのお前がかうして私と逢曳して居るのだねえ。

秀寛 何に! 俺なんか罪が軽いのだ。長老様は妾の外に、姪と云ふ女が幾人も居る。本尊様の掃除をする時などはまるで木の切れ同様に扱ふ。いつも、葬式が来ないと云つてこぼして居る。口癖のやうに奈良屋の隠居が死ねばいと云つて居る。あの隠居は永代回向料として千兩寄進することになつて居るからだ。若僧どもと云つたら一倍ひどい。今日も寶物の勢至菩薩の尊像を盗み出して、花鳥町通ひの軍用金にしようとして居る。そしてあることかあるまいことか、お閻魔様の腹中へ隠して置くぢやないか。かうなつちや世も澆季だな、地獄の大王様がちつともならみか利かないのだからな。(閻魔の傍へ寄つてその頬を撫でながら) もつとしつかりなさらずに駄目ですよ。え、お閻魔様。

お辨 お前そんなに寄つちやいやよ。お閻魔様は若衆好きだと云ふから。

秀寛 何とか云ふ讀本にそんな話があつたつけ。でも此顔ぢや色事が出来るものかね。さんざ二・八で見せて上げるのさ。ねえ! お閻魔様 (またその頬を嘲弄的に撫でる)

お辨 でもお前はお閻魔様がちつとも恐くはないかえ。

秀寛 なぜさ。

お辨 私は何時かは、恐くはないけれどお前と夢中になつて居る時など、ひよつくりお顔を見るとゾ

お辨 私は何時かは、恐くはないけれどお前と夢中になつて居る時など、ひよつくりお顔を見るとゾ

ツとする事があるわ。

秀寛 俺はそんな事は決してない。十一、二から深い馴染みさ。ねえ！ お閻魔様。（また頬をちよいと撫でる）

お辨 お閻魔様や佛様はほんたうに何を甲斐性もないのか知らん。佛體を盗み出す者などを、どうかなさればよいに。

秀寛 序でにお目の前で女犯を犯す曲者をどうかかなさればよいに。（また頬をちよいと撫でる）

お辨 （やゝ眞面目に） お前さうお閻魔様を馬鹿にしなくつてもいゝわ。あんまりぢやないか。

秀寛 何があんまりだ。俺も小さい時には佛様やお閻魔様をエライものだと思つて居たが、始終様子を見て居ると何の甲斐性もない事が分つた。長老様や若僧がどんな悪いことをしても、どうする事も出来ないのだ。俺もこりや喰はせ者だと思つたからいつかお閻魔様の顔に唾を吐きかけて見たのだが、罰などは少しも當らない。夫からは木の切れ同様に思つて居る。さうだらう閻魔、木の切れに違ひなからう。どつだ夫が口惜しけりや何とかして見ねえ。おい閻魔！ 閻公！ 閻吉！ （閻魔の頭をポカンと殴る）

お辨 まあ、お前！ そんな勿體ない事をおしでない。

秀寛 なあに、こんな物なんか。（足を揚げて閻魔の腹を蹴る）

お辨 （やゝ恐怖の聲にて） 今お閻魔様の目玉がギロリとしたやうだよ。

秀寛 馬鹿な、そんな氣の利いた藝當が出来るものか。（またボンと蹴る）

お辨 お前大概にして置きよ。わしや何だか氣味がわるくなつて来た。もしお前地獄があつて御覽。

秀寛 坊主稼業をして居る者は、地獄があるなどは夢にも思つたことがない。智徳院で閻魔堂をこさへたのも、隣りの大順寺の閻魔が藪入の時に、素晴らしく流行るのを見て長老様が羨しくなつたからだ。つまり小僧の臍線りをしぼる道具さ、さうだらう閻公！（またボンと蹴る）

お辨 お前も大抵におしよ。私は何だか寒氣がして、身體がゾク／＼するから。おや御覽！ お閻魔様の目があんなに光つて居るのぢやないか。

秀寛 （お辨の恐がるのを結句面白がつて）なあに、氣の故だよ。こんな物を恐がるより横町のむく犬でも恐がるがいゝ。あれならお前、物のはずみで喰ひつくかも知れない。

お辨 でもお前、何時になくお顔が物凄いや。

秀寛 ぢや。俺にあんまり打たれたので、頭痛がして居るかも知れない。いや夫よりも勢至菩薩を喰はされたので腹が病めるのだらう。とり出してやらうかな。（閻魔と同じ段に上り、口中に深く手をさし入れ佛體を探す）お前も之からしつかりして、盗品の隠し場所だけにはならぬがいゝ、こんな圖體をしながらカラ意氣地がねえぢやないか。小僧の臍線りをしぼるだけが能ぢやないぞ。おや！ 喉にひつかゝて仲々出ねえや。やあい閻公！ 口をもつと開けねえか！

お辨 お前、お閻魔様の目玉がギロリと動いたやうだよ。お前もう大概におしよ！ あれ、あんなに目玉が光つて居るぢやないか。

秀寛 （剛情に閻魔に向つて）手前もまだ女だけは、恐がらす事が出来ると思えるな。

お辨 (著しく恐怖の情を伴つて) おやまた目が動いたよ。
秀寛 (尙剛情に) 馬鹿な! おや! なかく出ねえぞ。閻公! もつと口を開けろつたら。(到頭勢至菩薩の像を取り出す) ひどい事をしやがるなあ。こりやお前、智徳院になくはならぬ金無垢の勢至菩薩の尊像ぢや。

お辨 妾は、お前があんまりお閻魔様を馬鹿におしだから、何か祟りでもなければいいがと思つてゐる。

秀寛 そんな氣の利いた閻魔様であつて堪るものか。が待てよ、此の勢至菩薩を、あの若僧共の花鳥町通ひの軍用金にするのは何う考へてもいまくしいな。彼奴等に二束三文に賣飛ばさせるよりか此の秀寛が、そつと隠して置く方がいくらか勝だか知れやしない (と云ひながら、秀寛佛像を懷の中に入れる。その時、若僧共が微醉を帯び小唄を歌ひながら、歸つて來るのが聞える。秀寛周章しながら) いや歸つて來やがつた! さあ、お辨坊! 隠れるのだ。

(閻魔の後に、二人急いで隠れて了る。若僧甲、乙、丙、丁歸つて來る)

甲 あゝいゝ心持だ。

乙 これから行けば時刻もいゝ。

丙 繩手通を、小唄で行くとはしやれて居る。

甲 おまけに軍用金は、たつぷりとある。(丁に) さあ、手前代物を出して呉れねえか。

丁 おつと、合點だ。(閻魔に近づき口中に手を入れる) おや!

甲 何うしたのだ。

丁 不思議だ。仲々手に觸らねえぞ。

甲 退いて見ろ。そんな馬鹿な事があるものか。(甲、丁に代りて深く探ぐる)

乙 人が來る筈はないなあ。 不思議だ。半刻とは經つて居ない中に、無くなる譯はないがな

丙 (稍恐怖を感じたるもの、如く) 不思議だ。半刻とは經つて居ない中に、無くなる譯はないがな

甲 (尙閻魔の腹中を探ぐりながら) 狭い腹の中で、無くなる譯はないのだが。(丁に) 手前確かに入れたらうな。

丁 確かだとも、皆見て居たぢやないか。

丙 (愈々恐怖を感じ始めた如く) 智徳院の附紐閻魔と云つて、昔赤ん坊を喰つたと云ふお閻魔様だ。

甲 何を馬鹿な事を。(と云ひながら、氣味悪るさうに閻魔から離れる)

丙 だから、云はない事ぢやない。俺は、初からさう云つたのぢや、幾何何でも勢至菩薩だけは勿體ない。ありや、お前良然大僧正様の守本尊で、あらたかな御尊體だからな、いくら末世となつても、あの尊體に手を附けるのは、慎しんだがいゝと俺は初めから思つたのだ。

丁 おい! お閻魔様のお顔を見ろ! 凄い顔をして居るぜ。俺は何だか氣味が悪くなつた。

甲 何を馬鹿な事を云つて居るのだ。
 丙 俺は、何だか身體が顫へて來た。あゝ一刻もこんな處には居たくない。(後退りながら扉の所へ來ると一散に駆け出す)

丁 俺も、身體がゾク／＼すらあ。お先へ御免だ。

乙 弱蟲だな。が、俺もかうして居られない事があつた。(躊躇して居たが、急に駆け出す)

甲 皆弱い奴等だな。が、俺一人茲に居ても始まらない。(三人の後から續いて逃げ出す)

(お辨、秀寛の後より這ひ出て、逃げ出さんとす。秀寛後より追継りて)

秀寛 何を恐いことがあるものか。彼奴等はまんまと俺に一杯擔がれたのだ。

お辨 放してお呉れよ。妾は身體が顫へて仕様がななんだよ。お前の傍に居るのも、何だか恐くなつたのだよ。(と云ひながら秀寛の手を振り切つて去る)

秀寛 (たゞ一人になつて) 馬鹿な奴が揃つて居る。ハ、ハ、ハ、ハ。(と打ち笑ふ。その中に自分の笑ひ聲の空しき反響に、ふと恐怖の念を生じたるものゝ如く)

閻魔の顔を見て) やつぱり恐い顔だ。一人で居ると、身體がゾク／＼して來らあ。何だか薄氣味が悪くなつて來た。どら俺も逃げ出さうかな。(急ぎ足に逃げ出さうとして、ふと懷の勢至菩薩に氣が付き) あゝこんな物を持つて居ちや餘計氣味が悪いや。(と云ひながら、佛像を取出し、閻魔の膝の上に安置し終りて、一目散に逃げ出す。その後甲、乙、丙、丁四人歸つて來る)

甲 だから、俺は云はねえ事ぢやない。俺達の後から、お辨坊が逃げ出した所を見ると、確かに閻魔

堂で、秀寛の野郎と又逢曳して居たのだ。秀寛の奴をとつちめれば勢至菩薩の行方だつて分らない事はないのだ。

乙 尤もだ。何もお閻魔様を恐がる事はないのだ。

(四人閻魔に近づいて、その膝の上に安置せられたる勢至菩薩の金色燦然たる端嚴の姿を見る)

甲 (驚いて) あゝ……あつた。

乙 お!

丙 あつた!

丁 ある。

丙 (ある靈感に打たれたる如く) 不思議だ。ちやんと安置してある。何と云ふ尊いお姿だ。

甲、乙、丁、(茫然と立つたまま言葉なし)……

丙 我々の破戒をいましめるために、かゝる不思議を現はし給ふのぢや。俺は、之迄の所業をふつ

りと改めるぞ。(蹲まつて、禮拜す)

丁 不思議だ。不思議だ。俺もふつつりと悪いことはしない積りぢや。(蹲く)

甲、乙、(半信半疑ながら、二人に習つて跪く)……

— 幕 —

敵討以上

「恩讐の彼方に」脚色

人物

中川 三郎兵衛

浅草田原町に屋敷を持てる旗下の士、五十歳位

中川 實之助

その子 嫡子、第一幕にて四五歳、第三幕にて、二十六歳

市 九郎

最初の幕にて、中川家の仲間、第二幕にて強盗になつて居る、第三幕には坊主になつて居る。

お 弓

最初の幕にては三郎兵衛の愛妾、第二幕にては市九郎の妻

旅行せる若き夫妻

馬士 権 作

石工、百姓、百姓の娘など

時

江戸時代、安永から延享へかけての出来事

所

第一幕——江戸、第二幕——木曾山中、第三幕——耶馬溪

(假に後代の稱呼に従ふ)

衣装と道具に就て——衣裳は呉服店の廣告人形に著せるが如き、仕立て下しの華美なるを避けたし。温雅にして目立たざるほどよろし。第一幕の大道具も小成金の住宅の如く安手に新しきを避けたし。

第一幕

江戸田原町中川三郎兵衛の邸。安永三年の秋の初、月夜の晩。

最初、幕の中にて、「おのれ！ 不埒者奴！」と云ふ烈しい怒號と、太刀が鞘走しる音と、バタバタと云ふ足音がして後幕が上る。幕上れば中川三郎兵衛の家の離座敷。左手に竹垣あり、其の上によつて遠く母家が見える。前栽には秋草が生えて居る。左と正面とが廻縁にて圍まれたる座敷、左寄りに床の間あり、床の間には鎧櫃が飾られて居る。床の間の横には、茶箆筥が置いてあり、茶箆筥の右には、二枚折の屏風が立てゝある。幕の開いた時、半白の頭をした三郎兵衛は、太刀を振翳して、市九郎を一刀兩断にしようと思つて居る。市九郎は縁の柱を楯にして、逃がれようと思つて居る。妾のお弓は、そつと屏風の後の襖を開いて、其處から逃げ延びようとする積りらしい。

市九郎 (必死な懸命な顛へを帯びた聲で) 御容赦なさりませ、不義ではござりませぬ、毛頭不義ではござりませぬ。(さう云ひながら、逃げ路を物色して居るのであるが、庭には垣根が周らされて居る上、

若し庭に下りると相手に太刀を振ふ自由を與へさうなので、必死に柱を楯に取つて居る)

三郎兵衛 (沈痛な而も必死な聲で) 申すな、申すな、此期に及んで、命を助からうなどと未練者奴!

市九郎 無實でござりまする。無實でござりまする。大それた……お部屋様と、そのやうな……。大それた事を……。

三郎兵衛 くどい?

(飛び込み様、柱を避けて打ち下す。市九郎身を躲して右に避く。三郎兵衛、太刀を引いて、右より斬り下す。市九郎左に避く)

三郎兵衛 (いらつて) 面倒なッ!

(柱を廻る、市九郎も、それに従つて、グルグル三四回周りし後、市九郎遂に柱より追ひ退けられ、庭に下りて一周り逃げ廻る。が、垣根の柴折戸は、鎖されて居る。若し開けようと思つれば、後から浴びせられるのは必定なので、また引き返して、三郎兵衛をやり過して座敷へ飛び上り襖より逃れようとするとき、ふと置いてある燭臺に手がかゝる。其處を三郎兵衛が、追ひ縋つて肩口に薄手を負はせる)

市九郎 あゝつ!

(悲鳴を挙げると、思はず燭臺を手にして立ち向ふ。燭臺の灯消えて、周囲は月光に照らされた薄暗くなる)

三郎兵衛 おのれ! 主に手向ひ致すか不埒者奴が!

(前よりも、もつと烈しく斬りかゝる。數合の凄じき打合あり。市九郎追ひ詰められて、危くなる。三郎兵衛の太刀先遂に市九郎の小鬢を傷つける)

市九郎 おゝつ!

(悲鳴を擧げて、決死の形相となり、猛然として戦ひ始める。まづ燭臺を相手に抛附ける。その尖端が、三郎兵衛の面部を折つたため、三郎兵衛タジ／＼となつてひるむ。その暇に、市九郎は帯びて居る脇差を抜き放つ。無言の必死な決闘が始まる。三郎兵衛の太刀は、時々天井を掠めるので不利である。切り合ひながら、二人とも縁側に近づく。先づ縁側に出た市九郎は、不覺にも足を滑らして片膝を付く。三郎兵衛得たりと、斬り下ろさうとしたが、あせつた爲め誤つて縁側と座敷の中間に垂れて居る鴨居に深く切り込む。市九郎天の助けとばかり、片膝をつきながら、横に敵の脇を拂ふ。三郎兵衛悲鳴を擧げながら、よろめき倒れる。

市九郎、魂の抜けたる如く、縁側にへたばつて、低いうめき聲を出して居るばかりである……二三分の間、死にかゝつて居る三郎兵衛と市九郎のうめき聲が聞える外、舞臺に何の動作もない。市九郎は、漸く顔を上げて、まだビク／＼動いて居る主人の死體を見て居る、それが、ピタリと動かなくなると急に悔恨の情に驅られたるものゝ如く脇差を取り直して、腹を寛るげやうとする。その時、座敷の隅の屏風が揺れる。お弓の顔が現はれる。蒼白で、身體は、ガタ／＼と微かに顫へて居るが、さうした内心の恐怖を努めて隠さうとして居る)

お弓 (市九郎の自殺しようとするのを、尻目にかけてながら、) ほんたうにまあ、何うなる事かと思つ

て心配したよ。お前か眞二つにやられた後は、追つつけわたしの番ぢやあるまいかと、屏風の蔭で、息を凝して見て居たのさ。餘程逃げ出さうか、逃げ出さうかと思つたのだが、斬られさうになつて居るお前への義理もあつてね。が、ほんたうに命拾ひだつたね。お互様に、悪運が盡きないんだよ。かうなつちや、一刻も猶豫しては居られないから、在金をスツカリさらつて、高飛びをする事だね。まだ母家の方では、氣が附かないやうだから、支度をするのは、今の裡だよ。さあお前、在金を探して見ようぢやないか。

市九郎 (女が喋舌つて居る間に、何時の間にか自殺を思ひ止つて居る。が、まだ茫然として途方にくれて居る) あゝ飛んでもねえ事をしてしまった、大それたお自殺した。

お弓 (男の云ふことを相手にしないで) お前、述懐なんかの幕ぢやないよ。男らしくもない。さあしやんとおしよ。わたしは支度をして来るから、お前はお金を探してお呉れよ。

市九郎 あゝ飛んでもねえ。お自殺した。お自殺した。お自殺した。

お弓 (市九郎を引き起すやうにしながら) 一刻を争ふ九死の場合ぢやないか。さあ、早く支度するのだよ。

(市九郎、女に操らるゝ如く、立ち上り、三郎兵衛の死骸を遠く避けながら、茶箆筒に近づきて探し始める。血の手形が、桐の白い木目にところ／＼ベタ／＼と附く。お弓次の間へ行つて暫くして風呂敷包みを持つて、直きに歸つて来る)

お弓 幾何あつたの。

市九郎 (聲を落しながら) 二朱銀の五兩包みが、たつた一つさ。

お弓 (自分でも茶箆筒に近よりながら、中を引つ掻き廻す) こんな端金が、何うなるものかね。鎧櫃を探して御覽! 軍用金とやらを、入れてあるかも知れないよ。

市九郎 (前よりは、やゝ元氣になつて、鎧櫃を開けて鎧を持ち上げて振つて見ながら) 茲もからつぽだ!

お弓 (いまくしさうに) 名うての始末屋だから、瓶にでも入れて土の中へでも、入れてあるのだらうよ。急場の間には合やしない。さあ、大抵のところ、切り上げて、人目にかゝらない前に、行くでしょう。

(市九郎、血に汚れた手を、手水鉢にて洗ひながら帯をしめ直す)

お弓 (ふと三郎兵衛の死骸に、目をやりながら) 之でも二年近くも、お世話になつた旦那だ! ども、一寸拜んで行かう。(立ちながら、片手を上げて拜む)

市九郎 (黙つたまゝ、跪いて、死骸に向つて兩手を合せる) ……

(二人行きかゝる)

お弓 裏門の鍵は持つて居るだらう。

市九郎 お役目だ。腰から離した事はねえ。

お弓 お誂向きだわねえ。(艶然と笑ふ)

(月光は益々冴えて居る。二人が柴折戸をあけて出かゝると、母家の方で乳母が歌ふ聲がする。「お月

様いくつ、十三七つ、また年や若い、油買ひに茶買ひに——」いたいけな男の子の聲が、それを繰り返して歌ふ)

市九郎 (柴折戸を出ようとして、男の子の歌ふ聲にちつと聞きとれる) あゝ坊ちゃんだ!

お弓 (柴折戸を出ながら) お前さん! 何をぼんやりして居るんだよ。(と強く男の手を引く)

(二人去つてしまふ。月の光の裡に、母家の方で尙歌ひつゞけて居る裡に、靜かに幕)

第二幕

第一場

木曾街道鳥居峠にて、市九郎とお弓とが營める茶店の店先。第一幕より二三年の後。藁葺の大なる家、右手半分は土間になつて居る。左手半分は壁になつて居る。壁にも入口が附いて居る。土間には、草餅、羊羹、乾柿など並べてある。二つの細長き腰掛あり、障子には、そば、かん酒と書いてある。背景は、一面の杉林。家を覆うて、一株の老櫻あり。薔がふくらみ始めて居る。幕開くと、馬士の權作、家の横手の杉に馬を繋ぎ、腰掛に腰をかけながら、店の奥に向つて次の如く話して居る。

權作 かう姐御！ さう因業なことを、云はんと置け。勘定は勘定、商賣は商賣ぢやねえか。この春先の景氣で、一儲けすりや、滞りの勘定はキレイさつぱり拂つてやらう。さあ、文句は云はねえで、清く一本つけて呉れねえか。

(答なし)

權作 かう姐御！ さう意地わるくするもんぢやねえ。勘定と云つたつて、高が一兩か、一兩二分かだらう。もう少し旅の衆が出盛つて見ねえ、それつばかしの目腐れ金は、二日三日かの働き高ぢやねえか。

お弓 (姿は見えないで) お前さんが、稼いだ金を神妙に妾の家へ持ち込むやうな御仁だつたら、五兩でも十兩でも文句を云はずに、貸して上げるわさ。二分はおるか二朱の金でも手にすると、藪原へ行つて安女郎を買ふか、チヨボーですつてしまふ外、能のねえお前さんぢやないか。

權作 (怒つて、腰掛を離れながら) 利いた風な事を、ぬかしやがるな。手前達のやうな悪黨夫婦が、お天道様の眞下で、恐れ氣もなく暮して行けるのは、何方様のお目こぼしだと思つて居るのだい。へん忘れもしねえ、一昨年秋の彼岸の翌くる日さ、藪原の宿の手前で、人殺しがあると云ふから行つて見ると、殺されて居るのは六十ばかりの旅の年寄さ。可哀さうに、衣類から道中差まで、スツカリ浚はれて居る後に、落ちて居るのが煙草入れさ。年寄持の品ぢやねえと、心を止めて見ると駭いた。何處かに見覚えのある品物さ。よくよく見ると、見覚えのあるのも道理、木曾山中ぢや滅多に見られない江戸細工の煙草入れさ。

お弓 (まだ姿を現はさないで) その話でお前さんは、何度酒にしたか分らないぢやないか。さう云ふなら妾の方でも云ひ分があるんだ。月日は、お前さんのやうに、ハツキリとは覚えて居ないが、何でも去年の夏の事さ、抜け参りが流行つて、此の街道筋を、唐笠に道中杖一つの道者達が、ひつきりなしに續いた時さ。日暮方に、まだ十六七の小娘が、シクシク泣きながら駆け込むから家へ入れて容子を聞くと、駭くぢやないか。鳥居峠の登り口で、行き合はせた馬士に手籠めに遭ひ、路用の金をそつくり持つて行かれたのだとさ。その馬士の人相を聞いて見ると、眉毛が芋蟲のやうに太くつて……。

權作 (苦笑ひをしながら) へん！ その話なら、此方から附け足したい事があるんだ。泣きながら駆け込んで来た小娘を、深切ごかしに騙かして、福島の茶屋女に叩き賣つたのは誰だつたのだ。

お弓 お前ばかりに、うまい汗を吸はれて堪るものか。お前さんが、上手に出るのだから、權作さん「狐獲られて狸安からず」と云ふ諺を、お前開いたことがあるかい。妾、常々さう思つて居るんだよ。萬一暗い處には入るやうなことがあつたら、成可連れの多い方がいゝからね。お前さんや、あの奈良井の辰藏さんて云ふ人は、さうしたお交際もしてお呉れだらうね。

權作 (去らうとして) 脅かしやがるな。俺なんか何んなにヒドイ目にあつても、高々永牢だ。お

前さん夫婦のやうな獄門首と、並べられて堪るもんか。(憤然として、馬を解いて去らんとす)

お弓 (初めて土間の方へ現れて、權作の飲みたる茶碗を片づけながら) 權作さん！ お茶代を置く金

もないのかい。
權作 (いましきさうに) 口のへらない女郎だな。

(鈴の音をさせながら去る。や、月並なれども、權作の歌ふ木曾節を聞かせてもよし。お弓、茶道具を神妙に片づけて居る。この時、左の入口より、市九郎生欠伸をしながら出て来る。第一幕よりもや、兇兇の相を帯び、古びたる黄八丈の着物に三尺帯を締めて居る。お弓、夫を見ると荒々しく) お弓 もうお前、八つを廻つて居る時分だぜ。なんぼ用がない身體だつて、あんまりぢやないか。少し性根を入れ更へて、おつつけ一仕事してお呉れでないと、お鳥目だつていくらも、残つて居やしないんだよ。

市九郎 (や、不機嫌に、お弓を見返しながら) あたゝかいお天道様だな。もう、スツカリ春だな。

お弓 (腰掛に腰をかけて休みながら、煙草を喫ひ始める) 何を呑氣な事を云つておいでだ。長いく、冬籠で、去年の秋に稼いだ五十兩も、幾何も残つて居やしないんだよ。お前と妾とで、日に二升近くも御酒をいたぐんだから、無理もないんだが。

市九郎 (頭を垂れながら) その故でもあるめいが、此の頃は何うも頭が重くつて、氣がめいつていけねえ。春先の生あたゝかいのが、却つて身體に悪いのかも知んねえなあ。

お弓 (もどかしさうに) そんな事よりも、お前さん、いゝ鳥のかゝり次第しつかりして呉れなきや、いけないよ。

市九郎 おい煙草を一服吸はして呉んねえ。

(お弓、自分が喫つて居た煙草と煙管を市九郎に渡す。市九郎入口の横の壁を背にしながら蹲まつて、煙草を喫つて居る。若い旅の夫婦が近づいて来る)

若き夫 あゝもう、藪原の宿が見えてもよささうだな。

若き妻 麓では一里も登れば、目の下に見えると云うて居りましたが。

若き夫 疲れはしないかい。

若き妻 いゝえ。

若き夫 茶店がある。一服して行かう。

(お弓二人を見ると満面の笑みを以て迎へる)

お弓 さあ、何うぞ、おかけなさいまし。さぞお疲れでムいませう。此街道は山坂ばかりでムいます

のにお足弱がお連れでは、さぞ不自由でムいませう。

若き夫 (妻と共に、腰をかけながら) 此峠は、街道一の切所ぢやと聞いたが、もう之からは下りで

ムいませうな。

お弓 はあく、もう下りでムいますとも。御覽あそばせ、あの谷が開けて、麥畑が擴つて居る所が

ムりませう。

若き夫 (延び上りながら) なるほど。

お弓 あの眞にある松並木が、藪原には入る街道でムります。ほれく、あの夕日に光る大屋根が見えませう。あれが宿の入口にある妙本寺と云ふ寺でムります。

若き夫 なるほどな。もう二里とあるまいな。

お弓 二里は愚か、一里と少しで△りますな。ゆつくりお休み遊ばしても、暮六つ前には、樂にお着きになれまする。

若き夫 藪原の名物はお六櫛、たしか、さうでありましたな。

お弓 さうで△ります。お歸の道中では、たんとお買ひ遊ばしませ。

(此間、お弓は茶を饗し、菓子を出す。若き妻は、折々市九郎を氣味悪く振り返る)

お弓 時に何方迄の旅△りまするか。

若き夫 左様、伊勢參宮から、京へ上つて、名所めぐりをする積りぢやが、時宜に依つては大和へも

廻らうかと思つて居ります。

お弓 日數から云うても お費用から云うても、結構な思召立て△りますな。それにしても、お供の

衆が見えませぬが。

若き夫 何處へ行つても、さう云うて、不審を打たるゝのぢやが、有様は心利いた下男を伴うて出たのぢやが、松本のお城下迄參ると急に病み附いたので、代りの者を呼ぶのも費なのでその儘宿屋へ残したま△立つて來ましたのぢや。

お弓 水入らずの方が、結局氣樂で△りませうな。

若き夫 (妻を見返りて、意味もなく笑ふ) 一休みしたほどに、さあ行きませう、もうほんの一息ぢや。

お弓 まあ、ごゆつくりなさりませ。日は高う△ります。

若き夫 早う宿屋に着いた方が何かに附けて便宜ぢや。これはいかい雜作になつた。お茶代は茲へ置

きまするぞ。(去らうとする)

お弓 有難う△ります。お歸りに、是非お立ち寄りなさりませ。それでは、道中御無事に。

(お弓、しばらく二人を見送つて居る、市九郎は、漠然として煙草を喫みつゞけて居る。お弓急に氣が附いたやうに、奥へ駆け入つたかと思ふと、市九郎の脇差を持つて、馳け出して來る)

お弓 (刀を夫の肩の邊へ、差し付けながら) さあ! お前さん!

市九郎 (空とぼけたやうに不機嫌に) な、な、何をすののだい。

お弓 (少し語氣を荒らげて) おとぼけぢやないよ。仕事だよ。大切な仕事ぢやないか。

市九郎 (厭な顔をしながら) 何だ! あの人達をかい! 思ひやりのねえ。(お弓を跳ね退けるやうに立ち上る)

お弓 何が思ひやりがねえのだい。お前さんこそ、思ひやりがねえぢやないか。妾が、先刻から、何うかして少しでも長く引き止めようと、あせつて居るのに、アツケラカンと煙草なんか喫つてさ。さあ! ぐづくして居ないで、オイソレと行つておいで。

市九郎 (やゝ強く) おらあ! 厭だ。相手にもよりけりだ。あゝした樂しさうな夫婦者を、とつちめ

るなんていくらかうした稼業でも、餘り罪作りだからねえ。

お弓 お前さんのやうに、年寄は厭だの、子供は嫌ひだの、夫婦者はいやだのと云つて居た分には、

此方とらの商賣は上つたりだよ。佛心のついた盜賊位、厄介なものはない。お前さんも考へて見るがよい。妾だつて昔は満更捨てた女でもなかつたのだよ。馬道小町とまで、浅草界限で、人に騒がれた妾が、木曾の山奥まで流れて来て、山猿同様のしがねえ暮しをして居るのも、一體誰の爲だと思ひなのだえ。みんなお前さんといふお主殺しの悪黨を、亭主にして居る爲ぢやないかえ。

市九郎 (首をうなだれたまゝ、黙つて、つゝ立つて居る)……

お弓 お前さんのお交際をして上げる代りにはさ、日に三度々々のおまんまと、好きなお御酒は文句なしに飲まして呉れる位の分別はして呉れても、満更罰も當るまいぢやないか。

市九郎 (やゝ憤然として) 大きな口を利くぢやねえ。手前に云ひ分がありや、俺の方にだつて云ひ分はあるんだ。中川様のお邸で、年期を無事に勤め上げて、御家人の株でも、買つていたただかうと、御主人大事に勤めて居た神妙な俺を、迷はして、おそろしや！ お主様を手にかけてさせたのは、一體何處の何奴だと思つて居るのだ。

お弓 (あざ笑つて) ふゝん！ 面白くもない。妾に迷はうと迷ふまいと妾の知つた事ぢやないぢやないか。そんな過ぎさつた昔のことを、クヨクヨ思ひ暮すより、毒を喰へば皿と云ふぢやないか。おいしい酒でも浴びるやうに飲んで居たいわね。どうせお主様を、手にかけて、此の脇差ぢやないかい、今更、人一人二人助けたつて罪の軽くなるお前さんぢやないだらう。……(やゝ相手を宥めるやうに) それに、あの人達をやつてしまはなければいけないと云ふのぢやないよ。打ち見た所ま

だ世間を知らねえ豪家の若旦那らしいから、荒療治をしなくたつて、白刃で脅しさへすりや、身ぐるみ捲き上げるのは雑作もない事ぢやないかえ。考へて御覽！ 五十兩百兩と纏まつた金を懐にした旅馴れないお客様は、さう繁々と通るものぢやないよ。それに私のほしいのは！ あの女の方が着て居た小紋縮緬さ！ 妾もあんな着物に偶には手を通して見たいわさ。

市九郎 (漸くお弓から、脇差を受け取りながら) 鬼の女房に鬼神と云ふが、手前の方が悪黨は二三枚上だ。仕方がねえ、行つて来よう。

お弓 (市九郎の背をポンと叩きながら笑つて) いやな人だねえ。屈託顔なんかしてさ。

市九郎 酒を持って来い。冷でいゝから。

お弓 行つて来てからにおしな。おかんをして置くから。

市九郎 持つて来いつたら。

お弓 (奥へ入つて不承無承に酒を持って出て来る) 可哀さうだなんて思つて居ると、兎角どぢややるものだよ。

市九郎 (無言にガツ／＼と樽の口から、むさぼり飲む) あゝ苦い酒だ。(樽を地に抛ちながら急いで去る)

お弓 (後を見送りながら) お伊勢まゐりから、京上りといふ長い旅なら、五十兩は間違ひない。(急に身顔をさせながら) 日が入りかけると、まだ寒い。(山寺の鐘の聲が聞えて来る) おやもう暮六つの鐘かしら。(暮靜かに下る)

第二場

前場より、一刻ばかり過ぎたる後。前場と同じ場所、同じ家。前場の舞臺を右に轉じたるが如き舞臺。店の奥の部屋。左にも入口あり。戸外には月が出て居る。お弓はたゞ一人蓮葉に坐りながら三味線を取り出して爪弾きをして居る。が、幕が上ると、直ぐ絲が切れるので、亂暴に放り出してしまふ。煙草盆を引き寄せて自棄に煙草を喫ひつゞける。市九郎登場する。小脇に衣類を束にして、かい込んで居る。時々後を振り返る。自分の家に近づく

お弓 (耳聴く聞き附けて) 誰! 誰! お前さんかい!

市九郎 (黙つたまゝ返事をしない) ……

お弓 (立ち上りながら) 誰! 誰! (障子を開ける) 何だ! やつぱりお前さんぢやないか。そんな所にぐづぐづして居ないで早くお上りよ。思ひの外に早かつたねえ。

市九郎 (上へ上る。が、やつぱり黙つたまゝで居る) ……

お弓 首尾は? 上首尾? (市九郎の持つて居る衣類を取上げて見ながら) おゝ無傷だねえ。お前さんも、よつぽど仕事がうまくなつたねえ。おゝ、いゝ紋縮緬だね。いくら品がよくつても、血がはねて居る着物なんか、いくら妾だつて、禁物だが、さあ、ゆつくりお寛ぎよ。ちやんとおかんもつけてあるから、一杯飲みながら、話を聞かうぢやないか。

市九郎 (蒼白な顔をしながら、黙つたまゝ座に着く) …… あゝ疲れた—。

お弓 あゝお前さん、またよくくして居るんだねえ。やつぱりやつてしまつたのかい。その方が、いつそ片がついてキレイさつぱりだよ。

市九郎 (頻に重く頭を振りながら) あゝいけねえ。追ひ脅し丈で、命は助けてやらうと思つたが、女の方が、血迷つて、「あれ茶店の亭主だ。」と口走るものだから、仕方なしにやつてしまつた。あゝ何だか腹の底が、底力がなくなつた。あゝ、一杯ついでおくれ。

お弓 それでお前さん、お鳥目はいくらだつたのだい。市九郎 (懐から、二つの胴巻と、男物と女物との財布を出しながら) 道中を心配したと見え、夫婦で別けて持つて居たのだ。まだ勘定して見ねえが、手答へぢや四十兩だな。

お弓 どれお見せ。(其の場へ浚ひ出しながら) 小判が三十枚に二分銀が二十枚、二朱銀が三四十枚あるよ。ザット五十兩。近頃はない豊年だね。(衣類を膝の上に乗せながら) それに衣裳が嬉しいわねえ。緋縮緬の長襦袢に、縞珍の晝夜帯がね。(ふと氣が附いたやうに) 一寸お前さん、頭物は何うおしだえ。

市九郎 頭物とは何だい。お弓 さうだよ。頭物だよ。あの女の頭物だよ。

市九郎 (黙して答へず) …… お弓 紋縮緬の着物に、緋縮緬の長襦袢ぢや、頭物だつて擬ひ物の櫛や笄ぢやあるまいぢやない

か。妾は、先刻あの女が、菅笠を取つた時に、チラと睨んで置いたのさ、瑠璃の對に相違なかつたよ。

市九郎 (黙したまへ答へず) ……

お弓 (のしかゝるやうになつて) お前さん! まさか取るのを忘れたのぢやあるまいね。瑠璃だとすれば、七兩や八兩が所は、たしかだよ。あんな金目のものを取つて来ないなんて、鴛鴦出しの泥棒ぢやあるまいし何の爲に殺生をするんだよ。あれ丈の衣裳の女を殺して置きながら、頭の物に氣が附かないなんて、お前さんは何時から、かうした商賣を、お始めなのだえ。どちをやるのにも、程があるぢやないか。何うお思ひなんだえ。何とか云つて御覽よ。

市九郎 (苦々しげに)

むごたらしい事を云ふぢやねえか。身ぐるみ剃がして来たのだから、髪かざり丈は、せめて女のたしなみに冥途まで、附けさせてやつたつて、満吏罰も當るめえぜ。

お弓 へゝん、利いた風なお説法はよしなさいよ。あのまゝ捨て置きや、野伏せりの乞食位が濡手で粟の拾ひ物になるのぢやないか。さあ、一走り氣輕に取つておいで。

市九郎 (女に對する烈しい憎惡を起しながら)

女は女同志、男は男同志と云ふことがあるが、手前も殺された女の身になつて見るがえゝ。少しは女同志で可哀相とは思はねえのかい。

お弓 (嘲笑的に)

ほう、鬼の眼に涙とは、よく云つたものだ。そんなに可哀さうなら、その豆しぼりの手拭で、グツとやらなければいゝのに。

市九郎 (ゴツとしたやうに、自分の腰に下げた手拭を取りはづしながら) あゝつくづくかうした仕事

が厭になつて来た。

お弓 それもどちな仕事をやるからだよ。四の五の云はずに、さあお前さん! 一走り行つておいで

よ。夜に入つたら、犬の子一疋通らない街道筋だ。まだその儘になつて居るのに違ひないから、一走り行つて来るんだよ。折角、此方の手には入つたものを遠慮するには當らないぢやないか。又遠慮する柄でもないぢやないか。

市九郎 (黙々として應ぜず) ……

お弓 おや! お前さんの仕事のアラを拾つたので、お氣に觸つたと見えるねえ。くどいやうだが、本當に行く氣はないんだね。十兩に近い儲け物を、みすくふいにしてしまふ積りだね。

市九郎 (黙々として答へず) ……

お弓 いくら云つても行かないのだね。それぢや、私が一走り行つて来ようよ。場所は何時もと同じ處だらうね。

市九郎 (吐き出すやうに) 知れたことよ。戴原の宿の手前の松並木さ。

お弓 立ち上つて、裾をはし折りながら) ぢや一走り行つて来よう。月夜で外はあかるいし…本當に世話のやけるお泥棒だ。(庭へ降り、草履をつゝかけて行きかけんとす)

市九郎 (振り向いてギロリと女を睨みながら) 手前本當に行くのかい。

お弓 行くのが何うかしたのかい。

市九郎 悪事にも程があるものだぜ。

お弓 (戸外へ出ながら) へん、大きな世話だ。あゝ。いゝ月夜だ。(小走りに去る)
 市九郎 (立ち上つて) あゝ、到頭行つてしまひやがった。(戸外へ出る) 熊笹を分けて走つて居る恰好は、人間ぢやありやしねえなあ。死體につく狼のやうだな。(しばらく跡を見送つた後踰として家に入る、膳に附いてあつた徳利を取つて、一氣に飲み干す) ああ魔だ、俺にくつ憑いて居る魔だ。(頭を抱へしばらく身をもたえる、ふと傍にあつた男物の衣類に目を附け、觸つて見た手を灯に透かして見る) 血だ。やつぱり血が附いて居る。(茫然として前方を見詰める) ゲツとやつた時に、白い二つの手が蛇か何かのやうに俺の手に捲きつきやがった。あゝ堪らねえ。(不快な記憶を拂ひのけんとし、身もたえする。しばらくしてふと氣が附いたやうに) さうだ。彼女の歸らない中だ。(立ち上つて押入より二三枚の衣類を取り出す。手早く風呂敷に包む。ふと女が膳の横に置いて行つた盗んだ金の財布が目が附く。懐に収める) あゝ百年の戀も醒めてしまつたな。(急ぎ足で戸外に出る。ふと懐の金に手をやる。立ち止まつて考へる。二三歩後歸りして考へる。到頭憤然としてとつて返し) 汚れた金だ!(つよく家の中に投げ込む。財布より飛び出た小判は燦然たる光り放つて、家の中に散亂する。市九郎は一散に走り去る)——幕——

第 三 幕

第 一 場

第二幕より、二十年餘を隔てし延享二年の春。所は、九州耶馬溪青の洞門(便宜のため後代の稱呼を用ふ)洞門の入口。右手に岩石が、削られて、山國川の流の一部が見えて居る。他は、舞臺一面稍灰色を帯びた岩壁、岩壁の中央に、高さ三間横四間位の洞穴が口を開けて居る。周圍には小さい石塊がぞろ／＼落ち散つて居る。川に依つて、杉の若樹が數本生えて居る。岩壁の端れを、棧道が危く傳て居る。鎖を力に渡る、鎖渡しである。幕が開くとやゝ身分のあるらしい老人、物賣の女、馬を連れた百姓が危げに鎖渡しを順次に渡つて來る。渡つてしまふと皆舞臺にて暫らく休息する。

老人 (ホットしたやうに石に腰かけながら) 年に一度宇佐の八幡様へお参りの心願を立てたのもえ、が、この鎖渡し丈はいつもく命がけの難所ぢや。この頃は風も吹かいで棧が掛けかへたばかりで新しいから、命の心配はないものゝ、年寄には、足元が危うて、危うて。

物賣の女 妾などは、樋田郷のもので 毎日一度は通ひ馴れて居りますけれど、雨の日で棧の滑る時とか、風で棧が揺れる時にはほんまに命がけで御座んすのう。

百姓 (馬を引きながら、漸く棧道を、渡つて來て) あゝ大骨を折らせたな。途中で、暴れ出すまいかと思つて、ビク／＼ものぢやつたわい。

物賣の女 (百姓に) 作藏さん、ほんまに、氣を附けないかんぜ。馬を連れる時は、ほんまに危いけ

に。去年の柿坂の新右衛門さんのやうに、馬諸共に、ころげこむと命が無えからのう。
百姓 (元談に) せめて、お前との相對死ぢや、浮名も立つけれど、馬との相對死ぢやほんまに犬死ぢやけにな。

(洞窟の入口から、石工が二人石塊を擔つて出て来る)

百姓 やあ、庄どん。えらう、精が出るのう。ちつとは抄が行つたかのう。

石工の一 (石塊を下し、その上に、腰かけながら) 俺が来た時とちつとも變つて居らんわい。相手が
大磐石の岩ぢやけに、半年や一年で物の十間と、彫れはせんわい。

百姓 さうぢやらう。さうぢやらう。俺などは初は針の穴からお天道様をのぞくほどの及びも附かぬ

仕事ぢやと思つて居つたのぢや。それにしても感心なのは、了海様の御辛抱ぢや。初は、氣違坊主
ぢやの騙りぢやなぞと、俺などは若い時には了海様の後から、小石の一つ二つは、ぶつ喰はしたこ

とがあるのぢや。が、あの御辛抱には、みんなが頭を下げてしまつたのぢや。郡奉行様の御褒美が
下つてからは、石工の數も倍になつたと云ふのう。

石工 今日日ぢや、八分通りはくり貫いたから、もう一息ぢや。了海様は、此頃は夜もロクく〜に枕
には就かれぬのぢや。

老人 わしも、何うかして此の剝貫が出来る迄は、生き延びて居たいと思ふのぢや。此の向きぢや、
わしの願ひも叶ひさうぢや。

百姓 山國七郷の百姓が、今では頸を長うして出来るのを待つて居るのぢや。わしも植附でも濟んだ

ら、今年もお手博ひしようと思つとるんぢや。了海様丈に働かせては冥加が恐ろしいからのう。

(此の時、下手より又數名の百姓登場す)

百姓の二 (洞穴の入口に行きて、耳を聳てながら) あゝ深うなつとるのう。之でも、二三年前まで

は、錠の音が入口まで聞えて来たものぢやが。

百姓の三 深うなつとる。深うなつとる。俺はもう一年半と云ふ見込で、隣村の林八と賭をしたが、

此の向きぢや、わしの勝だな。

百姓の四 太い野郎ぢやのう。了海様が、土にまみれて働いてムらつしやるのに、罰が當るぞえ。

百姓の三 なに、了海様は了海様で、俺は自分の罪亡しにして居ることぢや。お前たちが恩に被るこ

とはないと、口癖のやうに仰しやるぢやらう。

百姓の四 何の罪滅しの爲だけに、こんなどえらい事が出来るものか。みんな衆生濟度と云ふ御本願

があるからぢや。俺も、暇になつたらお手傳ひぢや。

百姓の三 偽を云へ。お前は、毎年々々お手傳ひぢやと云ひながら、一度も錠をとつたことはないぢ

やらう。

百姓の四 お前だつて同じ事ぢやないか。

(百姓達が、話して居る間に、實之助登場する。質素なる旅姿、木綿の旅合羽を着て居る。洞穴を見
ると、やゝ興奮した體にて、周圍の地形を見、右手に行く鎖渡しを見て引き返し洞穴の中を見る。

此の間百姓達の注意を引きつゝあり)

實之助 (漸く百姓の二に話しかく) 卒爾ながら、少々物を訊ねる。此の洞窟の中に、了海と申す出家が居るさうぢやが、しかと左様か。

百姓達 (口々に) 居らないで何うしようぞ。了海様なら、此洞窟の主同然の方ぢやわ。

實之助 左様か。それなら、尙訊ぬるが年の頃は、およそ何程ぢや。

石工の一 (いぶかしげに未知の武士を見ながら) 了海様ならもう五十を越した方ぢや。やがて六十に手の届く方ぢや。

實之助 (落著いて) 生國は、越後柏崎ぢやと聞き及んだが。

石工の一 へえ、何でも雪の澤山降る國ぢやと云ふことで。

實之助 若年の折、江戸で奉公いたしたとは聞かなかつたか。

石工の二 あゝ聞いたことがある。俺に一度江戸の浅草觀世音の繁昌を語つて下さつたことがある。

實之助 (漸く緊張しながら) よくぞ教へて呉れた。して、この洞窟の出入口は、茲一ヶ所か。

石工の一 ほう、それは知れたことぢや。向うへ口を開けるために、了海様は塗炭の苦しみをして居られるのぢや。

實之助 奥行は凡そ幾町ぞ。

石工の二 そんなことを訊かされて、何にせらるゝのぢや。

實之助 (少しく思索して) 了海殿とやらに、御意得たいのぢや。(つかく〜と奥へは入らうとする)

石工の一 お待ちなされませ。初めての御人では歩かれませぬわい。石が、彼方にも此方にも突き出

て居る上に、穴なども折々あります。越後からほろ／＼尋ね参つた者ぢやと云うて取次では呉れられぬか。

實之助 それでは、其方に頼みがある。越後からほろ／＼尋ね参つた者ぢやと云うて取次では呉れられぬか。

石工の二 それでは、俺が一走り行つて来よう。(馳け入る)

百姓の二 了海様の身寄の方でムりますか、了海様には此の山國七郷の者が、みんないかい御恩になつて居ります。

老人 (進み出でながら) 越後と九國の端とでは、お聞き及びにもなりますまいが、了海様は、此谿七郷の者には、持地菩薩さまのやうに有難い方でムります。御恩になつて居ります。(頭を下げる。實之助精他を顧みて) 御身寄の御武家様ぢや。みんなお禮を申し上げい。(皆一齊に頭を下げる。實之助精神的にやゝ困惑しながら軽く應ずる)

老人 まさか。お子様ではムりますまい。甥御様でムりますか。よう御尋ねて御座らしやつた。一體何處でお聞きになりましたか。

實之助 武者修業の傍、諸國を尋ね廻つたが、當國の宇佐の八幡にて、人傳に聞きました。

老人 それこそ眞に神様のお引き合せぢや。

百姓の二 今年で、二十年でムります。長い間、一心不乱にお働になりました。何でも、お若い時に罪業をお重ねになつた罪滅しだと仰せられて、此の頃では、夜まで鎧を振つて居られます。

實之助 (半ば獨言のやうに) 重ねた罪業の罪滅しと云ふのか。だが主殺しの悪逆は消えまして。(ハ

實之助 (半ば獨言のやうに) 重ねた罪業の罪滅しと云ふのか。だが主殺しの悪逆は消えまして。(ハ

百姓の二 今年で、二十年でムります。長い間、一心不乱にお働になりました。何でも、お若い時に罪業をお重ねになつた罪滅しだと仰せられて、此の頃では、夜まで鎧を振つて居られます。

實之助 (半ば獨言のやうに) 重ねた罪業の罪滅しと云ふのか。だが主殺しの悪逆は消えまして。(ハ

老人 それこそ眞に神様のお引き合せぢや。

百姓の二 今年で、二十年でムります。長い間、一心不乱にお働になりました。何でも、お若い時に罪業をお重ねになつた罪滅しだと仰せられて、此の頃では、夜まで鎧を振つて居られます。

實之助 (半ば獨言のやうに) 重ねた罪業の罪滅しと云ふのか。だが主殺しの悪逆は消えまして。(ハ

、、、と嘲る如く笑ふ)

老人 お主殺しまで、ほうう。が、それもあの御精進では消えて居りませう。

實之助 消えて居るか消えて居ぬか、今に分明いたすであらうぞ。(ハ、、、、と冷笑する)

(人々や、實之助を疑ひ始める。各々の間に私語を始める。その時、了海が石工二人に兩手を取られながら、出て来る。實之助ひそかに目釘をしめす。肉悉く落ちて骨露はれ、脚の關節以下は、殊に削つたやうである。破れたる法衣に依つて僧形とは知れるものゝ、頭髮は長く延びて、皺だらけの顔を掩うて居る。眼は灰色の如く濁つて居る。洞窟の外へ出ると目が眩むと見え、よろめく。百姓了海を見ると膝をついて禮をなす)

石工の二 (了海を介抱しながら) お危ういいます。

了海 (手で探るやうに)

何處に居られるのぢや。何處に居られるのぢや。

石工の二 それそこでゐります。直ぐそこでゐります。

了海 (實之助の姿をおぼろに見出したやうに) 何方様でゐりましたか、老眼衰へはてまして辨へ兼ねます。

實之助 (敵の衰へはてた姿を見て、やゝ駭き最初の擬勢を、くじかれたやうに) その許が、了海どのと云はるるか。

了海 仰せの通りでゐります、して、貴方様は。

實之助 (やゝ興奮しながら) 了海とやら、如何に、僧形に身を窶すとも、よも偽りは申すまい汝市

九郎と呼ばれし若年の頃、江戸表に於て主人中川三郎兵衛を打つて立退いた覺があらう。

了海 (罪を悔い、しかもその罪から救はれて居ることを示すやうな落着いた、しかし謙虚な口調で) むります。ゐります。して、それを仰せらるゝ貴方様は。

實之助 そちも忘れは致すまい。三郎兵衛の一子實之助ぢや。

了海 (潛然と涙をこぼす) 實之助様! 覺え居ります。よく覺え居ります。お父上を打つて立退きました者、此了海奴に相違ゐりませぬ。

實之助 主を打つて立ち退いたる非道の汝を打つ爲に、十年に近い年月を、艱苦辛苦の裡に過したわ。このところにて、會ふからは、もはや逃れぬところと、尋常に勝負いたせ。

了海 長い御辛苦でゐりました。申譯がゐりませぬ。身の罪滅しばかりを考へて居りました。貴方様に、これほどの御辛苦をかけようとは、思ひませんでした。いざ、お斬り遊ばせ。(やゝ眼が見え始める) お顔がやつと見えました。お父上様の御無念のお顔が眼に見えるやうでゐります。いざお斬り遊ばせ。お聴き及びもゐりませうが、之なる剗貫は了海奴が、罪亡しに掘り穿たうと思ひました洞門でゐりますが、二十年の年月をかけて、九分迄は出来上りました。了海が身を果てまして

も、はや一年とはかゝりませぬ。いざ、お斬りなされい、お身様の手にかゝり此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、思ひ残すことはゐりませぬ。

實之助 (感動しながら、素志を曲げまいと努めて) よい覺悟ぢや。いかに、善果を積まうとも惡逆の報は免れぬわ。最後の念佛を申すがよからう。

(百姓や石工達は、事件の急激なる回轉に、最初は茫然として居る。中頃了海の身が、危険であると悟る。一人の石工が、奥へ知らせにはひる)

石工の二 おゝい、みんな出て来い。(洞門の中を見て大聲に叫ぶ)

(石工達、手にく鐵鎚を下げ、わめきながら、そして實之助を遠巻きにし、了海を庇護してしまふ。了海、石工の庇護を脱して實之助に近づかんとあせる。それを制しながら)

石工の頭 了海様を何とするのぢや。

實之助 (大勢を見て、刀を抜きはなつ。八方に目を配りながら) その老僧は、某が親の仇ぢや。端なく今日廻り合うて、本懐を達するものぢや。主殺しの極重悪人を庇うて神佛の罰を受くるな。

石工の頭 (傲然と) 敵呼ばりは、まだ浮世に在る裡の事ぢや。見らるゝ通り、了海殿は出家の御身でゐるぞ。その上、山國谿七郷は愚か、豊後肥後山國川の流に添ふ村々の者どもには、佛とも仰がれる方ぢや。其方様などにムザくと打たせてなるものか。

實之助 (全く激昂して) 申すな。申すな。假令出家致さうとも、主殺しの大罪は入逆の一つぢやわ。

その方達が、邪魔いたさば片つ端から、歸人の山を築いて呉れるのぢや。(實之助怒つて斬り込まふとする。石工達ワツと叫んで一齊に鐵鎚を振り上げる。百姓達は小石を拾つて、投げるべく身構へする)

了海 (必死になつてもがく) 皆の衆お控へなさい。此の御武家に石一つ指一本加へたなら、了海はその人を恨みまするぞ。永々了海を助け呉れられたよしみにはたゞこの儘に討たさせて下されよ。

了海打たるべき覺え十分入る。了海が此の劔貫を掘らうと云ふ心持も、今茲で打たれようと云ふ心持も同じぢや。劔貫の成就は目に見えて居る。その上、かゝる孝子のお手にかゝれば、了海の本懐此上はないのぢや。皆の衆お控へなされ。

石工の頭 それぢやと申しまして、貴方様の打たれるのを傍で、みすく見過すことが出来ませうか。

了海 了海が討たれるのを見て下さるより、その暇に石一片でも、砕いて下さる方が、此の了海には最後の念佛よりも有難い。さあ！ お引取り下されい！

石工の二 そりやいかぬ。貴方様が死なれては、此のどえらい思ひ立ちも、何うなるか知れたものでない。貴方様が、見て御座らつしやればこそ、ピクともせぬ大磐石と夜晝かけての戦が出来るのぢや。貴方様に、死なれては今迄掘り抜いた洞門が一夜の中に埋もるやうなものぢや。

石工達 (口々に) さうぢや、さうぢや。ことわりぢや。ことわりぢや。今了海様に百姓の二 さうぢや。さうぢや。長い間の俺達の樂しみが、ふいになつてしまふのぢや。死なれてなるものか。死なれてなるものか。此上妨げいたす者は、誰彼の容赦はない。

實之助 是非に及ばぬ。了海が此の了海に、生きながら、地獄の責苦を見せるのか。了海は、舌

(實之助、石工達の中に斬り込まふとする。石が霞のやうに飛んで来る。タヂくとなる) 了海 (身もだえしながら) 其方達は此の了海に、生きながら、地獄の責苦を見せるのか。了海は、舌の罪の爲に、孝心深き御武家を傷つけようとするのか。石一つ御武家様に當てゝ見よ。了海は、舌

を噛み切つてでも即座に相果て、見せますぞ。

(石工百姓達、石を投ずることを止める。實之助了海を望んで斬り込まうとする。石工百姓達又烈しく抵抗す。老人列を離れて實之助の前へ進む)

老人 お待ちなされませい。貴方様のお心も、御尤もでまいります。が、石工達百姓達の心も、やつぱり尤もでまいります。が、お心を静めてよくお聞き遊ばしませ。貴方様がいくらあせつても、向うは四十人にも近い人数がまいります。それに、かうして居る中に、近在近郷の人々は了海さまの大事故やと申して、段々駆け付けて参ります。貴方様がいかほど武藝の上手でおありなされても、人数には叶ひませぬ。さあ、茲は御思案でまいります。なあ、御武家様！ 此の刳貫は了海様一生の御大願でまいります。二十年に近き御辛苦に、身心を碎かれたので御座りますのぢや。いかに御自身の悪業とは申しながら、大願成就を目前に置きながら、お果てなされる、こと如何ばかり無念で御座りませう。皆の衆が、了海様を庇ふのも、矢張りその爲で御座ります。長くとは申しませぬ。此の刳貫の通じ申す間、了海様のお命を私共に預けて下さりませ。御覽の通りの御身體で御座ります。逃げかくれなどのなされる御身體では御座りませぬ。刳貫さへ通じました節は、御存分になさりませ。

石工 百姓達 尤もぢや。尤もぢや。

老人 皆もあのやうに申して居ります。此場は一先づお引き取りなさりませ。若しお待ちになると云へば、御滞在のお宿も御世話いたしませう。皆の衆、しかと誓ひなされい。その期に及んで、屹

度變易せぬやうに。

石工達、百姓達 誓うた。誓うた。しかと誓うた。

老人 了海様いかで御座りますか。

了海 御武家様の御辛苦を思へば、わしは一日も生き延びたう思ひませぬ。

老人 それではなりません、貴方様のお命は、此の刳貫を刺し貫く佛様の錐のやうなものぢや。刳貫の成就する迄は輕々とお捨てになつてはなりません。御武家様！ お聞きになりましたか。御思案は如何で御座りますか。

實之助 (何事をか思案したる後) 了海の僧形にめで、その願を許して取らさう。東へた言葉を忘れまいぞ。

石工の頭 何の忘れてよいものか。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向ふへ通じた節は、その場を去らず了海様を討たさせ申さう。さあ、了海様、思はぬ事に手間を取りました。いざ仕事にかかりませう。

了海 いや俺は、此場で……

(了海の留らんとするを、石工達擔ぐやうに拉してしまふ。實之助、無念らしく見送る。)

老人 さあ、お宿へ案内いたしませう、あゝ言葉を束へて置けば、了海様には勿體ないが、綱に這入つた魚で御座ります。たゞ時期をお待ちなさりませ。

實之助 (無念の形相にて、洞門を見ながら) 了海は夜は何處に宿るのぢや。

老人 夜も晝もありませぬ。お疲れになれば、坐つたまゝ岩に靠れてお休みになります。人間の爲
 さることゝは思はれませぬ。
 實之助 左様か。(思案をして) 今宵は、七日か八日か。
 老人 七日で御座りまする。
 實之助 (獨言のやうに) 子の刻には月も入るのう。ハ、、、。(微かに笑ふ) — 幕 —

第 二 場

時と場所 第一場と同じ日の夜、洞門の内部。

情景 舞臺一面列貫かれたる岩石、舞臺右端が此の洞門の行き詰まりで、その岩面に面して了海を
 初め数人の石工達が鎚を振つて居る。焚火がちろ／＼燃えて居る。幕の開く前より鎚の音が聞える。
 幕があくと、みんな一齊に手を休める。

石工の一 皆が一緒に手を休めると、急に静けさが身に浸みて來るのう。

石工の二 道理ぢや、地の中へ幾町ともなく來て居るのぢやからのう。

石工の三 今宵は、みんな了海様のお傍に居ぬと、あの晝の武士が、合點せずに又狙ひに來るかも知
 れぬ。

石工の一 それや念もない事ぢや。樋田郷まで人をやつて、武士が宿つて居る宿の周圍には、ちゃん

と寝ずの番を付けてあるのぢや。

石工の二 あゝもう、亥の刻だらう。手がしびれるやうに痛むのう。

了海 (しはがれた低い聲で) 尤もぢや、今日は岩の焼き方が、足りなかつたと見えて、滅相岩が堅
 かつたのう。あゝもう皆の衆、小屋へ引き上げさつしやれ。了海も、もう休まう。さあ皆の衆、引
 き上げさつしやれ。

石工の三 それぢや、みんなお暇をするとしよう。了海様も、もうお休みなされませ。さあ、わしが
 夜の具を取つて來て進せよう。

(石工の三、走り去りて、やがて蓆と汚き夜具とを持つて來る。程よき所に敷く)

了海 あゝ忝けない。忝けない。それぢや皆の衆、わしが先きへ御免蒙るぞ。(了海寢ようとする)

石工の一 それぢや、了海様又明朝お目にかゝりまするぞ。

石工の二 御免なさらませ。

石工の三 御免なさらませ。

(石工遠く去る。了海暫く眠る振りして、又むく／＼と起きる)
 了海 (合掌して低聲に観經を誦す) 眞觀清淨觀。廣大智惠觀。悲觀及慈觀。常願常瞻仰。無垢清
 淨光。慧日破諸闇。能伏災風火。普妙照世間。悲憫戒雷震。慈意妙大雲。樹甘露法雨。滅除煩惱
 燄。過去の罪業報い來て、實之助様のおはせられたからは、命は風前の灯ぢや。生ある中に、一
 寸なりとも一尺なりとも、掘り進まいでは叶はね處ぢや。懈怠を負る時ではない。

(岩面に膝行し、前より烈しく打ち下す)

了海 (聲を勵まして) 諍訟經官處。怖畏軍陣中。念彼觀音力。衆怨悉退散。妙音觀世音。梵音海潮音。勝彼世間音。是故須常念。念々勿生疑。觀世音清淨。於苦惱死厄。能爲作依怙。

(狂へるが如く、打ち進む。暫くすると、實之助が舞臺の左端から忍び寄つて来る。右に太刀を抜きそばめ、右手を地につきながら、徐かにく忍び寄つて来る。了海は夢にも知らざる如く、更に觀音經を誦しつゞける。實之助、走り寄らんとして逡巡す。暫く太刀を振り翳して切らんとし、しかも相手の一心不亂なるを見て討ちがたく遂に刀を、鞘に收めて去らんとす)

了海 (急に振り顧りて) 實之助様! 何故お斬り遊ばされませぬか。

實之助 (了海に不意に言葉をかけられて、やゝ狼狽して言葉なし) ……

了海 晝間の仕宜は、さぞ御無念に御座りましたらう。いざお斬り遊ばしませ。今こそ妨げいたすものは、御座りませぬ。邪魔の入りぬ中、いざお斬りなさりませ。

實之助 了海とやら、此上はいさぎよく、此剣貫成就の折を相待たうぞ。敵を眼前に控へながら、武士たるものが、手を拱しうする無念さに、東へた約束をも反古にいたし、たゞ兩斷にいたさんと忍び寄つたれども、其方が一心精進のけ高さに、瞋恚の炎も、打ち消されて、高德の聖に對し忍び寄る夜盜の如く獸の如く窺ひ寄る身があさましうて、太刀を取る手が、心ならずも鈍つたわ。此上は心長く其方が本願を達する日を相待たうぞ。

了海 (手を突き平伏しながら) 極重惡人の拙僧に、大願成就の月日を、借して下さりまするか。

忝なる御座ります。此上は、身を粉に砕いて、明日明後日にも剣開く心にて、鎧を振うで御座りませう。御孝心深き貴方様に長い御辛苦をかけまして、申譯はありませぬ。お許し下さりませ。お許し下さりませ。

(了海、實之助に近りながら、頭を下げる)

實之助 敵同志となるも、宿世の業と申すことぢやが、いかに了海とやら、拙者もただ空しく、此地に止まつて、其方達の働くを見るより、及ばずながら、鎧を取つて、一片二片の岩なりとも、削り取つて得させよう。其方が本懐の日は、近くなるのは、取もなほさず拙者が本懐の日は近づくのぢや。

了海 (感激しながら) よい所にお氣が附かれました。貴方様の御助力は百萬の味方よりも頼もしく御座ります。貴方様のお顔を見て居れば、この了海奴も、片時も鎧が休められませぬわい。

實之助 たゞ徒然に瞋恚のほむらに心を爛らせて居るよりも、世のため人のために、鎧を振うて居る方が、此の實之助にも心安いと云ふものぢや。さらば、了海どの、剣貫の開くまでは、味方なれど。了海 おゝ、一寸でも、二寸でも、向うへ通りましたその節は、たゞ兩斷になさりませ。そなた様の本懐と、了海奴の本懐とが、成就する日が待ち遠しう御座りますわ。實之助 それ迄は、敵同志が肩を並べて、鎧を振ふも、又一興であらう。

(二人相見えて淋しく笑ふ)

第三場

時と場所 前と同じく洞門の内部。前場より一年餘を經過したる延享三年九月十日の夜。
情景 前場とやゝ異り、了海と實之助とが、相並んで舞臺の中央に座を占め、互にたゆまず鎧を振
つて居る。

實之助 えいつ!

了海 おゝつ!

實之助 えいつ!

了海 おゝつ!

實之助 (一寸手を休めて)

石工達は、はや去り申したな。

了海 (同じく手を休めて)

石工達も、今日は終日身を粉にして働きました。實之助様、そなたも
う休ませられい!もう九つを廻りましたわ。もうお引き上げなさいませ。

實之助 なかく。夜更くると共に、心神澄み渡つて精力は、又一倍ぢや。

了海 昨夜も、あのやうにお働きなされたものを、今宵はちと早目にお引き上げなさいませ。

實之助 それは、其方に云ひたいことぢや。六十に近い御坊より、尤きに、われらが引き上げてよい
ものか。

(鎧を振り上げて又「えいつ」と打ち下す)

了海 おゝつ。(と應じて打つ)

(暫く二人とも打ち續ける)

了海 (又手を止めて) 昨日石工の一人が、鎧音の合間に、かすかな鳥銃の音を耳にしたと申して居

つたが、御身様はお耳になされましたか。

實之助 身共は、鳥銃の音は、耳にせねども、一昨日の晩であつたか、かすかに瀨鳴の音を聞いたや

うに覺ゆれども、それも鎧を持つ手を休めてふとまどろんだ折の、夢かも知れぬのぢや。

了海 御身様が來られてから、もう一年は近い。あゝ待ち遠しい事で御座る。まして、此の一月二

月了海の身も心も、漸く衰へ果てまして、力も十が一も出ぬやうに成り申した。今日明日と頼まれ

ぬ命のやうに覺えまする。萬が一、鎧を持ちながら、息が絶え果てるなどの事がありましたら、身

の無念は兎も角、御身様に申譯のたゝぬことと、精神を勵ましては居りますれど、あゝ今は、はや

了海が辛抱の繩も切れ申した。あゝ岩よ。此の一念に微塵となれ。(烈しく打ち下す)

實之助 たゞ不転の勇氣ぢや。此期に及んで、退轉なさば九仞の功も、一日にかくるのぢや。心を

確にお持ちなされい。今となつては、たゞ精進の外は御座らぬ。えいつ! (烈しく打ち下す)

了海 いかにも、御身様の仰せの通ぢや。一下の鎧にも懈怠疑惑の心があつてはならぬわ。念彼觀音

力! おゝつ。(打ち下す)

(二人相並んで、烈しく打ち下す)

了海 あゝつ。(と鎧を捨て、右手を左手にて握る)

(二人手を取つて、月の光に見惚れる)

了海 (やがて念珠を取り出し、もみながら)

逆を許させ給へ。(泣きながら頭を下げる)

實之助 因警は昔の夢ぢや。手を擧げられい。

嬉しや。欣ばしや。

(二人川擁して泣くところにて)——幕——

南無頼生菩提!

俗名中川三郎兵衛様。了海奴が、悪

本懐の今宵をば、心の底より欣び申さう。あな嬉しや

藤 十 郎 の 戀

人物

坂田藤十郎

都萬太夫座の座元、三が津總藝頭と讃へられたる名人

霧浪千壽

立女形、美貌の若き俳優

中村四郎五郎

同じ座の立役

嵐三十郎

同上

澤村長十郎

同上

柏崎源次

同じ座の若女形

霧浪あふよ

同上

坂田市彌

同上

小野川宇源次

同じ座のわかしゆ形

藤田小平次

同上

仙臺彌五七

同じ座の道化方

服部二郎右衛門

同じ座の悪人形

金子吉左衛門

同じ座の狂言づくり

萬太夫座の若太夫 萬太夫座の持主

樂屋頭取

樂屋番 二三人

その他大勢の若衆形、色子など

宗清の女中大勢

宗清の女房お梶 四十に近き美しき女房

その他重要ならざる二三の人物

時

元祿十年頃

所

京師四條河原中島

第一場

四條中島都萬太夫座の座附茶屋宗清の大廣間。二月の末のある晩。都萬太夫座の役者達に依つて、

彌生狂言の顔つなぎの饗宴が開かれて居る。百目蠟燭の燃えて居る銀の燭臺が、幾本となく立て並べられて居る。舞臺の上手に床の間を後に、どんすの鏡蒲團の上に、悠然と坐つて居るのは、坂田藤十郎である。髪を茶筌に結つた色白の美男である。下には、鼠縮緬の引かへしを著、上には黒羽二重の両面芥子人形の加賀絞の羽織を打ちかけ、宗傳唐茶の疊帯をしめて居る。藤十郎の右には、一座の立女形たる霧浪千壽が坐つて居る。白小袖の上に紫縮緬の二つの重ねを著、天鷲絨羽織に紫の野良帽子をいたゞいた風情は、宛ら女の如く艶めかしい。二人の左右に、中村四郎五郎、嵐三郎、澤村長十郎、袖崎源次、霧浪あふよ、坂田市彌、小野川宇源次、藤田小平次、仙臺彌五七、服二郎右衛門、金子吉左衛門などが居ならんで居る。席末には若衆形や色子などの美少年が侍して居る。萬太夫座の若太夫は、杯盤の間を、取り持つて居る。

幕が開くと、若衆形の美少年が鼓を打ちながら、五人聲を揃へて、左の小唄を隆達節で歌ふ。唄人と契るなら、薄く契りて末遂げよ。もみぢ葉を見よ。薄きが散るか、濃きが先づ散るものでそろ。」

(歌ひ終ると、役者達拍手をして慰ふ。下手の障子をあげ、宗清の女中赤紙の附いた文箱を持つて出る)

女中 藤十郎様にお文がまゐりました。

若太夫 (途中で受取りながら) 火急の用と見える。(藤十郎に渡す)

藤十郎 (受取りて) おゝいかに、火急の用事と見えます。一寸披見いたします。皆の衆御免

なされませ。なに／＼漣子どの、巢林より、さて近松様からの書状ぢや。(口の中に黙讀する、最後に至りて聲を上げる) 此度の狂言われも心に懸り候まゝかくは急飛脚を以て一筆呈上仕り候、少長どのに仕負けられては、獨り御身様の不覺のみにてはこれなく、歌舞伎の濫觴たる京歌舞伎の名折れにもなること、ゆめ／＼御油断なきやう御工夫專一に願ひ上げ候。(暫く考へて又讀み返す) 京歌舞伎の名折れにもなること、うむ！ 何の仕負けてよいものか。はゝゝゝが、近松様も、此の藤十郎を思はるればこそ、いかい御心勞ぢや。

千壽 (言葉も女の如く) 左様でゝりますとも、此度の狂言には、道の近松様も、三日三晩、肝膽を碎かれたとの事ぢや。ほんに、仇やおろそかには思はれぬわいのう。

彌五七 (道化方らしく誇張した身振で) さればこそ前代未聞の密夫の狂言ぢや、傾城買にかけては日本無類の藤十郎さまを、今度はかつきりと氣を更へて、密夫にしようとする工夫ぢや。傾城買の戀が春の夜の戀なら、之はきつい暑さの眞夏の戀ぢや。身を焦すほど烈しい戀ぢや。

四郎五郎 夏の日の戀と云ふよりも、恐ろしい冬の戀ぢや、命をなげける戀ぢや。

三十郎 命がけの戀ぢやとも。まかり違へば、粟田口で磔にかゝらねばならぬ恐ろしい命がけの戀ぢや。

源次 昨日も宮川町を通つて居ると、われらの前を、香具賣らしい商人が、二人聲高に話して行く。傾城買の四十八手は、何一つ心得ぬことのない藤十郎様が、密夫の所作を、どなに仕活すか、さぞ見物衆をアツと云はせることだらうと、夢中になつての高話ぢや。

長十郎 藤十郎の紙衣姿も、毎年見ると、少しは堪能し過ぎると、悪口を云ひくさつた公卿衆たちも今度の新しい狂言にはさぞ駭くこととゞりませう。

二郎右衛門 それにしても、春以來大入續きの半左衛門座の中村七三郎どのに、今度の狂言で一洵吹かせることが出来ると思ふと、それが何よりも樂しみぢや。半左衛門座に、引き付けられた見物衆の大波が、萬太夫座の方へ寄せ返すかと思ふと、それが何よりの樂しみぢや。

四郎五郎 さうは申すものゝ、新しい狂言だけに、藤十郎さまの苦心も、並大抵ではあるまい。昔から、衆道のいきさつ、傾城買、濡事、道化と歌舞伎狂言の趣向は、大抵極まつて居たものを、底から覆すやうな門左衛門さまの趣向ぢや。それに京で名高い、大經師のいきさつを、そのまま取入れた趣向ぢやもの、此の狂言が當らいで、何としようぞのう。

若太夫 (得意になりながら) 四郎五郎さまの云はれる通りぢや。(藤十郎の前に、わざわざ寄りながら) 前祝ひに、もう一つ受けて下されませ。傾城買の所作は、日本無類の御身様ぢやが、道ならぬ戀のいきかたは、又格別の御趣向がゞりませうな。はゝゝ。

藤十郎 (役者たちの談話を聴いて居る頃、ら、だん／＼不愉快な表情を示し始めて居る。若太夫の差した杯を、だまつたまゝ受けて飲み乾す)

千壽 (藤十郎の不機嫌に氣が附いて、やゝ取りなすやうに) ほんに、若太夫の云ふ通り、藤十郎様にはその邊の御思案が、もうちゃんとして居る筈ぢや。われらなどたゞ藤十郎様を頼りにして、傀儡のやうに動いて行けばよいのぢや。

若太夫 (千壽の取りなしに力を得たやうに) 今度の狂言に比べますと、大當りだと云ふ傾城淺間ヶ嶽の狂言などは、淺墓な性もない趣向でムります。密夫の狂言とは遠に門左衛門様でムります。それに附けましても、坂田様にはかうした變つた戀の覺えもムりませうな、はー、はー……

藤十郎 (先刻から、益々不愉快な惱ましげな表情をして居る。若太夫の最後の言葉に傷つけられたやうにむつとして) 左様なこと、何のあつてよいものか。藤十郎は、生れながらの色好みぢやが、まだ人の女房と懇ろした覺えはムらぬわ。

若太夫 (座興の積りで云つたことを眞向から、突き放され、興さめ黙つてしまふ)

千壽 (再び取りなすやうに) ほんに、坂田様の云はれる通りぢや、此の千壽とても、主ある女房と懇ろしたことはないわいな。

他の役者たち (皆一齊に笑ふ)……

彌五七 それは誰とても同じ事ぢや。女早りがすれば格別、主ある女房に云ひ寄つて、危い思ひをするよりも宮川町の唄女、室町あたりの若後家、祇園あたりの花車、四條五條の町娘、役者の相手になる上藤たちは、星の數ほどあるわ。はー、はー。

源次 だがのう。一盜二妾三婢四妻と云うて、盗み喰ひする味は、また別ぢやと云ふほどに、人の女房とても捨てたものではない。

長十郎 さては、そなたには覺えがあると見える。

源次 何の覺えがあつてよいものか。だがのう、磔が恐れれば、世に密夫の沙汰は絶えようものを。

絶えぬ證據は、今度の狂言に出るおさん茂右衛門ぢや。色事の道は又別ぢや。はー、はー。

若太夫 (自分の悄氣たことを、隠さうとして) 座が淋しい。さあ……若衆達、連舞など舞はしやんせ。

三四人の若衆 あいのう。(立つて舞ひ始める)

藤十郎 (黙々として、ひそかに狂言の工夫をめぐらす如き有様なりしが、一座の注意が連舞に惹かれたる間に、ひそかに座を立つ。正面の障子をあけて、靜かに廊下に出づ)

(若衆達は、舞ひつゞけて居る。鼓の音が、烈しく賑かになる。役者たちも、浮れ氣味になる)

彌五七 (可笑しき様子にて立ち上りながら) わしも連舞ひの群に入らうぞ。

四郎五郎 美しき若衆達と、禿げた彌五七どの。これは一段と面白い取り合はせぢや。鼓はわしが打たうぞ。

(若衆達と一緒に彌五七道化たる身振にて舞ふ。皆笑ひさぐめく裡に、舞臺廻る)

第二場

宗清の離座敷。左に鴨の河原の一部が見える。右に母屋の方へ續く長い廊下がある。絹行燈の光が美しい調度を艶かしく照して居る。

幕が開くと、藤十郎は右の廊下を、腕組みをしながら歩いて来る。時々、立止まつて考へる。廊下の柱に靠れて、考へる。又々、二三步、歩みながら、簡単な所作の形を附けて見たりする。漸く離

座敷に来る。障子を開けて、人は居らぬかと確めた後靜に這入る。懐中から書拔きを取出す。

藤十郎 (書拔きを讀みながら、形を附けて見る) かくなり果つるからは、縦令水火の苦しきも…… (工夫附かざる如く、書拔きを投げ出して考へ始める。立つて女の手を取る如き形をして見る。又書拔きを開いてぢつと見詰める) 死出三途の道なりとも、御身とならば厭はざこそ…… (又絶望したる如く、書拔きを投げ捨て、頭を抱へて沈思する。氣を更へて立ち上り、無言にて動いて見る。工夫遂に附かざる如く、後へ手を突いて坐りながら、低い嘆息の言葉を洩す。到頭工夫を一時中止したる如く、床の間に置いてあつた脇息を手を延ばして取り、それに右の脇を寄せながら、身を横にする)

(暫く何事もない。母屋の大廣間で打つて居る鼓の音や、太鼓の音などが、微かに聞えて来る。藤十郎は、靜に目を閉ぢる。ふと廊下に人の足音が聞える。藤十郎は、一寸目を開き、又書拔きを顔に當て、寢た振をしてしまふ。廊下に現れたのは、宗清の女房お梶である。足早に近づくと、何の會釋もなく障子を開ける。藤十郎の姿を見て駭く)

お梶 あれ、藤様で△りましたか。いかい粗相をいたしました。御免下さりませ。(直ぐ去らうとする。ふと、氣が附いたる如く) ほんとに女子共の氣の附かぬ。このやうに冷える所で、さうして後座つては、御風邪など召すとわるい、どれ、私が夜の具をかけて進ませう。(部屋の片隅の押入から夜具を出さうとする)

藤十郎 (宗清の女房であると知ると、起き直つて居ずまひを正しながら) お、これは、御内儀でありましたか。いかい御雑作ぢやのう。

お梶 何んの雜作で御座りませう。さあ横になつてお休みなさりませ。

(藤十郎はふと、お梶の顔を見る。色のくつきりと白い細面に、眉の跡が美しい。最初は恍然として居た藤十郎の瞳が、だん／＼險しく／＼なつて来る。お梶は、藤十郎の不思議な緊張に少しも、氣附かぬやうに、羽二重の夜具を藤十郎の背後からふうはりと著せる)

お梶 さあ、お休みなさりませ。彼方へ行つたら、女どもに水なと運ばせませうわいな。(何氣なく去らうとする)

藤十郎 (瞳がだん／＼光つて来る。お梶の去るのを、ぢつと見て居たが、急に思ひ附いたやうに後から呼びかける) お梶どの。お梶どの。ちと待たせられい。

お梶 (一寸駭いたが、併し無邪氣に) 何ぞ御用があつてか。(と坐る)

藤十郎 (夜具を後へ押しやりながら) ちと、御意を得たいことがある程に、もう少し近く來てたもらぬか。

お梶 (少し不安を感じたる如く、もじ／＼して餘り近よらない。が、やはり無邪氣に) 改まつて、何の用ぞいのう。おほ／＼／＼。

藤十郎 (低いけれども力強い聲で) ちと、そなたに聞いて貰ひたい仔細があるのぢや。もう少し、近く進んでたもれ。

お梶 藤様としたことが、又眞面目な顔をして何ぞ、てんがうでも云ふのぢやらう。(ゐざり寄りながら) から進んだが、何の用ぞいのう。

藤十郎 (全く眞面目になつて) お梶どの、今日は藤十郎の懺悔を聴いて下されませぬか。この藤十郎は二十年來、そなたに隠して居たことがあるのぢや。それを今日は是非にも聴いて貰ひたいのぢや。思ひ出せば古い事ぢや、そなたが十六で、われらが二十の歳の秋ぢやつたが、祇園祭の折に、河原の掛小屋で、二人一緒に、連舞を舞うたことがあるのを、よもや忘れはしやるまいなあ。(ちつとお梶の顔を見詰める)

お梶 (昔を想ふ如く、やゝ恍然として) ほんにあの折はのう。

藤十郎 われらが、そなたを見たのは、あの時が初めてぢや。宮川町の歌女のお梶どのと云へば、いかに美しい若女形でも、足下にも及ぶまいと、兼々人々の噂には聴いて居たが、初めて見れば聞きしに勝るそなたの美しさぢや。器量自慢であつたこの藤十郎さへ、そなたと連れて舞ふのは、身が退けるほどに、思ふたのぢや……(ぢつと、さし俯く)

お梶 顔を火の如く赤くしながら、さし俯いて言葉なし)

藤十郎 (必死に緊張しながら) 其時からぢや、そなたを、世にも稀なる美しい人ぢやと思ひ染めたのは。

お梶 (差し俯きながら、愈々うなだれて、身體をかすかに、わなゝかせる)……

藤十郎 (戀をする男とは、何うしても受取れぬほどの澄んだ冷たい眼附で、顔さへ擽げぬ女を、刺し透すほどに、鋭く見詰めたが、聲丈には、烈しい熱情に顔へて居るやうな響を持たせて、そなたを見染めた當座は、折があらば云ひ寄らうと、始終念じて居たものの、若衆方の身は、親方の掟が厳し

うてなあ、寸時も己が心には、委せぬ身體ぢや。たゞ心丈は、焼くやうに思ひ焦がれても、所詮は機を待つより外はないと、思ひ諦めて居る内に、二十の聲を聞かずに、そなたは此家の主人、清兵衛殿の思はれ人となつてしまはれた。その折のわれらが無念は、今思ひ出しても、此の胸が張り裂くるやうに、苦しうおぢやるわ。(かう云ひながら藤十郎は座にも堪へぬげに、身悶えをして見せる。が、彼の二つの眸だけは爛々たる冷たい光を放つて女の息づかひから、容子を恐ろしき迄に、見詰めて居る)

お梶 (やゝ落着いた如く、顔を半ば上げる。一旦蒼ざめ切つてしまつた顔が、反動的に段々薄赤くなつて來て居る。二つの眸は火の如く凄じい)……

藤十郎 (言葉丈は熱情に顔へて) 人妻になつたそなたを、戀ひ慕ふのは、人間の道ではないと心で強う制統しても、止まらぬは凡夫の思ぢや。そなたの噂をきくに付け、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたのことを、忘れた日はたゞ一日もおぢやらぬのぢや。(彼は舞臺上の演技にも、打ち勝つたほどの巧みな所作を見せながら、而も人妻をかき口説く恐怖と不安とを交へながら、小鳥の如く辣んで居る女の方に詰めよせる) が、此の藤十郎も、縦令色好みと云はるゝとも、人妻に戀をしかけるやうな非道な事はなすまいと、明暮燃えさかる心を、ぢつと抑へて來たのぢやが、われらも今年には四十五ぢや。人間の定命はもう近い。これほどの戀を……二十年來忍びに忍んだこれほどの戀を、此世で一言も打ち開けいで、何時の世誰にか語るべきと、思ふに付けても、物狂はしうなる迄に、心が擾れ申してかくの有様ぢや。のう、お梶どの、藤十郎をあはれと思召さば、たつた

一言情ある言葉を。なあ！ お梶どの。(狂ふ如く身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せる。が瞳だけは刃のやうに澄み切つて居る)

お梶 わ：：つ。(と云つたまゝ泣き伏してしまふ)

藤十郎 (泣き伏したお梶を、ちつと見詰めて居る。その唇のあたりには、冷たい表情が浮んで居る。が、それにも拘らず、聲と動作とは、戀に狂うた男に適はしい熱情を持つて居る)のうお梶どの。そなたは。藤十郎の嘘偽りのない本心を、聽かれて、藤十郎の戀を、あはれとは思はぬか。二十年來、忍びに忍んで來た戀を、あはれとは思はぬか。さりとは、強いお人ぢやのう。

お梶 (すゝり泣くのみにて答へず)：：：

(二人とも、おし黙つたまゝで、暫くは時刻が移る。灯を慕つて來た千鳥の、銀の銚を使ふやうな聲が手に取るやうに聲えて來る)

藤十郎 (自嘲するが如く、淋しく笑つて) これは、いかい粗相を申しました。が、此の藤十郎の切ない戀を情なくなさるとは、さても氣強いお人ぢやのう、舞臺の上の色事では、日本無双の藤十郎も、そなたにかゝつては、たはいもなう振られ申したわ。はゝゝゝゝゝゝ。

お梶 (ふと顔を上げる。必死な顔色になる。低い消え入るやうな聲で) それでは藤十郎 今仰しやつたことは皆本心かいな。

藤十郎 (道に必死な蒼白な面をしながら) 何の、てんがうを云うてなるものか。人妻に云ひ寄るからは命を投げ出しての戀ぢや。(浮腰になつて居る、彼の膝が、微かに顫へる)

(必死の覺悟を定めたらしいお梶は、火のやうな瞳で、男の顔を一目見ると、いきなり傍の絹行燈の灯を、フツト吹き消してしまふ。闇の裡に恐ろしい躊躇と沈黙とが、二人の間にある。お梶は身體を、わな／＼顫はせながら、男の近づくのを待つて居る。藤十郎の顔も眼が上づつてしまつて、足がかすかに顫へる。漸く立ち上るお梶の方へ歩みよる。お梶必死になる。が、藤十郎は、その傍をスルリと通りぬけて、手探りに廊下へ出る)

お梶 (男の去らんとするに、氣が附いて) 藤十郎！ 藤十郎！ (と低く呼びながら、追ひ縋らうとする)

(藤十郎、お梶の追ふのに氣附いて、背後の障子を閉める。お梶障子に縋り附いたまゝ、身を悶えつゝ泣き崩れる。藤十郎やゝ狼狽しながら、獸の如く足早に逃去る。お梶の泣く聲に交じるやうに千鳥の聲が聞える)

第三場

第二場より七日ばかり過ぎたる一日。萬太夫座の樂屋。上手に役者達の部屋々々の入口が見える。その中で一番目立つのは、梅鉢の紋の附いた暖簾のかゝつた藤十郎の部屋である。眞中に、樂屋番の部屋がある。下手に萬太夫座の舞臺に通ずる出入口がある。淺黄の暖簾が垂れて居る。彼方の舞臺にては幕が開く前と見え、鼓と太鼓と笛の音とが繼續して聞える。幕が開くと、狂言方や下廻りの役者達が、五六人左右に忙しく行き交ふ。樂屋番が、衣裳腰の物などを、役者の部屋へ運んで行

く。
萬太夫座の若太夫が、藤十郎の部屋から出て来る。出會頭に頭取と挨拶する。
頭取 おめでたうムんす。今日も明六つの鐘が鳴るか鳴らぬに、木戸へは一杯の客衆で入ります。
若太夫 めでたいのう。ほんに藤十郎どのぢや。密夫の身のこなしが、とんとたまらぬと京女郎たちの噂話ぢや。

頭取 これでは、半左衛門座の人々も、あいた口が、閉がらぬことで入ります。この評判なら百日はおろか二百日でも、打ち續けるは定で入りますのう。
若太夫 何にしてみてもめでたい事ぢやのう。樂屋中よく氣を付けてのう。粗相のないやうにのう。こんな大入りの時に限つて、火事盗難なその過ちがありがちでのう。
頭取 へい、合點で入ります。

(二人左右に別れる。下手の出入口から、丁稚を連れ手代風の男が入つて来る)

手代風の男 (頭取を呼びかけて) あ、もし、藤十郎様のお部屋は、何處で入りますか。

頭取 どちらからぢや。お部屋は直ぐ彼處ぢやが。

手代風の男 四條室町の備前屋の手代で入ります。
頭取 お、室町の大盡のお使ひで入りますか。さあ！ お通りなさりませ。左から二つ目の部屋ぢや。

手代風の男 なるほどな、梅鉢の紋が附いて居りますのう。

(手代風の男、藤十郎の部屋へはひつて行く。藤十郎の部屋の直ぐ隣から、大經師以春に扮した川村四郎五郎と召使お玉に扮した神崎源次とが出て来る)

四郎五郎 (源次の袖を捕へながら、一寸所作をして) 何うも、お前にじやれかゝる所がうまく、行かぬのでのう。今日は三日目ぢやが、まだ形が附かぬのでのう。昨日藤十郎どのに、教へを乞うて見ると、自分で工夫が肝心ぢやと、云はしやれた。さあ、幕の開く前に、もう一度稽古に附き合つてたもらぬか。

源次 お、安い事ぢや。何度でも付き合はう。藤十郎どのに、工夫を訊ねると何時も、強い小言ぢや。みんな自分で工夫せいと、あの方の極まり文句ぢや。

四郎五郎 お、一昨年の事ぢや、山下京右衛門が、江戸へ下る暇乞ひに藤十郎どの、所へ来て、わがみも其許を萬事手本にしたゆゑに、藝道もずんと上達しましたと云はれると、藤十郎どのは何時ものやうに、一寸顔を擧められたかと思ふと、「人の眞似をする者は、その眞似るものよりは必定劣るものぢや。そなたも、自分の工夫を專一にいたされよ」とにこりとみせず、眞向からぢや。あの折の京右衛門どの、てれまき方を、思ひ出すと今でも可笑しくなるのぢや。

源次 藤十郎どのから、お小言を喰はぬ前にもう一工夫して見よう。
四郎五郎 (急に芝居の身振をなし) これさ、どつこいやらぬ。本妻の悋氣と鑑鮎に胡椒はおさだまり、何とも存せぬ。紫色はおろか、身中が、かば茶色になるとても、君ゆるならば厭はぬ。

源次 (應じて芝居の身振りをしながら) どうなりとさしやんせ。こちやおさん様に云ふほどに。あれ

おさん様く。

四郎五郎 (やはり身振りを続けながら) やれやかましい其外おさんわにの口、くちの序に口々 (急に役者に立ち返りながら) 何うも茲の所がうまく行かぬのぢや。

(芝居茶屋の花車女に案内され、若き町娘下手の入口より入つて来る)

花車女 おゝ源次さま。丁度よいところぢや、それく此間一寸お耳に入れた東洞院の近江屋のお嬢様で△ります。

源次 (四郎五郎に、氣兼ねをしながら) もう、幕が開きますほどに、又にして下さりませ。

花車女 ほんに情ない事を、いはれますのう。折角樂屋まで來られましたのに、一寸言葉なりと交はして下さりませ。

源次 (もじくしながら、娘に對して) ほんに、ようお出でなさりました。

町娘 (同じく恥ぢらひながら、黙つて頭を下げる)

花車女 さあ、一寸私の茶屋まで、入らせられませい。ほんの一寸ぢや、手間はとらせませぬほどに。

源次 さうはして居られませぬわい。もう直ぐ開きます。

花車女 何のまだ開きますものかいのう。さあ御座りませ。(無理に源次の手を取りて、下手の入口より娘を伴うて去る)

(助右衛門に扮した仙臺彌五七、手代丁稚に扮した三四人の俳優と揃うて、右手より出て来る)

甲 この頃の娘は、油斷がならぬ事ぢや。役者を慕うて樂屋まで、のめくとい入つて来る。

乙 それにしても、袖崎どのは果報ぢや。男知らずの町娘から、あのやうに慕はれては、満更憎うはあるまい。はゝゝゝ。

丙 それにしても、見物人のどよみやう。小屋が、割れるやうな大入と見える。

四郎五郎 (相手の源次を失うて、ぼんやり立つて居たが) 江戸の少長に、此の大入りの様子が見せたいのう。

彌五七 ほんにさうぢや。此の狂言に比べると、淺間ヶ嶽の狂言などは、子供だましぢや。

四郎五郎 淺間ヶ嶽に立つ煙もだんく薄うなつて行くのぢや。はゝゝゝ。(霧浪千壽、美しいおさんに扮して、靜かに部屋から出て来る。金剛が附いてゐる)

彌五七 昨日一寸ある所で、聞いた噂ぢやが、藤十郎どのは、今度の狂言の工夫に惱んだ揚句、ある茶屋の女房に戀をしかけ、密夫の心持や、動作の形を附けたと云ふ事ぢやが、眞實かのう。

四郎五郎 わしは、しかとは知らぬが、千壽どのは、聞いたであらう。その噂は眞實かのう。千壽 そんな噂は、わしも人傳には聞いたがのう。藤様は、口をつぐんで何も云はれぬのでのう。があの宗清顔つなぎの酒盛があつた晩の事ぢやが、藤様は狂言の工夫に屈託して、酒宴の席を中座され、そなた達は、追々酔ひつづれて、別間へ退かれた後の事ぢやのう。藤様が、蒼い顔して、息を切らせながら、酒宴の席へ歸つて來られると、立てつけに、大杯で三四杯呷つてから云はれるのに、「千壽どの安堵めされい。狂言の工夫が附き申した。」と、云はれたが、平生の藤様とは思はれぬほどの恐い顔附ぢやつたが、あの晩に……。(と千壽が首を傾けて居るとき、下手の入口から宗清

のお梶が、ひそかに入つて來るのに氣がついて、口をつぐむ)

彌五七 (役所の道化振りを發揮して) これは、これはお梶どの。ようお出でなされました。一寸お尋ねします。藤十郎どのが、狂言の稽古の相手は貴女様では御座りませぬか。

お梶 (緊張しながら、面もつゝまじやかに) 何で御座ります。藪から棒のお尋ねで御座りますのう。

彌五七 (矢張り道化した身振りで) 藤十郎どのが、今度の狂言の稽古に、人の女房に偽りの戀をしかけ、靡くと見て、逃げたとの事で御座ります。もしやお心當りが御座りませぬか。

お梶 (つゝまじやかに、態度をみださず) 偽りにもせよ、藤十郎様の戀の相手に、一度でもなれば、女子に生まれた本望で御座りますわい。

彌五七 よくぞ仰せられた。はゝゝ。

千壽 (やゝ取りなすやうに) ほんに、日頃から貞女の尊高いそなたでなければ、さしづめ疑がかゝる所で御座りますのう。樂屋へ御用で御座りますか、さあお通りなさりませ。

お梶 あのう、嵐三十郎さまに、お客様からの言傳を。
千壽 さうで御座りますか。さあ、お通りなさりませ。

(お梶會釋して通り過ぎる。役者の部屋の方へ行かんとして、部屋を立ち出でたる藤十郎と顔を見合はす。二人とも、瞬間に立ち辣む。お梶一寸目禮して行き過ぎる。藤十郎、暫く後姿を見詰める)
四郎五郎 (藤十郎の立ち出でたるを見て) 今も、そなた様の尊をしてぢや。今度の狂言について、樂

屋の内外に擴がつた噂を、御存じか。

藤十郎 (座元らしい威嚴を失はないで) 一向聞きませぬな。

彌五七 噂の本尊のそなた様が知らぬとは、面妖な。

千壽 藤十郎には、云はぬがよいわいな。

彌五七 云はいでも、何時かは知れる事ぢや。藤十郎さま、お聞きなさりませ。今度の狂言の工夫にそなた様がある人妻に戀をしかけたとの噂ぢや。

藤十郎 (快活に笑つて) 埒もない穿鑿ぢや。いつぞやも、わしが嵐三十郎の手負武者を介抱すると、

あまり手際がよいと云うて、やれ藤十郎は外科の心得があるなどとやかましい沙汰ぢや。心得がなうても、心得のあるやうに眞實に見せるのが、役者の藝ぢや。油賣りになれば、油賣つた心得がな

うても、油賣りになつて見せるのは藝ぢや。密夫の心得がなうて、密夫の狂言が出来ねば、舞臺の上で公卿衆

心得がなうては盗人の狂言は出来ぬ譯合ぢや。公卿衆になつた心得がなうては、舞臺の上で公卿衆

にはなれぬ譯合ぢや。埒もない沙汰ぢや。口性ない京童の埒もない沙汰ぢや。そのやうな沙汰が傳つては、藤十郎の身近に居る人様のお内儀に、どのやうな迷惑をかけようも計られぬわ。かまへて、打ち消して下さりませ。

千壽 ほんに、藤十郎様が云はれる通りぢや。
彌五七 追は藤十郎様ぢや。なるほどなあ。心得がなうては狂言が出来ぬとなれば、役者は上は攝政關白から下は下司下郎のはしまで一度はなつて見なければ、役者にはなれぬ筈ぢや。なるほどな

あ。

手代風の男（藤十郎の部屋から出て来て）それでは、失禮いたしますで御座ります。
藤十郎 御苦勞で御座りました。大盡様に、よう禮を云うて下さりませ。

（手代風の男丁稚と共に去る。幕の開くこと愈々近くなりしと見え、道具方樂屋方等の往復繁くなる）
藤十郎（千壽を顧みて）千壽どの。あの闇の中で、そなたと初めて手を取り合ふとき、今少し逆上した風を見せてたもらぬか。女はあのやうなときは、男よりも身も世もあらぬやうに逆上するものぢやほどのにのう。

千壽（素直に）あいのう、合點ぢや。今日は作者の門左衛門様も、御見物ぢやほどのに、一段心を籠めて見ますわいのう。

藤十郎 さあ、もう幕が開くに程もあるまい。

（千壽の手を取りて行かんとす。急に、樂屋内が騒ぎ出す。自害ぢや。自害ぢや。女の自害ぢや。」と道具方や下廻りの役者達、役者の部屋の方へ駆け込む）

頭取（周章て、駆け込みながら）あゝ、聲を立て、はならん。見物が騒ぎ出すと、舞臺の方がめちやくちやぢや。靜かに、靜かに。（皆の後から奥の方へ這入る）

彌五七（やつぱり道化方らしいやゝ上ついた態度で）はて面妖な。自害、しかも女の自害とは。樂屋には、牝猫一疋居らぬ筈ぢやがのう。

千壽（同じく不思議さうに）女の自害！ はて女の自害！

藤十郎 思ひ當ることある如く、やゝ蒼白になりながら黙つて居る……

（道具方樂屋番など、お梶の死體を擔いで来る。口々に「宗清のお内儀ぢや」と云ふ）

千壽（駭いて駆け寄りながら）なに！ 宗清のお内儀！（ふと氣が附いたやうに、藤十郎の方を振り返る）

藤十郎（千壽の振り返つた眼を避くるやうに、目をそらして居る）……

彌五七 いかにも宗清のお内儀ぢや。短刀で胸の下をたつた一突ぢや。

四郎五郎 今茲で話して行かれたのに、ほんの瞬く間の最期ぢや。藤十郎さま、御覽なされませ、いかな仔細かは分りませぬが、女子には稀な見事な最期ぢや。

藤十郎（引き附けられたやうに、歩み寄りながら、ぢつと死顔に見入る。言葉なし）……

若太夫（息せきながら、駆け込んで来る）何事ぢや。何事ぢや。なに女の自害！ やあ宗清のお内儀ぢや。いかな仔細かも知れぬが、なにも萬太夫座の樂屋で、自害せいでもよいのを。

千壽 ほんに、樂屋に死に、來ないでも。ふと、藤十郎の顔を見て黙る）……

彌五七 こんな不吉な事が、世間知れると、折角湧き立つた狂言の人氣に、傷が附かぬものでもない。

若太夫 ほんにそれが心配ぢや。皆様、他言無用にして下されませ。

藤十郎（黙つて死骸を見詰めて居たが、急に氣を更へて）何の心配な事があるものか。藤十郎の藝の人氣が女子一人の命などで傷つけられてよいものか。千壽の手をとりながら）さあ、千壽どの舞

臺たいぢや。

千壽 (眞實の女の如くやさしく) あいのう。

藤十郎 (つか〜と舞臺の上へ急いだが、また引返して死體を一目見、遂に想ひ決したる如く、退場す。同時に幕の開く拍子木の音が聞えて靜かに幕が下る) ——幕——

茅の屋根

人物

細木香之進

二十八、千三百石の旗本の嫡子

おふみ

二十二、その情人、元は新吉原桔梗屋の遊女九重

本多晋三郎

香之進の友人

おかく

桔梗屋の女房

獵師、下男女中その他二三の人物

時

江戸の極く末期

所

八王子に近き秩父の山中

舞臺情景

江戸を駈落した細木香之進と、その情人おふみとの佗住居。小唄の文句の如く竹の柱にて

はなけれども、屋根はまさしく茅にて葺きたり。壁、天井などの様子それに準じて、みすぼらし。

おふみ、色やゝ淺黒けれども、背高く眸美しき女。庭先にしやがみて、薪を小さく割つて居る。香

之進、色白く瘠形なる男、獵師の如き服装をしながら、縁側に腰打ちかけ、丸薬を調合して居る。

秋更けたる山家の景色、なんとなく物かなし。

おふみ (凡てに倦きたるが如き容子) あ! あ! 堅い薪だわね。乾し方が足りないのかしら。手の方が粉々になつてしまひさうだわね。

(香之進、無言。おふみも亦、黙つて割りつゞける)

あふみ あつ! (あやまつて、少しく手指を傷けたる如く) お、いたい! いたい! すんでのこ
とで大切な人指し指を斬つてしまふところだつた。お、いたい!

(頼りに香之進の注意を惹かんとすれども、香之進は黙つて居る)

おふみ (香之進に、つゝかゝるやうに) お、いたい! 貴方、何とか云つて下さらないの。私が先刻
からいたいくと云つて居るのが、分らないの。

香之進 (冷やかに見やり) 大仰だ。

おふみ まあ! 邪険な人。妾なんか、指の一本位無くしてもいゝと云ふの。

(香之進黙つてゐる)

おふみ え、無くなつてもいゝと云ふの。

香之進 無くしてもいゝとは云ひやしない。だが騒ぎ方が大仰だからさ。

おふみ だつて、この位のことでも、騒がなけりや、こんな山家では、外に騒ぐことなんか、ないぢやないかえ。(それでも、指が痛むと見え、度々嘗めて居る)

香之進 (一寸不快な表情) うむ! こんな山家か。お前は、到頭本音を吐いたね。こんな山家が、
お前の鼻につきかけて居るのは分つて居る。

おふみ (やゝ不貞くされて) だつてさ、毎日起きても寝ても同じことばかりだもの。それでも、貴
方が傍に居て下さるときは、いゝわ。貴方を送り出して、一人ぼんやりして居るときは、本當に情

なくなるわ。

香之進 そんなことは、覺悟の前ぢやないかえ。

おふみ でも、かうまでとは、思つて居なかつたわ。手鍋下げても、いとやせぬなど云ふて、唄の文

句では、粹だけれども、やつて見ると、つらいわねえ。

香之進 (やゝ沈黙に) 山家丈が、鼻に付いて居るのなら、いゝのだが、この頃のお前にはこの香之
進までが鼻に付いて居るだらう。

おふみ (開き直つて) え、何んですつて。もう一度云つて下さい。

香之進 幾度でも云つてやる。この頃お前には、この香之進までが、鼻に付いて居るだらう。

おふみ まあ! 貴方が鼻に付いて居る。香さん、何時貴方が鼻に付いたと云ひました。何時、妾が
そんなことを云ひました。鼻に付いて居る男のために、何うしてこんな苦勞が出来るのです。貴方

と一緒に思へばこそ、どんな苦勞でも、辛抱して居るのぢやないかえ。
香之進 うむ! こんな苦勞か。俺が鼻に付いて居ればこそ、この暮しが苦勞になるのだ。そんな筈
ぢやなかつたのだが。

おふみ まあ！ ひどい！ たつた、一年や二年で鼻に付くやうな男となら、花のお江戸を駆落して
こんな山奥へ来るものかねえ。思ふ男と晴れて添ふなら、どんな……。

香之進 うるさい！ 云はなくても分つて居る。

おふみ お前が分つて居ないから、云ふのぢやないか。

香之進 おれ達が、江戸を駆け落ちたときの、お互の氣持はさうだつた。お前が、青屋佐兵衛に、
身請けされると云ふのを聞くと、俺はカツとなつた。お前を人手に渡すのが、俺には堪らなかつた。
お前に、心中を相談すると、お前は直ぐ死ぬ氣になつて呉れた。あのときに、死んで居ればよかつ
たと、今俺はつくづく思ふのだ。

おふみ だつて、いざと云ふ間際になつて、未練が出たのは、お前さんぢやないかえ。

香之進 うん俺だつた。おれは、お前が死ぬほど思つて居て呉れると云ふことが分ると、死ねなくな
つたのだ。こんななまで、俺を愛して呉れる女となら、どんな山奥でも……。

おふみ 皆まで、云はなくつて、それで分つてるのぢやないの。妾の氣持、貴方の氣持も、お互に
さうした氣持で、暮して行つて居るのだから、いぢやないの。

香之進 (悵然として) い、筈だつたのだ。お互の心さへ確かなら、たとひ山の奥の佗住居で、お前
に手鍋を下げさせても、いつまでも楽しく、十年も二十年も、いや百年でも、千年でも、楽しく暮
して行けると思つたのだ。

おふみ 思つたばかりぢやない。楽しく暮して居るのぢやないの。

香之進 嘘を云へ、胡魔化すな。お前が、楽しさうに暮して居たのは、茲へ落着いた當座、ホンの三
月か四月の間だつた。俺が射つて来た山鳥を、お前が嬉しがつて、料理して小鍋で煮たり、俺が掘
つて来た山の薯をお前が馴れぬ手付で摺鉢で摺つて欣んだのは、ホンのその當座だつた。半年経
つか経たないかに、お前はもうこの暮しが鼻に付き出したのだ。今年の春、山櫻がチラホラ咲き出
した頃だつた。お前は、縁側に腰をかけながら、もう、廊でも櫻が咲いて道中がある時分だな」と
しみじみ云つたのを、覚えて居るだらう。あの頃からだ。お前の心が、變りかけて居るのを知つた
のは、お前は、それを口に出すまいとした。が、お前の身中で、それを喋つて居るのだ。この
頃は、朝夕に二度か三度かは、廊の話をしないことはないぢやないか。茲へ来たときに、お互ひに
何と約束したのだ、一切昔の話はすまいと。お前の廊を慕ふ心が慕る毎に、お前の心が俺を離れて
行くのを、感ぜずには居られないのだ。

おふみ (急所を衝かれて、やゝタジ／＼となりながら) まあ！ あんなことを。一年や二年で、お前
から離れるやうなそんな淺臺な心だと思ひかえ。お前と一緒に江戸を駆落するときから、世間
も義理も人情も、みんな捨て、しまつた妾ぢやぞえ。今更、お前と離れて、何處に行く所がある
と、お思ひだえ。廊の話をするのが、悪いんだつて。でもこんなにする仕事も遊びもなければ、昔
のことでも話するより外、仕様がなないぢやないかえ。

香之進 (黙すること、多時) うん、それだ。昔の事でも話するより外に仕方がない。うん、それ
だ。お前の云ふことにも無理はない。昔の話をするお前を、とがめるのは俺が無理だ。どんな強い

戀でも、それだけでは人間は暮していけないのかな。どんな戀人同志でも、こんな山奥ぢや、お互ひに退屈せずには居れないのかな。退屈すると云つて、お前を叱る俺が無理なのだ。いくら、俺を思つて居て呉れても、俺が毎日のやうに、同じ姿で、鐵砲を携げて猪鹿を追ひ廻すのを見て居れば、だん／＼俺が鼻に付くのも尤もだな。

おふみ 何を、氣をお廻しだねえ。

香之進 いや、氣を廻すのぢやない。本當のことを云つて居るのだ。まして、お前は小さい時から、廓に育ち仇し男の數も知り、目のまはるやうな華美な暮しをして居た丈、こんな山家の暮しには、人一倍參るのだな。

おふみ (香之進の本當の心持には同情し得ざる如く) お前は、私と一緒に暮すのがいやにおなりかえ。

香之進 何を云つて居るのだ。だが、人間の心はもろいものだな。一緒に死なうとまで、張りつめた心が、かうもろく一年も経たない裡に、參つてしまふのかな。思ひ合つた男と女とが、心中すると云ふのも相手の心が變るのを恐れるからだ。いや自分の心が變るのを恐れるからだ。だが、おふみ、お前も桔梗屋の九重と云つて、仲の町では誰知らぬ者もない傾城だつた女ぢやないか。二人残した書置きに、なんと書いたのだ。たとひどんな、しがたい暮しをしても、見事添ひとげて見せると書いたぢやないか。まだ一年になるかならないかに、へこたれて、江戸へのめ／＼歸る譯にも行かねえぢやないか。

おふみ 何もへこたれないけれども、見て下さい、この両手を。わづか一年になるかならない裡に、こんな荒れてしまつたぢやないかえ。それに顔だつてこんな生毛が延びて、ざら／＼して居るのだもの。妾は、何も日髪日風呂の暮しが、したいと云ふのぢやないけれど、時にはお前に嫌はれない丈の、身だしなみはして見たいわねえ。

香之進 何のそんな心配なら、いらぬことだ。俺の爲めに、顔や手が荒れるのだもの。何の、お前を嫌つてよいものか。だが、心まで荒れて呉れるな。いゝか、もう少しの辛抱だ！ もう少し世間の噂が、静まつたらせめて上方へでも落ちて行つて、世間並の暮しはさせてやるからな。

(老人の獵師、柴折戸の外へ近づいて来る)

獵師 旦那！ 御用意は出来ましたかな。

香之進 茂重か。あゝ出来た！ 先刻から待つて居た。尾白澤の模様はどうだ。

獵師 居りますよ。今道で、與兵衛に逢ひましたがな。與兵衛の件が、昨日夕方松葉を蒐めて居ると、仔を三匹連れて、二十貫もある牝猪が、つい目の先を通つて行つたと云ひますよ。

香之進 今朝は鹿の鳴き聲もしきりに致して居つたな。

獵師 鹿なら、あすこ丈でも、何百頭と數へ切れますまい。

香之進 (銃を取上げながら) さうか。ぢや今日は、あふれはないな。ぢや、ふみ行つて来るよ。

おふみ 行つていらつしやいませ。

獵師 奥さま、御免下さい。

おかく ねえ、ふみちやん。今度わたしは来たのは、何もお前の追手として連れ戻しに来たのではないのだよ。わたしもお前は五つの年から、手懸にかけて育てたから、娘同様に思つて居るだらう。お前が、廊を出てからも、風につけ雨につけ、お前のことは忘れたことにはないのだよ。いつか一度は、お前に會ひたいと思つて居たのだが、つい此間八王子から歸つて来た馬道の古道具屋さんが、店へ来て、八王子在の山中に、旗本のお武士が、元吉原で、おいらんをして居たと云ふ美しい女と、佗住居をして居ると云ふ噂を聞いたと、話して居るのを、妾がちらりと耳にしたので、妾一人の胸に收めて、そつと本多様に話して見ると、てつきり二人に違ひない。俺は、ぜひ細木に會ひたいと思つて居る矢先だから、これから直ぐ訪ねて行くとかう仰つしやるので、妾もお前に會つて話したいことがあると云つて、お伴を願つて来た譯なの。八王子なら、二日宿りの旅だから、無駄になつてもいいと思つて、かうして訪ねて来たわけなの。

晋三郎 (ふと思ひ出したやうに) 細木は何處に行つた。

おふみ あの裏山へ行つて居ります。

晋三郎 うむ！ 裏山へ、何をしにだ。

おふみ 猪を、射ちに行きました。

晋三郎 猪を射ちに。千三百石の旗本の世継が、獵師の眞似をして居るのか。ハ、ハ、ハ、ハ。ぢや、内儀！ 俺が茲に居たのじゃ話しにくいだらう。俺は、これから香之進に會つて、別々に話をするから。

(裏山にて、銃聲きこゆ)

晋三郎 うむあれだな。

おふみ はい。

晋三郎 ぢや、直ぐ其處に居るのだな。それぢや、俺は直ぐ裏山へ行つて、香之進に會はう。何う行くのぢや。

おふみ (柴の戸のところまで送つて出て) あもう！ この森の中の道を、眞直に行くと小さい鎮守のお宮がありますから、そのお宮を左にとつて、右へへ登つて行くと尾白澤と云ふところへ出ます。其處に猪が来て居ると云つて先刻參つたので御座んす。

晋三郎 分つた。それぢや、山で會へなかつたら、直ぐ引歸して来るからな。

(晋三郎出て行く)

おかく ふみちやん、今日は相談があつて来たのだがねえ。お前、もう一度江戸へ歸る氣はないかえ、

おふみ (駭いて) ええ！

おかく 何もお前を、むりやり連れて行かうと云ふのぢやないから、安心しておくれ。たゞ、妾の云ふことを合點したら、一緒に行つておくれでないかえ。かう、突然云つちや分るまいけれども、今茲で香さんと別れて、別々になる方がお前の爲にも香さんのためにも、一等爲になると思ふのだがねえ。ふみちやんよく話してきかせて上げるが、お前さんが墮落ちした晩の青屋の旦那の男らしさと云つたら、廊中で感心しない者はなかつたよ。私の家で、追手を出さうとすると、青屋の旦那が

止めて、女の心が離れてしまつて居るのに、身體丈引き戻して何うするのぢや。身請の話が、纏つた後だから、たとひ女が逃げてても、身代金は俺が立派に拂つてやるとかうお云ひのだぞえ。あの時表沙汰にして御覽！ お前は直ぐ捕つて、どんな目に逢つて居るか分らないし、香さんのお身の上だつて何うなつて居るのか分らないのだぞえ。お前さん達が、こんな山の奥でも安穩に過して居れるのは、みんな青屋さんの俠氣からだと思ふのだがね。妾は、青屋の旦那の男らしさに感心したものだからお前を一度でも青屋の旦那の傍へさしあげないと、妾の義理が立たないとかう思つたよ。だが、考へて見ると、お前と香さんとは、四年越の深い仲で、お前が駆け落ちして、どんな山の奥でも添ひとげようと云ふ意氣は、涙の出るほど嬉しかつたから、青屋さんには濟まないと思ひながら、お前のことは、そのまゝにして置いたさ。ところが本多さんのお話ぢや、香さんがお前と江戸を落ちたとき、香さんのお家ぢや、親類中が寄り合つて、香さんを病氣引籠と云ふことにして、お上へ届けて置いたさうだが、香さんが江戸に居ないことが、段々目付衆に分つて来て、早く香さんがお家へ歸らないと、千三百石のお家が、何うなるか知れないと云ふのだよ。本多さんのお考へぢや、今何うしても香さんを連れ戻して、今度公方様が御上洛になるお伴の人数の中へでもお這入りになると、親御の勘氣も直り、お家も潰れないで濟むから、香之進に會つて、何うしてもおき伏せて、連れて歸るとかうお云ひだから、わたしもお伴をして、九重の方は妾が納得させますと云つて、かうして一緒に来た譯だが、どうだい、香さんを一生獵師で了らせるのが、お前の本望かい。お前は旗本のお家のお世継が、一生猪鹿を追ひ廻して居るのを傍で見て居て、心苦しくは思はないかい。

ないかい。

おふみ (さしうつむきて言葉なし)

おかく それにかうして、しがない暮しをして居る内に、暮しが不自由だから、何かにつけて夫婦喧嘩の種が多くなるし、お前だつて五日も十日も風呂に這入らないぢや、だん／＼器量が落ちて行つて、お前の可愛い香さんから、おしまひには鼻に付かれるのが、落ちやないかえ。

おふみ 全くねえ。

おかく どんなに好いた同志だつて、こんな狭苦しい小屋の中で、一年も二年も、五年も十年も、二人限りで顔を見合はして居りや、お互に飽きが来るのは當然ぢやないかえ。

おふみ それは、妾も考へないではないけれど。

おかく (勝ちほこつた如く) それに、青屋の旦那は、お前を妾にしようと云ふのぢやないのだよ。なくなつた奥さまの後に直さうと云ふのぢやないかえ。もうこの頃では、廊にもお見えにならず、それかと云つて後添ひをお取りになつたと云ふ噂もきこえず、何でもお前のことを、心の奥では忘れていらつしやらないと云ふ噂だよ。

おふみ (可なり動かされて) 妾、そんなお話をきくとどうしてよいのやら、分らなくなるわ。

おかく 分らないことはありやしない。自分のため、香さんのためを思へば、立派に分れておくれないか。可愛い男を、一生埋れ木にしてしまふのが、女の本望かしら。それに、お前青屋様の藏前のお屋敷を知つておいでかい。屋根はみんな銅で、葺いてあると云ふぢやないかえ。茅の屋根と

銅とぢや、よつほど段が違ふぢやないか。それに自分で、十人も三十人も男や女に、侍かれて「奥さま」で暮すのも、同じ一生なら、孰ちらがいゝかしら。それにお前は、青屋の旦那を満足も居なかつたぢやないか。

おふみ (心全く動きて) でも、妾の口から、香さんに切れると云ふことは云へないわ。

おかく 香さんは、本多さんがよく云ふさうだから、お前さんはたゞ別れると云ふ腹さへ、定めて置けばいゝのだよ。えゝ、別れて呉れる。

おふみ (黙つて居る)

おかく こんな山の奥で、そんなみじめな風をして居ちや、女に生れた甲斐がないぢやないか。桔梗屋の九重と云へば誰知らぬ人もない全盛を續けたお前が、そんな襦袢を着て居ちや、どんなに人目がないと云つても自分で恥しいとは思はないかえ。

おふみ もう、何も云つて下さいませ。あの方のため妾のため、思ひ切つて別れますわ。

おかく (満足して) おゝ、さう云つて呉れれば、こんな山の中へ来た甲斐があつたと云ふものぢや。着換もなにもないだらうと思つて、ホンのつまらないものだけれども、用意をして来たのだぞえ。

おふみ (久し振りの着物に心を躍らせて) まあ! ほんたうに親切に。

おかく なに、ホンの間に合せの物だけれども、この小紋はお前に似合ふだらうと思つてね。この帯は、今年流行の品で、お前には少し華美かも知れないけれど。櫛も笄も一通りは持つて来ました。

おふみ (スツカリうれしくなつてしまつて) 青屋の旦那は妾のことをまだ思つて居て下さるかしら。

おかく 何を云つておいでだね。妾が、何の粹狂で、こんなに大金をかけて、お前を迎ひに来るものかねえ。

おふみ (顔を赤くして) まあ!

(おふみが、衣類に見とれて居るときに、香之進と晋三郎と連れ立つて歸つて来る。戶外にて)

晋三郎 おい、いゝか。未練を出しちや、駄目だぞ。さつぱりと話を付けなければ。

香之進 男が一旦決心した上からは、今更未練がましいことはしない。

(二人家の中へは入る。香之進が歸つたのを見て、おふみあわてゝ衣類を隠す。香之進不快な表情をなす)

晋三郎 直ぐ見付かつた。

おかく 香さま、お久し振で御座います。

香之進 (可なり、不快な表情をして) うむ、面目ないなあ。かうしたところを、お前に見られては。

おかく 何ういたしましたして。

(四人、しばらくの間沈黙、一座白ける)

晋三郎 どうだい! 内儀、お前さんの話はすんだかい。(おかく肯く) さうかい。俺の方の話もす

んだから、俺達は一旦引きとるとせうか。

おかく さういたしませうか。

晋三郎 おい! 細木。それでは、俺達一廻りして来るからな。よく相談して置いてくれ。いゝかい!

貴様の言葉を信じて居るぞ。

(香之進背くのみ。おふみ、二人を送つて戸の所で無言で別れる。おかくと晉三郎、柴折戸の外にて話す)

おかく ねえ、本多さん。大丈夫かしら。

晉三郎 怪しいな。細木には、未練がたつぷり在る。

おかく おふみの方は、大丈夫だと思ひますがねえ、若しかすると心中話か刃傷沙汰にならないとも限らないと思ひますがねえ。

晉三郎 うむ、やりかねないな。

おかく そんなことさせちや、角を矯めようとして、牛を殺すやうなものだからねえ。

晉三郎 少し、心配だな。よし俺は、引返してそつと容子を見て居よう。

おかく ぢや、妾もあまり遠くへ行かないで居ませう。

(晉三郎、取つて返して、ひそかに家の背後にかくれる)

(晉三郎とおかくの去りたる後、おふみと香之進はしばらく無言。おふみ、もじくして居る)

香之進 (激した聲で) おい! おふみ、茲へ来い。

おふみ (おどくして) え。

香之進 その衣類はどうしたのだ。

おふみ (黙つて居る)

香之進 黙つて居ては分らない。何うしたのだ。

おふみ 桔梗屋の内蔵さんが、持つて来て呉れたのだぞえ。

香之進 詐りを申すな。駆落した抱女の迎に、衣類を新調して来る奴があるものか。青屋だな。佐

兵衛だな。此の糸を引いて居るのは。(嫉妬のために激昂してしまふ) お前は青屋と知つて、此の香之進と別れるのを承知したのか。

おふみ (黙つてしまふ)

香之進 お前が、青屋に引き取られると知りながら、此の香之進と別れると云つたのなら、そのまゝ

には差し置かないぞ。眞直に、白状しろ。(香之進、刀架より一刀を取り下す)

おふみ (うつむいたまゝ泣き出す)

香之進 青屋と知つてか。青屋と知つてか。

おふみ (烈しく泣きながら) 妾を殺して下さい。心のかはりやすい妾を、どうぞ殺して下さい。貴

方に殺されて、何時までも貴方のものになつて居たい。

香之進 よし殺してやる。家のため、將軍家のため、戀を捨てようと思つたが、かうなれば意地だ。

お前を殺して、香之進も死んでやる。(刀を抜きはなす)

おふみ (本能的に駭いて) あれ!

香之進 うろたへるな。覺悟しろ。

(晉三郎、飛鳥の如く飛び込んで来る。そして香之進の背後より飛び付く)

晋三郎 馬鹿！ 細木、何をやるのだ。先刻あれほど云つたのが、分らないのか。

香之進 馬鹿は覺悟の前だ。放せ！ 放せ！

晋三郎 細木！ その刀は貴様が家重代の貞宗だらう。その刀を持つて居る貴様のこの腕はなんだ。千葉の道場で、小天狗と云はれた旗本第一の腕ぢやないか。この腕で、その刀で、女一人を殺すのは勿體ないと思はないのか。馬鹿な奴だな。俺が先刻も云つた通り、俺が先刻も云つた通り、今徳川のお家は累卵の危きに在るのだ。東照神君以來、旗本八萬騎を養つたのは何のためだ。貴様が、十三の歳から武藝を磨いたのは何のためぢや。今こそこの腕で、その刀で、徳川の家を呪ふ薩長の姦賊を斬つて、斬つて斬り廻す時ぢやないか。馬鹿！ こんな山奥で、獵師の眞似などをした揚句に女などを殺して何うするのぢや。女の方は、貴様を世に出すためにあきらめて居るぢやないか、男の癖に未練な。

香之進 おれの心は貴様には分らない。

晋三郎 分つても分らなくつてもいいよ。よせ、こんな馬鹿々々しいことは。

香之進 (漸く刀を持つた手を垂れる) 別れる丈けならいよ、だが、青屋に……

晋三郎 別れた女が、何うせうが、そんなことはないぢやないか。それを未練だと云ふのだ。

香之進 (尙刀を抜いたまゝ) が、このまゝいつまでも暮して行くのはいいが、俺達の戀がいつまでも續いて行くかどうか分らなくなつて來た。女の心は江戸へ歸りたさで一杯だ。自分の心も、アテにならなくなつて來た。別れ話が出たとき、刀を抜いて戻り上げる位、お互に熱がある時に別れた

方が花かも知れない。かうした生活を五十年續けて行き、お互ひに戀をあせさせてしまひ、醜い二人になりながら、喧嘩しいく暮して行かねばならぬやうになるかと思ふと行末が怖しい。本多！ 別れるのは今だな。

晋三郎 さうとも、貴様が、其處へ氣が付けば、細木香之進は救はれたのだ。愛する女をいなく欣びも、結構だが、その貞宗を思ひ切り振り廻すことを考へて見るがいい。

香之進 斬れさうだな、こいつは。

晋三郎 その切れ味のやうに、スツパリと切れてしまへ。今夜を過すと、どんな未練が出ないとも限らない。桔梗屋の内儀に男らしく直ぐおふみを引渡してしまへ。男だ、辛抱しろ。

香之進 うむ。

(晋三郎、柴折戸よりおかくを招く)

晋三郎 お前さんは、おふみを連れて、直ぐ江戸へ歸つておくれ。俺は細木と一足遅れて江戸へ入らう。おふみさん。最後だ。名りを惜しみなさい。

おふみ (香之進に縋りながらわつと泣き伏す)

香之進 何も云はないが、俺の心は判つて居よう。

おふみ (泣きながら頻りに肯く)

香之進 よし、たつしやで暮せ。

おふみ はい。(烈しく泣き沈む)

晋三郎 さあ、泣いて居ないで、衣裳を更へるといふ。奥へ入つて着換へるといふ。

香之進 (おふみ泣きながら、衣類を持つて奥にはひる)

晋三郎 抜いてしまつた貞宗のやり場に困るな。

香之進 何か斬つて見ろ。

晋三郎 うむ！ 此の榎家も、今は不用だな。よし、えい！

香之進 (勢よく柱に斬りつける、柱見事に兩斷)

晋三郎 可愛い女の身體なんかよりは、よつほど斬りばえがするだらう。

香之進 (狂せるが如く、柱を斬り廻りながら笑ふ) ハ、、、。

(奥にて、おふみの泣く聲がよく聞えて来る。香之進の笑聲と、おふみの泣き聲との奇異なる交錯の裡に——)

— 幕 —

時 勢 は 移 る

序幕

第一場

人物

杉田源右衛門 六十

源之丞 その子、二十九

おあさ その妻、五十一

おゆき その娘、十九

山崎東伍 おゆきの許婚者、二十七

その他重要ならざる二三の人物

所

四國の某藩、徳川家の親藩

時

慶應の末年

事情と舞臺

官軍が、國境に迫つて来る。一藩は恭順か佐幕かの議論に、沸騰してゐる。今日も、城中で朝廷に恭順を奏するか、それとも宗家のために、官軍を引き受けて一戦するかに就て、評定が開かれてゐる。

藩の家老にして、軍奉行を勤める杉田源右衛門の家。七百石の食祿を取れども、頗る質素なる家作り、源右衛門の妻のおあさと娘のおゆき、縁側近く相對して、縫物をしてゐる。床の間には、鎧櫃が置かれてゐ、長押には長短二本の槍が、掛けられてゐる。

おゆき (縫物の手を止め) もうお母様、お手許が見えんぢやらう。

おあさ あゝ行燈を點けて貰はうかのう。

(おゆき立ち上り、納戸より行燈を取り出し、燈心をかき立て、點火する)

おあさ 眼の力が弱うなつて、糸をみ、そに通すのに骨が折れる。

おゆき もう、お休みなさんせ。お母様は、今日本當によくお精が出ました。

おあさ お前もよく出たのう。——が、かうあせつて、おこしらへを急いでも、今年中に婚禮が出来るかしらん。

おゆき ……

おあさ こんなに世の中が、騒がしうなつて、土佐の兵隊が何時押し寄せてくるかも知れん云うと、此先どんなことがあるかも知れん。萬一戦にでもなると、東伍どのも直ぐ出なならぬと、昨日も云うて居られたからのう。

おゆき (針を無意識に動かしてゐる) ……

おあさ 観音寺までは、土佐の兵隊がは入つとると云ふ噂ぢやのう。

おゆき 本當にいくさが、始まるのかしら。

おあさ お前のお父様などは、どうあつても一いくさせないかん云うて、昨日も鎗や刀の手入をして

おいでになつた。

おゆき 何うしても、いくさになるのかしら。

おあさ 御家中にも、お父様のやうな一徹者が多いからのう。

おゆき どうして、戦せないかんのだらう。

おあさ 何うして云うて、將軍さまと禁裡さまとが、天下争ひをしておいでになるのぢやもの。

おゆき お上は、執ちらへお附きになるのかしら。

おあさ 侍従様は、田安様からの御養子ぢやけに、御本家の將軍家には、弓を引かれん云うて、おい

でになるのぢやけど、それかて禁裡さまにお手向ひする氣は、毛頭無いのぢや。そうぢやけに御家

中が、二つに意見が分れて、評定がもめるのぢや。

おゆき こんなとき、兄さんが家に居ると、少しは氣強いのぢやけど。

おあさ いや、こんなとき、源之丞が居るとどんなことになるか知れん。またお父様と、どんな怖しいさかひをするかも知れん。

おゆき あの時、何うして兄さんは、お父様とあんな大喧嘩をしたのかしら。

おあさ 考へてゐることが、丸切り反對ぢやからのう。あのとき、怖しかつたのう。お父様が刀を抜いで、源之丞を追ひ廻すのだもの。刀が、鴨居に支へなかつたら源之丞は何うなつてゐるか知れん。

おゆき 兄さんは、おたつしやかしら。

おあさ たつしやで、居て呉れ、ばいと思ふけれど、なにさま氣性の烈しい、向不見ぢやから、何うなつてゐるか分らん。お前のお父様と兄さんとは、考へてゐることは、南と北のやうに、反對ぢやけれど、氣性は生き寫しぢやからのう。自分がかうと思つたことには生命でも氣でも惜しみはせんからのう。

おゆき 天誅組に、おは入りになつたと云ふのは、噂丈かしら。

おあさ 天誅組には人つて居たとも云ひ、寺田屋騒動のときに居合はしたとも言ひ、京都で新選組の者に斬られたとも言ふけれども、みんな確かな證據はないのぢや。

おゆき 生きてゐて下されば、どんなに嬉しいか知れはしない。

おあさ お父様は、今でも口癖のやうに、あんな不埒者は、何うなつても介意はん云うておぢやるけれど、心の裡ではやつぱり忘れられんと思へて、時々源之丞のことを思ひ出して居られるやうな御容子ぢや。此頃時々ぼんやり考へ込んでおいでになる時なぞ、乾度源之丞のことを思ひ出して居

られるのぢや。お母様には、ちやんとそれが分る。(二人しばらく言葉なし)

おゆき お歸りが遅いのう。

おあさ 御評定が、もめてゐるのぢやらう。今日で、戦をするかせぬかど定まるのぢやけに。

(母子再び言葉なし。夕闇が、だん／＼家の周囲を閉す。行燈の灯が、漸く明るくなる。ふと庭の植込に人の影がうごく。源之丞である)

源之丞 母上！ 母上！

(最初は聞えない)

源之丞 母上！ 母上！

(娘のおゆき、先に氣が付く。駭いて、母の袖を引いて耳打する)

おあさ (咳きながら氣丈に) 誰ぢや。何者ぢや。

源之丞 (周囲を見廻しながら、急に現はれて、縁側に手をつく) 母上。源之丞で御座る。

おあさ (驚駭して) まあ！ 源之丞。

おゆき おゝ兄さん！

おあさ まあ、お前よく歸つて來たのう。よく無事で居て呉れたのう。妾は、お前のことを、どんなに心配したか知れやせん。まあ、無事で何よりぢや。

源之丞 母上にも、おたつしやで何よりぢや。おゆきもたつしやで結構ぢやのう。して、お父上は、

おあさ (急に眉をひそめて) まだ、お出先からお歸りにならぬ。

源之丞 それでは、しばらく茲に居てお話しいたしませう。お父上が、お歸りになる氣勢がしたら直ぐ立ち去りませう。

おあさ お前の身の上を、どれほど案じたか分りやせぬぞ。お父上には、内緒でも、せめて手紙の一つもことつけて呉れ、ばよいものを。家出してから、何の音沙汰もないのぢやからのう。

源之丞 お申譯ふりませぬ。私も母上のこと、又妹のこと思ひ出さぬでもいませぬが、何さま忙しうて、去年の秋は江戸に下り、夏から秋にかけては、長州から九州へ渡つて居りましたから。

おあさ して、今度歸つたのは、お父さまにお詫びをして、此家を継いで呉れるためかい。

源之丞 (苦笑して) 源之丞には、家のことなどは念頭には御座りませぬ。大君の御國、みかどの御國のこと丈しか、念頭には御座りませぬ。

おあさ (源之丞の云ふことが、分らぬ如く) それならお前は何しに歸つて來たのぢや。家に落付いて、私達を欣ばして呉れるためではなかつたのか。

源之丞 いゝえ、さうでは御座りませぬ。家に落着く、それは此の日本國中が、落着いてから、歸つて參つても遅うは御座りませぬ。どうぞ、今しばらくの間、源之丞におひまを下さいませ。

おあさ (あきらめて) して、お前は何處に在宿ぢや。

源之丞 向ひ地からの漁船に乗り、先刻西濱に着いたばかりで御座ります。家に落着くためではなうて、何の用に歸つて來たのぢや。

源之丞 精しくは、申上げられませぬ。が、無益の戦を止め、家中一統に、間違つた道に踏み込まさないやうにと、歸つて參りました。父上は、今日いづれにおいでになりましたか？

おあさ お城へ上つて居られるのぢや。

源之丞 さやう、それでは先刻西濱の漁師どもが、申してゐたことは、本當で御座りまするな、城中で大評定があると云ふ噂は。

おあさ 何でも、その様な容子ぢや。

源之丞 して、一番の氣勢はいかゞで御座りますか。禁裡さまへ、お味方しますか、それとも御宗家たる將軍家へ。

おあさ 妾達には、そんなことは何にも分りませぬ。が、お前のお父様は、御宗家たる公方様へ弓を引く不忠者めがと、口癖のやうに云うて居られる。

源之丞 (失望して) 左様で御座りますか、お父様はまだそんなことを云つて居られますか。

おあさ 源之丞！ お前また、お父様と、云ひ争ひをしに、歸つて來たのぢやなからうのう。

源之丞 ……

おあさ お父さまは、お前のことを、口に出しては、何にも云はれんけど、心の裡では随分案じて居られるのぢやぞ。あの意地張の強いお父様ぢやけに、初の裡は私達が、お前の噂をすると、噂をする云うて、一寸でも口に出すと、聲を立て、怒つて居られたが、今では私達がヒソ／＼とお前の噂をする何となく御機嫌がいゝらしいのぢや。九月十一日は、お前のお誕生ぢやらう、今年も、その日の朝になつて今日は源之丞の誕生ぢや、何處に居てもいゝから、無事に居て呉れ、ばい。

と、妾が心の裡に祈つてゐると、朝お目覺めになつたお父さまが、「赤飯が喰ひたくなつた」と、かう仰つしやるぢやないか。(おあさ、かすかに泣く。おゆきも、それに連れて、すゝり泣きの聲を洩す) お父さまのお心の裡を察して、早くお父さまにお詫びをして、家へ歸つておくれ。お母さんは、勤王とか、佐幕とか、そんな難かしい議論よりも、親子が揃うて楽しく暮すのが、一番幸福に思ふのぢや。それが、一番いゝことのやうに思ふのぢや。

源之丞 私もさう思ひます。そんな時代にしたいのです。親子が満足して、幸福に暮せるやうな時代にしたいのです。が、世の中に間違があると云ふことが解ると、それを黙つては見てゐられないのです。間違つた者が天下の權を擅にして、正しい者が虐げられてゐると云ふことが分ると、私を黙つて見てゐることが出来ないのです。世の中に間違があると云ふことを知りながら、黙つて見て居ると云ふことは卑怯な……あゝこんなことは申上げるのではなかつた。あゝお母様、私は五日の裡に、京へ引返さなさいかないのです。が、只今はどうも、空腹で堪へられません。どうも空腹で……何か喰べるものをいたゞきたいのです。

おあさ さうだらう。忍んで、來たのぢやからのう。おゆき、お前は臺所へ行つて、そつとおむすびをこさへて、持つておいで。召使どもには、悟られぬやうにのう。

おゆき はい、畏りました。

おあさ お父様は、お前が出奔すると、大變お怒りになつて、直ぐお前の勘當届をお出しになつたのを知つてゐるか。

源之丞 知つて居ます。が、そんなことは何でもありません。

仲間の聲 (遙かに) お歸りで御座います。

おあさ あゝお歸りぢや。お前は、その邊にかくれておいで。いや、あの離れの四疊半へ。あすこはメ切りになつて、誰も行かないけに。直ぐ後から、食事を持たしてやるけに。

源之丞 承知しました。

(源之丞微笑を洩しながら、奥へかくれる)

(源右衛門、背高き老人、身體はやゝ衰へたれども、元氣は一杯で、麻の上下を付け、右の手に刀を下げながらは入つて來る)

おあさ (雑物をしまつて挨拶する) 用事にまぎれて、お出迎ひが遅りました。お歸り遊ばしませ。

源右衛門 (やゝいら／＼しげに) 早う着換を持つて來い。

(いら／＼しく、上下をかなぐり捨てる。烈しい音をさせながら、刀架に刀を置く)

(おゆき着換を持つて來る)

源右衛門 (着物を換へながら) 女中共を山崎へ遣はして東伍を呼んで參れ。

おあさ 何ぞ、火急な御座りますか。

源右衛門 うん、急用ぢや。お前達には、先に申して置くが、東伍とおゆきとの縁談は、破談にいたしたぞ。

おあき (駭いて) えつ!

おゆき (聲は出さざれども驚き甚し)...

おあき それは、またどう云ふ譯で御座りますか。

源右衛門 (妻には答へず) おい誰か居らんか。誰か居らんか。

女中 (出て来る) はい。

源右衛門 山崎へ參つてな、ちと火急な用事があるほどに、東伍どのに直ぐ見えるやうに云へ。

女中 はあ。(去る)

おあき 東伍殿を呼び付けて、何うなさるので御座いますか。

源右衛門 破談を申し渡すのぢや。

おあき 東伍殿が、何ぞお氣に觸るやうなことをいたしましたか。

源右衛門 不所存者だから、縁を切つてやるのぢや。今日城中の御評定で、御親藩たる御縁つゞきに

依て、此度はお家の御運をかけ、山内京極の兵を引受けて、一戦いたすやう、申上げたに、何事ぞ

東伍を初、家中の若武士が百名餘連判の上で、官軍への恭順を申上げてゐる。何と云ふ卑怯者ども

ぢや。命の惜しい卑怯者どもぢや。祖先以來、お手厚い祿をいたゞいた者が、命を捨てるのは、か

う云つた時の御奉公より、外にはないではないか。戦ときけば、第一に走せ向ふべき若武士どもが

何と云ふ不埒な、不忠な、卑怯な、えゝ思ひ出す丈でも、苦々しい奴ぢや。

(源之丞、ひそかに植込の中にて、聴いてゐる)

おあき それで、御評定は何うなりました。

源右衛門 みんな、どいつも此奴も、臆病風に腸を吹かれて、首鼠兩端を持し、一身一家の安穩はか

りを思つて居る腰拔ばかりぢやから、俺と矢野主馬と、二人で大義名分を説いて、到頭一戦に及ぶ

ことに、藩論が定まつたのぢや。

(植込の中の源之丞、駭いて身を進める)

おあき それではいよく戦争で御座りまするか。

源右衛門 お前達、ちやんと覺悟をして置かな、ならんぞ。何時なるとき籠城になるかも知れん。

おゆき 戦争になりましたら、味方が勝になりませうかしら。

源右衛門 心配するな、今御當家が、將軍家のために、旗を擧げると、紀州が動き、藝州が動き、姫

路の酒井侯が動く。(ふと、其處に源之丞が、置忘れてあつた扇子に目を付ける) 何ぢや。見なれぬ

扇子ぢやのう。(開いて見る) うん見事な筆蹟ぢやな、なに

聞説中原虎狼横。孰先慷慨唱勤王。

腰間頻動雙龍氣。欲向東天吐彩光。

なに、南海の志士、杉田源之丞の囁に依つて、薩藩小松帶刀 (源右衛門、鋭く妻及娘を見る) お

あさ、此の扇子の持主は誰ぢや。誰ぢや、申して見い、此の扇子の持主は誰ぢや。

おあき (色を失つて言葉なし)...

源右衛門 持主は誰ぢや申して見い!

おあさ ……

源右衛門 なに申さぬ。そちは、勘當した源之丞を引き入れたな。俺に、ひそかに引き入れたな。

おあさ 申譯御座りませぬ。

源右衛門 して、源之丞は何處に居る。何處へかくした。

おあさ お探しになつてどうなさります。

源右衛門 改心いたせば勘當を許して、今度の戦の先手にしてやる。改心いたさぬとあらば、叩き斬つて、軍陣の血祭にしてやる。何處ぢや、何處に隠したのぢや。申せ、申せ。

おあさ それは申し上げられませぬ。

源右衛門 なに云はぬ！ (手を延して、妻の髪に手をかけんとす)

源之丞 (植込より氣輕に飛び出す) 父上、母上をおいぢめになつてはいけません。

源右衛門 うん、源之丞だな。(怒の裡に、一味のなつかしさを藏してゐる)

源之丞 お久しう御座ります。

源右衛門 まだ、殺されては居なかつたのか。果敢な奴め！

源之丞 なかく。さう手輕には、殺されませぬ。

源右衛門 馬鹿者め！何しに立ち歸つた。

源之丞 京都で承りましたところ、當藩の君臣達、進退に迷つてゐると聴きましたから、一大事と思ひましたので、取るものも取敢ず、歸國いたしました。一藩の歸藩を誤らぬやう、家中に遊説い

たし、當松平家の社稷を全うしたいと思つてゐます。藩論は今日の御評定でしかと決定した

源右衛門 進退に迷つてゐるなどと、たはけたことを申すな。藩論は今日の御評定でしかと決定した

れ、ぞ。

源之丞 それは結構で御座りますな。して如何様に。

源右衛門 如何様に定まつたもない！ 御親藩同様の御當家が、將軍家に敵對する土佐、京極の手を

引き受けて、干戈に及ぶのは、至當の事ぢや。

源之丞 (嘆息して) お父様には、まだお目が覺めませぬな。

源右衛門 (怒つて) なに、目が覺めぬ。親に向つて、不埒なことを申す奴 (刀架の刀に手がかゝ

る) 直れ、それへ。

源之丞 いゝえ、直りませぬ。源之丞の命は、まだ外に使ひ道が御座りますからな。

源右衛門 なにを！

源之丞 さう、お怒りなされず、氣を静めてお聴きなされえ。お父上は、失禮ながら、かやうな田舎

に御座るゆゑ、まだ日本國中の形勢は、お判りになつて居らぬのぢや。勤王討幕の聲は、潮のやう

に、天下に充ち満ちて居りますぞ。此の潮に逆らうのは昇る日の光を妨げるほどの、愚かなこと

だと云ふことが、お判りになりませぬか。

源右衛門 なにを申す。勤王などと申すことは、薩長の奴輩が將軍家を倒して、我自ら天下の權を

握らうとするための口實ぢや、術數ぢや。その口實に迷うて將軍家に弓を引くと云ふやうな、愚か

(源之丞に斬りかゝらうとする。おあさとおゆき、源右衛門に縋り付く)
源右衛門 放せ！ 放せ！ (妻と娘とを蹴放さんとすれども離れず、意氣やゝ緩む)
おあさ (夫を漸く制して) 源之丞！ 武士の家に生れた其方が、父上のお言葉に背くと云ふことが

あるものか。
源之丞 お母さま、それもみなこの御城下に無益な血を流したくないからぢや。負けると定まつた間
違つた戦に……

源右衛門 なにを！
おあさ 源之丞、言葉が過ぎますぞ。

(父子尙烈しく對してゐるときに、仲間があわたゞしく駆け込んで来る)

仲間 矢野さまより、急な書狀が参りました。(書狀を出す)

源右衛門 (妻を介して書狀を受取つて讀む) 何に、火急の用あり、即刻御來宅被下度……うむ。(仲
間に) 使の者は歸つたか。

仲間 いや、待つて居ります。

源右衛門 よし、即刻伺ふと云へ。おあさ、矢野殿へ行つて来るから、伴を一步たりとも外へ出すな。

おあさ (肯く) あのう御夕食は。

源右衛門 お城で、御酒をいたゞいたから、まだ空腹ではない。その上に心がせく。

(源右衛門、袴を付け羽織を着る)

源右衛門 源之丞、 足でも當郎を出れば、目付に申付けてひつくゝるぞ。

源之丞 (苦笑して) なに逃げもかくれも致しませぬ。

(おあさ、おゆき、源右衛門を送つて去り、直ぐ引返して来る)

おあさ まあ、いゝ仲ぢやつたのう。

源之丞 お母さま、お腹が空いてゐます。どうぞ、先刻お願したものを。

おあさ あゝ、つひうっかり忘れてゐました。あゝおゆき、お前おむすびを持つておいで。

おゆき はい。(立ち上つて去り、握り飯を持つて歸つて来る)

源之丞 (つゞけざまに三つ四つ喰ひながら) やつぱり家の御飯はおいしいなあ。お母様、家のおいし
い味噌漬はありませぬか。

おあさ まあ、蟲おさへに少し喰べて、おいで。もう、お父様に分つたのぢやから、後でぢやんと膳
をこさへて上げるから。

源之丞 (ふと憂慮を帯びて) 矢野と云ふのは、あの矢野主馬どので御座るのう。(考へ込む) 火急
の用事！ 公用なれば、私宅へ呼ぶ筈はない。今日の評定に就ての火急の用事なら、私宅へ呼ぶ筈
はない。お母様今まで、こんなお使が見えたことが御座りまするか。

おあさ いゝえ。
源之丞 今日城中大評定があつた日ぢやのう。お父さま達が、強硬に開戦を唱へたので、家中が
不承無承承諾した。あやしいな、こいつは。

おあさ え、何ぢや、何ぞ思ひ當ることがあるのかい。
源之丞 備前池田侯の家老、赤木總右衛門が殺られたのも、城中の評定からの歸りがけぢや。
おあさ え、何ぢや。

源之丞 お父上さへなければ、開戦説は一たまりもあるまい。お母様、若武士どもは何と申して居りました。

おあさ 何でも、血氣の若武士が、百人も連署して朝廷への恭順を申上げたと云ふので、お父さまは、火のやうに怒つて居られた。東伍どのも、一味したと云つてエライ御立腹で、おゆきとの縁を切らうと仰しやるのぢや。

女中 (は入つて来る) 山崎さまへ行つて参りました。東伍さまは、お留守で御座ります。

おあさ あ、御苦勞、それで言傳は傳へて置いたのう。

女中 はい。
源之丞 あ、東伍にも久しく逢はぬな。彼奴には逢つて話して見たいな。彼奴には、俺の勤王論をよく吹き込んで置いたからな。……だが矢野主馬からの使!

おあさ お前、その矢野さまのお使が、何うしたと云ふのぢや。

源之丞 (黙つてゐる)……

おあさ お前、お父さまのお身の上に、何ぞ不吉なことが、あるとでも思ふのかい。
源之丞 矢野殿の屋敷は、内町だな。お濠端を通つて、三番丁を右に。うむ、七本松へ出るな。

お母様、矢野の使は怪しい、合點が行かぬ。まさしく勤王を唱へる者のいつはつての誘ひぢや。

おあさ え、つ、それはまことか!

源之丞 私の蟲が知らせる。私の蟲が知らせる。さうに違ひない。

おあさ え、つ! そんなら早く、駈け付けて、駈け付けて。

源之丞 お母さま、私にお父さまを救へと、仰しやるのですか。もし、私がお父さまの子でなかつたら、お父さまを殺すのは、私かも分らない。時勢に逆つて、時勢を妨げるものが、その力に碎かれるのは自然の數ぢや。それを救ふことはない。それを救ふのは、やつぱり時勢に逆ふのぢや。お父さまのやうな考へ方が、お家を亡し、多くの人々をなやませるのぢや。若武士が、お父さまを狙ふのは正しい。親子でなかつたら、此の源之丞が手にかける。父親が九死の場合に。

おあさ (狂亂して) まあ、何と云ふのだい。父親が九死の場合に。

おゆき お兄さま、どうぞ。お父様を。

おあさ さあ! 早く、お前は、槍を持たしては、藩中に稀な腕利きぢやけに。

(長押にかけたる手槍を取つて手渡さうとする)

源之丞 お母さま、私は無益な戦を止めて、松平家を救ひ、無用な血潮を流さないために、わざと走せ歸つたのです。その私が、戦争を起す發頭人のお父様を……。親子は親子、大義は大義ぢや。

おあさ お前、何を云ふのぢや。現在の父、肉親の父親が……。あ、おゆき、お前は工藤さまへ行つておいで、佐竹さまへも。

おゆき はい。(駈け出す)

仲間 (色を變へて駈け付けて来る) 奥様大變で御座ります。

おあさ 何うしたのぢや。何うしたのぢや。

仲間 矢野さまのお屋敷へ行く途中、七本松まで行きましたところ、覆面の者が五六人で日那を取り圍みました。

おあさ あゝ、源之丞!

源之丞 (憤然として立ち上り) なに七本松!

(一散に駈け出す)

おあさ あゝ源之丞が間に合つて呉れゝばえゝが。

第二場

舞臺

城下七本松。遙に士族の屋敷が、闇の中に並んでゐる。淋しき廣場。源右衛門、手を負ひながら、四人を相手にして斬り結んでゐる。烈しき太合せ。

源右衛門 なに奴だ! 名を名乗れ! 名を。

(四人無言のまま、烈しく斬り込む)

源右衛門 さては、御高座を忘れ、御宗家に弓を引かんとする姦賊どもだな!

(四人更に烈しく斬り込み、源右衛門、斬り斃さる。源之丞、まつしぐらに走つて来る。四人狼狽し、二人逃げ二人止る)

源之丞 父上! 父上!

(答なきに依つて、父の死骸に取り付く)

源之丞 うむ、遅かつたな。

(立ち上りざま逃げんとする、若者の一人に斬り付く。太刀先、肩をかすりたるまゝ、そのまゝ逃げ廻る。源之丞憤然として、一人残りし若者に立ち向ひ、一刀の下に斬り倒す)

源之丞 父の敵、思ひ知れ!

手負ひたる者 なに、源之丞どのか。

源之丞 なに貴様は東伍か。

(駭いて介抱する。深手と見え、力なく倒れんとする)

源之丞 なぜ、貴様父上を斬つた。勤王黨の人々が、父上を斬るのは無理はない。だが貴様が手を下さいでも、いゝではないか。

東伍 (苦しき呼吸にて) ゆるして呉れ。籤だ! 籤が當つたのだ! 云ひ譯をすると卑怯に當るか

らなあ。

源之丞 さうか、胸中は察するぞ。だが、手は深いぞ。

東伍 うむ、介錯してくれ。

源之丞 何か遺言はないか。
東伍 ない。

源之丞 おゆきに何か云つてやれ。

東伍 たゞよろしく云つてくれ。新しい御世に會はないで死ぬのが、残念ぢや。

源之丞 貴様とは、話したかつたのぢや。大君の世になるのは、もう半年とはかゝらぬぞ。有栖川の宮の錦旗は、この二十日に京都を出るのぢや。俺は、參謀附の一人ぢや：：（弱る手負をかき起しながら）父上が死ぬ。が、父上の時代も死ぬのぢや。俺達の時代が来るな。東伍お前を殺したのは残念だ。が、死ぬ。欣んで死ぬ。お前は新しい御世の礎ぢや。俺は、生きてお前と二人分の働

——幕——

（この戯曲は、序幕第二幕第三幕の連絡對照に依り時勢の推移を示さんこと作者が意圖なり。されば序幕のみを離して發表すること、作者の忍びざる所なれど、便宜上これを發表せり。序幕なれども一幕物としても完成せるつもりなり。）

岩見重太郎 (An Allegory)

人物

伊東 互

江州新田村に道場を開ける劍客、六十に近し

村松平左衛門

伊東の高弟、同村の豪農、五十を越えたる老人

村松平太郎

その子、伊東の弟子、年齢二十五六の若者

下男 重助

村松家の召使

——實は天下の豪傑岩見重太郎——

赤星 主膳

大日五郎左衛門

岡野新之丞

金谷三郎左衛門

長尾 監物

吉長 八左衛門

山崎七郎次

伊東の弟子

その他重要ならざる人物多勢

六人組と稱する道場荒しの劍客

所 江州新田村
時 豊太閣在世當時

第一場

伊東互の道場。拭き淨められたる板の間、正面に床の間があり、八幡大菩薩の軸がかゝつてゐる。その前に神酒が供へてある。正面の羽目板に、「兵法心得之事一稱古日日之事」など云ふ貼り紙がある。下手に木刀掛があり木刀が幾本となくかゝつてゐる。幕開く。中央に道場の主、伊東互が病氣の體にて衰弱した顔をして坐つて居る。上手に、赤星、大日以下六人の武者。之れに對抗するやうに村松平太郎以下六人の弟子が坐つて居る。その背後に、多くの門人が堅唾を呑んで控へて居る。

伊東 (稍々苦しげな呼吸) 昨夜も申上げた通、折角お立寄り下されたに、拙者折悪しく病中にて、残念ながらお相手いたしかぬる。未熟な門弟ども、とてもお相手にはなるまいが、一手宛御教授下さらば恐悦ぢや。

赤星 尾州清洲からの道中、江州の新田村には、神影流の達人、伊東互殿が、道場を開かれ居ると聞

き樂しみにして参つたに、御病中とは残念至極ぢや。お見受け申した所、血色も悪くはないが、御病中とならば是非に及ばぬ。それ各々方、仕度いたさうでは御座らぬか。御門弟方との仕合も、一興で御座らうぞ。あは、……。

大日 (羽織を脱ぎ捨てながら) われ等が訪ね参る諸國道場の主、大抵は病氣、差支へ、でなければ、他出だ。あはあは、……。

(門弟達氣色ばむ)

村松平太郎 何と云はるゝ。今一度申されて見い。

大日 幾度にも申す。われ等が訪ね参る諸國道場の主、多くは病氣、差支へ、出ぢやと申すのぢや。あは、……。

村松 なに！ 聞き捨てならぬ一言。然らば當道場の主伊東先生が作病でもして、貴殿達との立合を避けられたとでも申すのか。

大日 左様とは申さぬ。たゞ、今迄の例を申して居るのぢや。あはあはあは……。

村松 (口惜しがる) 貴殿のお相手は、拙者所望ぢや。
大日 相手にとつて、不足ぢやが、望みとあらば、叶へて遣はす。
村松 何を！

(村松、憤然として立ち上らうとするのを、横に居る山崎七郎次が止める)
山崎 村松氏、先づお静まりなされい。それでは立合でなくて、喧嘩ぢや。武術の試合に遺趣があつ

てはならぬ。お静まりなされい。
村松 とは申せ。
山崎 はて穩やかに、順番をお待ちなされい。

(村松、漸く座に返る)

伊東 大日氏とやら、諸國道場の主、貴殿達がお尋ねになると、多くは、病氣になるとは、笑止千萬の話ぢや。この伊東一隆齋に於ては、年こそ寄つたれ、瘡せ腕の皺を伸して、お相手仕る筈なれど、今年、卯月の始めより、中風の氣味にて、肝腎の右の腕が利かぬのぢや。作病とお蔑すみあらばあれ！ 八幡！ この一隆齋には毛頭邪しい處が御座らぬ。拙者お相手仕つらいで、門弟達には、未熟なれども、拙者の太刀筋が流れて居る。御廣言は借置いて、先づお立ち合ひなされい。それ、柳田、その方第一にお相手致せ。
赤星 面白い伊東殿のお言葉ぢや。然らば、お弟子達のお手の内、神影流の太刀筋を拜見致さう。吉長氏、貴殿先づお立ち合ひ下されい。
吉長 承知致した。

(吉長、柳田の二人、各々列を離れて、さし向ひ、一禮して立ち上り氣合を激しく打ち合ふ。柳田、籠手をしたたかに打たれる)

柳田 參つた。
吉長 これは失禮。あはゝ。

赤星 あはゝ、柳田氏とやら。仲々のお腕前ぢやが、まだ修業が、ちと足りぬとお見受申した。切角お屬みなされい。

(赤星、金谷三郎右衛門に目配せする)

伊東 (稍々興奮して) それ、近藤氏！
金谷 拙者お相手を。

(位を取つて、容易に動かない。暫く睨み合つた末、激しく數合の立ち合ひの後、近藤肩口を打たれる)

近藤 參つた。

大日 金谷氏、何時も乍らの早業ぢや。天晴れ、天晴れ。

伊東 次は、山崎氏、心を靜かに、落付いて立ち合ひなされい。

山崎 はゝゝ。(木刀を持つて、前に出る)

赤星 長尾氏、貴殿お出で下されい。

(二人、立ち合つた後、山崎、面を打たれる)

山崎 參つた。

伊東 (激して) 佐々木氏、お出なされい。

赤星 岡野氏、貴殿お引受け下されい。

(二人、數十合立ち合ひたる末、佐々木破れる)

伊東 三田村氏、貴殿お出なされい。

(三田村、木刀を掲げ、無言にて出て来る)
赤星 お相手は、拙者が致さう。

(二人立ち合つたる末、又々三田村が破れる)

赤星 神影流のお手の筋とは、これか。お見受け申せば伊東殿御高弟のやうぢやが、まだ、腕前は
若い。修業が肝腎ぢや。だが、中氣の先生の稽古では、修業の程も心細い。

伊東 (無念の形相凄まじく、急ぎ込んで) 村松氏。御身一人ぢやぞ! 十三年から、當道場で鍛へ
上げた腕前を見せて呉れ。残つたのは御身一人ぢやぞ。この一隆齋の流風が、興るも廢るも御身一
人ぢやぞ。

村松 仰せには及ばぬ。摩利支天の化身にてもあれ、見事打ちひしいで見せ申す。いざ、大日氏、お
出でなさい。

大日 (嘲笑し) あは、御身最前から見受る處、百姓面ぢやな。鋤鋤持つ手で、木刀を持つて居る
生兵法が大怪我の元なのぢや。拙者の木劍で、頭の骨を打ち砕かれない前に、引き下がつたがお手
前の爲であらうぞ。

村松 なに、云はして置けば、様々の雑言。多言は要らぬ。腕で来い、腕で。
大日 何を百姓の小伴め。

(二人、激しく立ち合ふ。平太郎、必死の勢ひにて打つてかゝる。長き激戦の後、平太郎、肩口を打

たれる。平太郎、無言にて尙戦ふ)

大日 參つたか。

村松 まだ。まだ。

大日 剛情な奴め。

(激しく立ち合つたる末、平太郎再び肩口を打たれる)

村松 參つた。(漸く太刀を引く)

(大日、更に踏み込んで、面を強く打つ。平太郎の額から血が流れる)

村松 (額を抑へながら) 無念ぢや。

大日 はて、よい氣ぢや。その傷を記念に、之れから兵法は廢して、百姓にせいを出すがよい。そ
んな生優しい刀の振り方で、武士の身體が打てると思ふか。

(平太郎、傷を抑へながら呻吟して居る)

赤星 伊東氏、もう門弟の方は御座らぬか。

伊東 (無念を堪へながら) 残念ながら、免許の者は、これ丈で御座る。

赤星 其れでは、御門弟達に、流れて居ると云ふ貴殿の太刀筋は、これで御座つたのか。あははは。
鳥無き里とは申し乍ら、斯様な稽古で、劍道師範などは、片腹痛い事で御座る。お氣の毒乍ら劍
道指南の看板は拙者達申し請けて歸る。

村松 (傷の痛みを抑へ乍ら) 餘りと云へば、理不盡な申し分。

赤星 異存があるなら、腕で来い、腕で。

(門弟達、残念がる)

大日 腕づくの異存なら、聞いてやる。でなければ、看板を脱してやるは、武道の習ひぢや。

村松以下門弟達 何を！ (皆に手をかける)

大日、赤星等 (刀を引き寄せ)

面白い。抜くなら、抜いて見ろ。

(山崎七郎次、同僚達を宥める)

山崎 早まつてはならぬ。刀を抜いではならぬ。我々の腕前の未熟の致す處、残念乍ら仕方御座らぬ。刀を抜いで、身命を賭する場合はない。拙者にお任せなされい。

(尚、逸る門弟達を抑留め乍ら、大日赤星の方へ来る)

山崎 各々方のお腕前、揃ひも揃うてお見事なものぢや。當道場杯は、百姓郷士共の伴が、ほんの片手間に武術修業を致す處なれば、碌なお相手も致し兼ねるのは、始めから分つた事で御座る。さうお蔑みなされいで、當道場に暫く御滞在、我々に一手二手の御教授を下されたい。失禮乍ら御出立の節には、お草鞋杯は、御不自由のないやう、我々にて御合力致す。

赤星 (態度を改め) さう仰しやるなれば、お話がよく分つた。我々杯も、最初から喧嘩を買ひに参

つたのでは御座らぬ。諸君修業の道々、琵琶湖見物の序に、二三日、お宿など願ひたくて罷り越したのぢや。其のお志で、至極満足ぢや。大日氏、さつきから、いかい雑言を致したな。

大日 いかにも、ついたした行懸りから、喧嘩沙汰に相成り、大人氣なう存じ居つた。

山崎 早速の御承諾で、恐悦ぢや。其では何卒奥の離れの方へ。

村松 山崎氏、我等不承知で御座るぞ。

山崎 何故。

村松 我々ならば兎も角、病中の伊東先生を雑言致した方々と、同席は愚か、一手二手の教授杯とは思ひも寄らぬ事ぢや。

赤星 え、何を！

山崎 村松氏、拙者にお任せ下されい。貴殿の心中は察する。が、こゝの處は、拙者にお任せ下されい。先生は、御病中ぢや。肝腎の腕の利かぬ御病中ぢや。先生の御病氣に免じて、何事も御辛拘下さい。先生の御病中、萬一の事があつては、我々が相濟まぬ。

村松 いや、勘辨ならぬ。ものには勘辨なる事と、ならぬ事がある。病中とは云へ、先生の御心中を察すればよい。當道場が受けた耻は、我々の血によつて、雪ぐ外は御座らぬ。

山崎 さうなくてはならぬ處ぢやが、貴殿には、平左衛門と云ふ親がある。母御もある。その上貴殿は、一人息子ぢや。伊東先生にも、お嬢様があり、奥様がある。我々にも、妻子眷族がある。一旦眞剣を抜くと、木刀の仕合のやうには參らぬ。一旦の怒りは、強いと申せ、親の敵でもなく、深き遺恨があると云ふのでもない。少し堪忍して置くと、その額の傷痕が間もなく消えるやうに間もなく消えるものぢや。こゝの處は、拙者にお任せなされい。御身の云ひ分は、後にて幾らでも聞く。

村松 いや、ならぬ。ならぬと申せばならぬ。たとひ、斬り死に致すとも、眞劍の立合ひを致す。
山崎 はて困つた。誰かある。誰か。村松殿の御親父を呼んで来い。
門弟の一人 さつき、小作の作藏が、走り歸りましたから、御子息の怪我を知り、直ぐと之れへ参る
で御座らう。

他の一人 (立ち上りて、戸外を見乍ら) あゝ参られた。下男を連れ、土橋を渡つて来られるのは慥か
に平左衛門殿ぢや。

赤星 腕づくなら腕づく、扱ひなら扱ひ、鬼の面なら鬼の面、菩薩の面なら菩薩の面、どちらでもお
出しなされい。

大日 其小伴に、眞劍を抜かして見るのも一興ぢやらう。「参つた。」では済まぬからな。
村松 おのれ! (眞劍を抜きかゝる)

山崎 はて、お待ちなされい。御親父も見えると云ふに。
村松 とは云へ、口惜しう御座る。

(平左衛門、下男重助、實は岩見重太郎を連れて来る。平左衛門は、白髪を混へたる老人。重助は、
六尺に近き偉丈夫。但し、顔は稍々痴鈍な風をして居る)

平左衛門 (道場へ這入り乍ら、急ぎ込んで) 平太郎いかゞ致した。

村松 父上。残念で御座る。眉間を此様に傷けられた上、様々の雑言を受けて御座る。その上に當道
場の看板を脱さうと云ふ理不盡な申し分。

平左衛門 いかにも。其れ其方如何致すと云ふのぢや。
村松 看板を取られては、先生の耻辱故、刀にかけても渡すまじい所存を堅め申した。

平左衛門 尤もぢやが、(相手を見返し、相手が悪いと云つたやうな表情をする) 早まる處ではない。
山崎 流石は平左衛門殿ぢや。拙者も夫を申して居つたのぢや。先生御病中に萬一の事あつては大
事ぢや。何も刀にかける許りが能ではない。通り雷は、...いや、この場合は兎に角、圓く收め

るに限る。いざ、赤星氏、大日氏、奥の間へお通り下されい。
村松 父上迄が、そのやうな事を仰しやる! 平太郎は無念で御座る。

大日 口惜しければ、抜いで来い。
村松 抜かいでか。(抜かうとする)

平左衛門 平太郎控へたがよい。
大日 あはゝゝ。弱い犬は、兎角吠えたがるものぢや。

平太郎 おのれ!
(平太郎、刀に手をかける。重助、末座より駆け出して、平太郎を止める)

重助 若旦那、お待ちなさい。この重助にお任せなされい。いや。なに、そのお武家達。
(赤星、大日等、屹となつて見返る。一座の者驚く)

平左衛門 重助、控へい。お前が出る所でない。
山崎 下郎、下れい、無禮ぢや、下れい。

重助 いや、下らない。俺は、そのお武家達に用がある。聞けば、腕づくで、道場の看板を持つて行くこと云ふ。面白い持つて行つて貰はう。

山崎 気が狂つたか。控へい。
重助 いや、控へぬ。氣は狂つては居ない。

（重助を捕へようとしてかゝる山崎を、片手ではねのける。山崎、一間半ばかり、よろめいて倒れる）
重助 お武家達、返事がないのは不承知か。

大日 下郎と存じ、相手にしなければ、付け上り、雑言を致す。夫へ直れい。木刀で打ち殺して呉れる。

重助 面白い。打ち殺して貰はう。
（重助、前へ出る）

平左衛門 重助、控へい。無禮ぢや。控へい。

重助 いや、黙つて見て居て下されい。此處御武家は、兩刀を手挟んだ丸太も同然だ。さあ打ち殺して見い。

大日 何を。
（眞向から打ち下す。重助、體をかはすと等しく、利き腕を捕へ、肩に擔いで板の間へ叩き付ける。大日、悶絶して了ふ。岡野、吉長、金谷の三人、木刀を取つて一齊にかゝる。重助飛鳥の如く、身をかはし、三人を左右に取つて投げる。みんな打ち腕が悪いと見え起き上れないで、苦しがつて居る）

赤星 下郎、推參な。

（立ち上りさま、打つてかゝるのを、直ぐ利き腕を捕へ、床に叩きつけ、起き上るのを起さずに上から腰を掛ける。重助、赤星のたぶさを掴んで、頭を揺り動かし乍ら）
重助 貴様が、この連中の頭領だな。僅かの腕前を鼻に掛け、武術修業とは名のみ、諸國の道場を押し廻つて金銭を強請り居る山賊に等しい奴め。斯様な未熟の腕前にて、道場を荒す杯とは、片腹痛い。今日唯今、改心致さばよし、いやと申さば、此の儘に捻り殺すぞ。（咽喉を強く厭する）

赤星 （苦しがる） 許されい。許されい。謝まつた。謝まつた。

重助 本心か。

赤星 本心ぢや。

重助 本心ならば、許してやる。仲間の者を引き連れ、即刻當地を立ち去れよ。
赤 畏まつた。

重助 ぢや許してやる。命冥加な奴ぢや。

（赤星這々の態にて起き上り、大日その他の者を起し、何か耳に口を付けて囁く）
赤星 伊東先生、今日は、いかい失禮致した。御無禮の段、平に御許し下されい。當道場を荒す杯云ふ所存は毛頭なかつたが、ついた言葉の間違から斯様な事になつて、誠に相濟まぬ。御縁があつたら又御目にかゝらう。

伊東 （さつきからの事件を、無言の裡に堪へ忍んで居たが、事件の急激な轉回に吻と安心したやうに）

何事も拙者病の故と御勘辨下されたい。
赤星 御挨拶痛み入る。門弟衆、さらばぢや。

(六人支度を整へて歸り去らうとする)

重助 お武家達は、何方へ行かれる。

赤星 京へ参るのだ。

重助 うん、宜しい。

(六人、遺恨を含むやうな態度にて、歸り去る。今迄、重助の武勇に感歎して黙然たりし門弟共「わつ」と聲を立て乍ら、重助の傍に駆けこむ)

門弟甲 はて、無雙の勇力ぢや。

門弟乙 人間業とは思はれぬ。

門弟丙 力量と云ひ、兵法と云ひ、拔群ぢや。

平左衛門 (重助の前に進み出で乍ら) 唐崎で御身の水死を助けた折から、お武家ではないかと疑つ

て居たが斯様な豪傑とは夢にも存じ寄らなかつた段、平にお許し下されい。此上は、本名を名乗ら

れ、拙宅に何時迄も御逗留下されい。

重助 いや、拙者は名も無い者ぢや。

伊東 いや、お隠しあるな。天下に聞えた豪傑に違ひない。お名乗り下されい。

重助 あは、今は、是非に及び申さぬ。拙者の本名は、筑前名島の城主小早川隆景の臣下にて岩

見重大郎兼相と申す者で御座る。

平左衛門 さては、御身が、信州風越山にて狝々退治をなされた岩見重太郎殿で御座つたか。知らぬ

事とは申し乍ら、いかい失禮を致した。

(門弟達、驚いて重太郎を凝視する)

伊東 御身のお蔭にて、當道場の看板も汚されず、恐悦に存する。何卒、當道場へ御滞在なされて、

門弟を御教授下されい。

平左衛門 私よりも、その儀平にお願ひ致します。

重太郎 御懇篤なる御願ひにては御座れども、先日、唐崎にて御身の爲に命を助りたるまゝ、行く手

を急ぐ身にては御座りしかど、何かな御恩報じを致さんと、かくは滞在致した。が今日の働きを貴

殿への寸志として明日にも當所を發足致したう御座る。其上、彼の六人の武者修業ども中途より立

ち歸り、再び禍を致すやも量られざるによつて、拙者これより後を追ひ、京迄追ひ拂はうと存ず

る。

平左衛門 深き御配慮の程忝けない。然らば、私にて衣服大小杯一通りはお揃へ致しませう。

(門弟ども酒肴を携へて出て来る)

門弟甲 さあ岩見先生、何ほなくとも一献お過しなされい。勝祝ひで御座る。

重太郎 酒は拙者大好物で御座る。ずんとお注ぎ下されい。

(重太郎、二三杯立て續けに飲む)

伊東 御見事、御見事。

重太郎 伊東氏へもお盃をさし上げる。お一ついかゞで御座る。

伊東 病中なれども、一つ過ごす御座らう。(伊東受けて重太郎に返す)

重太郎 次は村松御父子。

(重太郎と村松父子との間に、盃の應酬宜しくある)

伊東 門弟一同も、岩見先生の武勇に肖るやう、お盃を頂戴致せ。

門弟一同 はつ。

(門弟、次ぎ〜に重太郎から盃を貰ふ。漸く酒宴らしくなつて来る)

平左衛門 それでは、岩見先生、私親子は先生の明日御發足の用意も致し、平太郎が傷の手當も致し

たう御座るによつて、一足お先へ失禮致す。

重太郎 お歸りなれば、身ども同道致す。(とは云へど、久し振りの酒に未練あるものゝ如し)

平左衛門 先生は、ゆつくりとお過ごしなされい。まだ暮れ前で御座れば、八ツ時迄は、ゆつくりと

お過ごしなされい。

重太郎 ぢやと申して、御主人達が歸るのに下男の重助が...

平左衛門 いや、御冗談を仰せられますな。何卒その儘にゆくりとお過ごしなされませい。

重太郎 然らば、今一二献過ごしてから後より參る御座らう。

平左衛門 然らば、御免下されい。

(平左衛門、平太郎と一緒に歸り去る)

重太郎 久し振りの酒の味は格別ぢや。御門弟衆この大盃になみ〜とお注ぎ下されい。

(門弟、酒を注ぐ。重太郎、ぐつと飲む)

門弟の一人 岩見先生。酒の肴に、武者修行中のお話が承りたい。

重太郎 うん、よからう。奥州での大蛇退治の話を致すかな。それとも、狻々退治の方に致さうかな

あは〜。

第二場

情景 第一道場と同じ。唯、時が経つて居る。重太郎も門弟も、十二分に酔つぱらつて居る。夜はハツに近し。

重太郎 (酩酊して、話に油が乗つて居る) おのれ怪物と、藤蔓卷の一刀、抜き打ちに背中へ斬り付けるとピンと音がして跳ね返つた。失策つたりと、眞つ向から一刀浴せると、背骨に當つて折れて了つた。

門弟一同 うゝむ。(と堅唾を呑む)
重太郎 これはと思ふ途端、怪物は、右の手に抱へた娘を捨て、振り返りざま、火焰の如き口を開いて飛びかゝつて參つた。刀が折れて得物を失ひ、流石の拙者も些か狼狽したと見え、右腕に噛み付

かれたのは不覺ぢやつた。が、噛み付かれたを幸ひに怪物の兩手を引つ摑み乍ら、傍の岩角へ力まかせに投げ付けた。

門弟一同 うーむ。

重太郎 起き上らうとする所を、のしかゝつて、拳を堅め眉間のあたりを、續けざまに五つばかり殴り付けると、流石の怪物も異様な聲を出し乍ら、息が絶えた。

門弟の一人 はあ、威程。さて、その怪物の正體は。

重太郎 劫を経た狒々だ。

門弟の一人 して、身の丈は。

重太郎 六尺もあつたらうか。

門弟一同 (驚く)

門弟の一人 して、その娘は。

重太郎 氣絶して居つたが、手當を加へると、蘇生致した。

門弟他の一人 親達の喜びは。

重太郎 思うても見るがよい。重太郎なかりせば、娘の命はないものぢや。あはゝゝ。

門弟の一人 御尤もで御座る。

門弟他の一人 先生の武勇によつて、助けられた者は、世に限りも御座るまいな。

重太郎 左様に向ふさまに褒められると恐縮ぢや。が、義の爲めには、重太郎の劍は、何時にても鞘

走るので。

(その時一人の百姓が、蒼くなつて駆け込んで来る)

百姓 重助殿。いや違つた、岩見先生。大變ぢや、大變ぢや。

重太郎 うん、作藏か。何事ぢや。何事ぢや。

作藏 大變ぢや、大變ぢや。今、六人の武者修行者が、お宅へ斬り込み、大旦那様も若旦那様も敢なき御最期ぢや。

重太郎 夫では、平左衛門殿にも、平太郎殿にも、あの侍どもの手にかゝつたと云ふのか。

作藏 夫ばかりではない。下男が三人、女中が一人、深手を負ひました。

重太郎 おのれ、憎き六人の奴、重太郎が駆け付けて、一討ちに致して呉れる。

重太郎、只一人、疾風の如く駆け去る

門弟の一人 我々も、かうして居られぬ。岩見先生にお助太刀申さう。

他の二三人 我々も續かう。

(六七人の門弟、駆け去り、後に五六人残る)

伊東 (さつきから、重太郎の氣焔を微笑を含み乍ら聴いて居たが) 平左衛門親子が、横死を遂げたと

は、いかにも氣の毒ぢや。右の手が利かぬが残念ぢや。

山崎七郎次 (重太郎出現以來、常に傍觀者の位置に立つて居たが) 飛んだ事になつたなあ。圓く收め

ればよかつたのぢや。

伊東 當道場の事で、村松親子を殺させては拙者が申譯が立たぬ。あゝ残念ぢや、拙者に刀が取れぬのは。

(その時、下手から、第一場の六人の侍、酷々覆面して忍び寄り、伊東互に斬り付ける。伊東斃れる。残れる門弟達、酷々刀を抜いて駆け向ふ。油断に乗せられたので、手もなく斬り倒されて了ふ)

(山崎七郎次、奮戦最も努むれども、及ばず左の高股を斬られる)

山崎 残念!

(六人達、山崎を圍む)

六人 最前の重助とやらは、いづれに居る。あの男の在所を云へば、汝の命は助けてやる。

山崎 汝達が、平左衛門を討つたと聞き、唯今駆け付けて参つた。

赤星 喰ひ酔つた處を、一討ちに致さうと思つたに、命冥加な奴ぢや。

大日 あの下郎を討ち漏したは残念ぢやが、これから後を付けては、時刻が移る。村松親子、伊東互

それに門人の五六人も斃して置けば、我々の遺恨は晴れた。いざ立ち退かう。

赤星 村松の家で、百兩ばかり有り金を浚つて来た。

大日 手廻しのいゝ事ぢや。いざ参らう。

(重太郎、息を切らして飛び込んで来る)

重太郎 待て! 待て! (正面へ来て、伊東その他の死骸を見付ける) 俺は、伊東氏をも手にかけて

か。卑怯未練の犬侍、最前命を助けしは、汝等の悪心を翻させんとの情けなるに、忽ち仇をな

す人非人奴。片つ端から薙ぎ倒して呉れるから、さう思へ。

赤星 下郎よく来た。汝の一命を取りたさに、當道場を襲つたのぢや。取り逃して残念だと思ひしに

我がら名乗つて来る命の要らぬ夏の蟲奴。下郎、それへ直れ。

重太郎 下郎とは云はさぬぞ。村松の僕重助、とは世を忍ぶ假の名、眞は、筑前名島の城主小早川隆

景の家臣岩見重太郎兼相ぢや。

赤星以下六人 (驚く) うむ! さては。

(みんな、逃げ足が付く)

重太郎 この期に及んで、命を助からんとする卑怯者奴。逃げようとして、逃がすものか。一人々々は

面倒だ。一度にかゝれ。

六人 是非に及ばぬ。

(六人、一齊に、重太郎にかゝる。重太郎、奮撃突戦し、六人を一太刀づつに斬つて捨てる)

(門弟村役人等、徐々に立ち歸つて、驚いて見物して居る)

重太郎 (六人を斃し終り) もろい奴ぢや。

門弟共 天晴のお手柄、驚き入つて御座る。

重太郎 夫にしても、村松父子の横死、伊東先生の横死御愁傷に存ずる。みんな、かゝる犬侍共の

なす業ぢや。拙者が、即座に敵を討つたのを、せめてもの心遣りとして下されい。

村役人の一人 佐和山の城主石田治部少輔の代官配下の者で御座る。悪人共を即座にお退治なされ、

忝かたじけなく存ぞんじますれど、御法ごほふにより代官だいがん所迄しよま、一應いちおう御同道ごどう下くだされい。

重太郎（意氣揚々として） 義ぎによつて、六人にんの者ものを手てにかけた者もので御座ござる。何處どこなりとも、喜きんで御同道ごどう致いたす。有難ありがたう御座ござる。

村人むらびと、門人かたじけ共ども 古今ここん無雙むさうの豪傑ごうけつぢや。村松むらまつ様さま、伊東いとう先生せんせいの敵かたきを、即座そくざに討うつて下くだされた。忝かたじけない。

（重太郎が、揚々として立ち去るのを、後から賞讃の聲を浴せかける）

山崎七郎次（深手の爲倒れて居たが、上半身丈やつと立ち上り怨めしきうに、重太郎の後姿を眺める）
馬鹿ばかな奴やつだ。彼奴あいつが居ゐなれば、此こん事なにはならぬぢや。彼奴あいつが居ゐなれば、誰だれも死しななくて済すんだのぢや馬鹿ばか奴め！ あんなに威張ひばつて歩あいて居ゐやがる。馬鹿ばか！

——幕——

玄宗の心持

人物

玄宗皇帝
楊貴妃

楊國忠

秦國夫人

韓國夫人

虢國夫人

高力士

陳玄齡

その他、重要ならざる多くの人物

時

天寶十五年六月

所

六十を出でたる老天子
年三十七、美貌なり。されど日本の俳優が扮して大なる幻滅を感じしむる
ほどの美貌にはあらず。豊艶なる顔、然れども衰頰の色、漸く著し
右丞相、楊貴妃の兄

いづれも大國に封ぜられたる楊貴妃の姉妹

長安を去る百餘里、馬嵬と云へる寒驛。

情景 長安を蒙塵した玄宗皇帝の鳳輦が、馬嵬ヶ原に止まつてゐるところ。外に、三人の夫人が乗つてゐる車と楊國忠の乗つてゐる車とがある。車を引いてゐた馬は、水飼ふために、連れ去られてゐる。三つの車を圍む混亂した侍臣宮女の群、殊に徒歩の宮女が目立つ。玄宗の車の扉が今開けられたところ。

背景に一つの酒店がある。下手、樹立の間に、休息してゐるらしい三軍の旌旗がほの見える。

侍臣甲 (鳳輦に近づきながら) 陛下、殿をしてゐます李孫勇からの使の者が参るやうでございませう。あんなに、馬を飛ばせてゐます。

玄宗 (車から顔を出す) 湯が一杯ないか。

侍臣甲 李孫勇からの使の者でございませう。李孫勇からの……

玄宗 そんなことを訊いては居ない。湯が欲しいと云ふのだ。貴妃が齒が痛むので、嗽をする湯が欲しいと云ふのだ。

侍臣甲 はつ、はつ。(かしこまつて退き、酒店の中へはひつて行く)

侍臣乙 (急ぎ足で出て来る) 李孫勇からの使の者が走つて参るやうでございませう。

玄宗 うむさうか。李孫勇! たしか殿を引受けてゐたのだね。

侍臣乙 左様でございませう。陛下を心安く落しまるらせるために、奮闘してゐます。忠義第一の大將

でございませう。

玄宗 (それには答へないで、車の内を振り返りながら) そんなに痛むのか。

楊貴妃 (姿がハッキリとは見えない。たゞ燦爛たる綾羅がうごく丈で) はい。

玄宗 困つたな。齒が痛むと云ふのは、一番厄介なものだ。侍醫頭はどうしても見えないかい。

宮女 (車についてゐた) はい。先刻から探してゐますが、見當らないやうでございませう。初から、供奉の列には加らなかつたのだ、とみんなが申して居ります。(その時上手の方に使者が着いたと見え、物騒しい音が聞え、人々がその方へ駆けつける)

侍臣乙 あゝ着きました。どんな知らせを持つて参りましたか。(駆け出す)

玄宗 (使者の方へは、あまり注意を拂はないで) どんなに痛むのか、それとも神

經が痛むのか。

楊貴妃 あゝ痛い、痛い! 齒が痛まなくて済むんだつたら、妾の持つてゐる夜光の珠を、みんな手

離してもいいのに。あゝいたい!

玄宗 困つたな。一層早く抜いて置けばよかつたのだ。

楊貴妃 さうなのです。私はぐらくするから、抜いてくれ抜いてくれと云つたのです。あの侍醫頭

が、もつと待て、もつと待てと云ふものですから、こんな苦しみをするので。侍醫頭が居たら鞭

打たせてやりたい位です。

(侍臣甲、湯を持った茶碗を、恭々しく捧げて来る)

侍臣甲 お湯でございます。

玄宗 お湯が来た。これで嗽ひをして見るといふ。(玄宗楊貴妃に取りついでやる)

楊貴妃 (それを飲む) おや鹽を入れてないのだね。まあ氣が利かない。

(侍臣乙、あわただしく登場する)

侍臣乙 陛下、御安心遊ばしませ。使者が申しますには安祿山の兵士共は、長安の都へはひると、もうみんな腰を落付けて、掠奪を始めるやら酒浸りになるやらで陛下のお跡を追ふ容子は少しも見えないとの事でございます。先づ御車から、降りて暫らくの間、御休息なされてもよろしからうと存じます。

玄宗 さうか。俺もさうしたいのだ。道がわるいので、車が揺れ腰が痛んで仕方がなかつた。貴妃！お前の齒が痛むのもそのためだらう。あんまり身體が揺れたから齒が痛むのだ。降りて休息するといふ。

楊貴妃 はい！ 妾もさうしたかつたのです。車の中は暑くつて、暑くつてのぼせるから、齒が痛むのです。どれ。

(玄宗先づ車より降り、貴妃もついで降りる。侍臣宮女達、皇帝の周圍を避ける。楊國忠及び三人の夫人達も車から降りる。皇帝に目禮したる後下手の方へ行きて座を取る)

玄宗 高力士は何うした。

侍臣丙 何か、用事がありました、陳玄齡殿の所へ行つて居られます。

玄宗 李孫勇からの使者を劬はつてやれ。(傍に頬を押へて苦しがつてゐる楊貴妃を振り返つて) どうだい。少しはよくなつたか。

楊貴妃 いゝえ。前よりも、もつと烈しい位です。

玄宗 困つたな。いつそ動いてゐるのなら、思ひ切つて抜いてしまつたらどうだ。

楊貴妃 出来れば、さうしたいのです。でも、觸ると飛び上るやうにしたいのです。

玄宗 どれ、お見せ。

楊貴妃 勿體なうございます。

玄宗 なにかまふ事はない。俺が抜いてやらう。

楊貴妃 でもお手が汚れます。

玄宗 なに、そんなことを。お前と俺との間で。

楊貴妃 侍臣や宮女達が見てゐます。

玄宗 かまふことはない。かう云ふ場合だから、もつと傍へお寄り。さう、私に身體をもたせるやうにして、もつと口を開けなければ。

(玄宗、楊貴妃を身ぢかく引き寄せ、右の手を口に入れて病める齒を求む。侍臣宮女達、顔を背けてゐる)

楊貴妃 おゝいたい！

玄宗 辛抱しておいで！ これは、ぐらく動いてゐる。もう少しでぬける！
楊貴妃 おゝいたい！ いたい！ あゝ、もう勘忍して下さい。あつ！
(齒が抜ける)

玄宗 それ御覽！ 抜けたではないか。

(侍臣甲 湯を持つて来る)

玄宗 嗽をなさい。そして、氣を軋めておいで。いまに痛みが無くなるだらう。お前に苦しめられると氣が氣でない。自分で苦しむよりも、よつほど苦しい。

(楊貴妃、しばらくの間、手で口を押へ、うつむいてゐる。口から、しきりに唾を吐く。そして嗽ひをする)

玄宗 どうだい！ 痛みは止みさうか。(楊貴妃うなづく) さうか。それはいゝ。それは助かつた。

楊貴妃 (しばらくの間、無言。やがて抜けた齒を懷より出した紙に包みながら) これが、妾の最初の齒ですわね。

玄宗 最初の齒つて、それは一體どう云ふことなんだ。
楊貴妃 妾の身體から抜けた、最初の齒だと云ふことです。妾はいつか、詩人の李白から聞いたことがあります。桐の葉が落ちて、秋が来たのが知れるやうに、最初の齒が抜けるのはやがて肉體の

秋が来るしるしだと、かう云ふのでございます。
(暗然とする)

おゝ、痛みはだん／＼取れて来る！ が、妾は何だか物さびしい。何だか、物足りない。妾の心の中からも何かと抜け落ちたやうにさびしい。おゝ陛下、妾の胸に手を當て、置いて下さい！ 妾はたまらなくさびしいのです。

玄宗 (楊貴妃をかきよせて、胸に手を當てながら) かうかい。かうすればいゝと云ふのかい。
楊貴妃 (頬をさすりながら) おゝ何だか、顔の相恰までが變つて来たやうだ！ 何だか頬の肉がゆるんで来たやうです。

玄宗 そんなことが、あるものか。お前の頬は十六七の小娘のやうに、ふくよかだ。
楊貴妃 あゝ陛下、妾にどうぞ、年のことを聽かせて下さいませ。十六七！ 妾は、十六七などと

云ふ聲を聞くと、魂を裂かれるやうに悲しいのです。

玄宗 俺が、わるかつた！ ゆるしてくれ。
楊貴妃 いゝえ、陛下がわるいのはございませぬ。それは堪へ忍ばなければならぬ眞實なのです。

それはごまかすことの出来ない眞實なのです。妾が今年もう三十……
玄宗 おゝ俺も、それは聴きたくない。お前の頬がいつまでも、ふくよかで腫がいつまでも黒ければ

それでいゝのだ。

楊貴妃 そんな、そんなことは人間の妾には望めないことなのです、それを思ふと……
玄宗 おゝよして呉れ、さう一々俺の言葉を氣にかけるとは。あはゝゝ、もつと元氣でゐてくれ。

俺はお前にさう悲しまれると、苦しいのだ。ねえ、もつと元氣でゐてくれ。

楊貴妃 (急に思ひ付いたやうに) 鏡が見たい! (宮女に) 金華、お前は、鏡を持って来ただらうねえ。

宮女甲 ええ。

楊貴妃 お前は、妾の化粧係りだから、妾のために、一面の鏡位は、持つて来てお呉れだらうねえ。それを茲へ持つて来ておくれ。

宮女甲 あゝ楊貴妃様! 忘れしました、忘れしました。あまりに取急ぎまして、持つて参ることを忘れしました。

楊貴妃 おゝ何と云ふうつけ者! 妾に、鏡がどんなに大切であるかを知つてゐるくせに。おゝ腹が立つ! 誰でもいい、この女をそちらへ連れて行つて縊り殺しておくれ。

宮女甲 あつ! (駭いて泣き伏す)
玄宗 可哀相に、ゆるしておやり。こんな騒動のときには、お前の後に附いて来た丈でも一の手柄だ。ゆるしておやり。

楊貴妃 でも……

(何か云はうとしてゐると、宮女乙が、三人の夫人の所から来る。一面の鏡を持つてゐる)
宮女乙 貴妃様。こんなものでもよろしければ、お使ひ遊ばせと、韓國夫人が仰せられました。

楊貴妃 仕方がない。それを借りよう。(鏡を手取る) おゝ、鏡を見るのが、何んだかこはいやうだ! (躊躇した後鏡を見る) おゝ何と云ふ醜い顔、額の所にはこんなに膏が浮いてゐる。白粉は

剝け落ちてゐる。おゝ顔の皮膚に少しの力もなければ、光澤もない。眸がにごつてゐる。あゝいやだ! いやだ! 何と云ふ醜い顔だらう。おゝ陛下、妾の顔を、どうぞ見ないやうにして下さい。

妾は耻づかしい。耻づかしい。
玄宗 おゝ何を云ふのだ。お前、亂れてゐる髪にも、風情がある。お前の白粉剝のした頬にも、ある美しさは宿つてゐる。

楊貴妃 (玄宗の言葉は、耳に入れないで) あゝ情ない。顔全體から、生氣がなくなつてゐるのだ。これが妾の顔かしら。大唐の天子さまから、愛されてゐる妾の顔かしら。長安の都を落ちたことよりも、妾は自分が醜くなつたのが悲しい。さうなのだ! 妾は、もう今までも醜くなつてゐたのだ。それを日髪化粧でごまかしてゐるのだ。今日、一日化粧しないものだからかくされてゐた醜くさが、一時にマザク、現はれたのだ。おゝ情ない。こんなに醜くなるより、いつそ死んでしまひたい。
玄宗 おい氣を静めてくれ。何と云ふことを云ふのだ。誰がお前を醜いなどと云はう。唐の天下は、お前の美しさを讃へる聲で、充ち満ちてゐるではないか、お前の美しさのために國が亂れた、とさ

へ云はれてゐるではないか。
楊貴妃 陛下のお言葉も、大唐の天子のお言葉も、この五寸の鏡にうつる眞實を、どうすることも出来ません。貴君の御車から妾を、突き落して下さい。妾は、こんな顔をして貴君のお傍に居り、行幸の先々で、あれが楊貴妃だと指ざされたくはありません。
玄宗 氣を静めておくれ。お前は、あまり昂奮しすぎていけない。美しいとか醜いとか、そんなこと

を云つてゐる時でもないのだ。今は、一旦緩急の秋なのだ。女は、だまつて俺の胸に、寄り添つて居ればいいのだ。

楊貴妃 でも妾は……。お、これから一口一日醜くなるのだと思ふと……。

(上手に、物さわがしい聲がする)

侍臣宮女達 あゝまた使者が来た。また使者が来た。(五六人、その方へ走つて行く。玄宗も楊貴妃も、だまつて、その方を見てゐる。侍臣甲、あわたゞしく歸つて来る)

侍臣甲 李孫勇からの、再度の使者でございます。

玄宗 うむ、どうしたと云ふのだ。

侍臣甲 安祿山の兵が、二千騎ばかり、後を追つて来たと云ふのでございます。一戦に、追ひ斥けましたが、いつ本軍が後を慕つて来るかも分らないと申すのでございます。御猶豫なく落ちさせられるやうとのことでございます。

玄宗 さうか。よし、それでは出發の仕度をするやうに陳玄齡に傳へてくれ。

(侍臣甲下手へ行く)

玄宗 どうだい！ 齒はまだ痛むかい。

楊貴妃 もう齒のことなどは、何うでもよくなりました。それよりも……。

玄宗 うむ。それよりも、氣を直して車に乗る用意をしてくれ。しばらくの間の辛抱だ。直ぐ都へ歸れるだらう。さうすれば、また、お前は自分で好きな丈、美しくなつて俺を駭かしてくれ。

(玄宗、楊貴妃を促しながら席を立たんとす。突如下手の樹立の彼方、兵士が休息してゐる邊が騒がしくなる。兵士が楯を打ち鳴らす音が烈しく聞える。侍臣甲狼狽して馳けもどつて来る)

侍臣甲 陛下！

玄宗 何ぢや、何ぢや。

侍臣甲 謀反でございます。

玄宗 (愕然としながら) え、つ！ 馬鹿なつ！ 謀反などと、そんなたはけた！

侍臣甲 でも、陳玄齡が、號令いたしても動かうとしないのでございます。

玄宗 (青くなりながらも) 仔細があらう。高力士を呼べ！ 陳玄齡を呼べ！

(下手から、高力士が出て来る。兵士達は益々さわがしくなる)

玄宗 高力士か。一體何うしたのだ。何うしたのだ。

高力士 陛下、一大事でございます。

玄宗 何ぢや。謀反か？

高力士 いゝえ、謀反ではございません。彼等は、みんな忠實な兵士でございます。たゞ今度の兵亂の責任者を罰せよと、かう申すのでございます。責任者を罰しない裡は、一步だつて動かないとかう申すのでございます。もし、責任者を罰しないならば、戟を逆手にして、祿山に降ると申してゐる者さへござります。

玄宗 陳玄齡までも、さう云ふのか。

高力士 陳玄齡は、一生懸命になつて兵士を宥めてありますが、かうなると、強いものは、實力です。
 陳玄齡も、平生の威嚴が少しもございませぬ。
 玄宗 だが兵亂の責任者と云はゞこの俺ぢやが。
 高力士 いゝえ、兵士どもは、さう申しては居りません。一天萬乗の至尊に、責任がある譯はないと申して居ります。陛下の、聰明を掩うてゐる權臣がわるいと申してゐます。
 玄宗 うむ。誰の事ぢや。
 (問答を離れて聞いてゐる楊國忠、もじくする)

高力士 お察しを願ひます。

玄宗 火急の場合、察してゐる暇はない。あからさまに申して見い。

高力士 恐れながら、楊國忠のでございませぬ。

玄宗 (自然として) 馬鹿なつ！ 國忠は貴妃の兄だと云ふことを忘れたのか。

高力士 (割合冷静に) 忘れねばこそ申して居るやうに私には思はれます。

玄宗 兵士達に、俺の言葉を傳へてくれ、楊貴妃の兄を失ふことは出来ぬと。いゝか、俺の親しい外戚を失ふことは出来ぬと。いゝか、さう傳へてくれ。
 (兵士の烈しく柝を鳴らす音が、聞えて来る。玄宗たちろぐ。陳玄齡、登場する。玄宗と同年輩の老將軍)

陳玄齡 陛下、一大事でございませぬ。陛下の軍隊を失ふか、楊國忠殿を失ふか、二つに一つでございませぬ。

ます。

玄宗 俺の言葉を傳へてくれ。

陳玄齡 (恐れながら) 無駄でございませぬ。兵士達は、氣の狂つた獅子のやうに、荒れ狂つてゐます。恐らく陛下のお言葉も、耳には入るまいと思ひます。

(柝を鳴らす音が、すさまじく聞える)

陳玄齡 あれでございませぬ。あの通りでございませぬ。

玄宗 困つたな。唐の社稷も覺束なくなつて来たな。

高力士 そんなことは、ございませぬ、兵士の願ひを叶へてさへやれば、兵士達は欣んで、陛下のために戦ふだらうと思ひます。
 陛下、私の死ぬときが来たやうに思ひます。

楊國忠 (決然として前へ出る)

玄宗 おゝ。私を兵士達に與へて下さい。それが、陛下に對する私の最後の義務かも知れませぬ。

楊國忠 私を兵士達に與へて下さい。それが、陛下に對する私の最後の義務かも知れませぬ。

楊貴妃 おゝ兄様。(すがり付く) 楊國忠 おゝ妹、機嫌よく暮してくれ。陳玄齡どの、私を兵士の所へ案内してくれ。

陳玄齡 よいお覺悟です。どうぞ、貴君の立派な態度で貴君の最後を飾つて下さい。

(楊國忠と陳玄齡と去る)

楊貴妃 (玄宗に取りすがつて) 陛下、私の可哀相な兄を、兄を。

玄宗 ゆるしてくれ、かうなつては、俺の力にも及ばない。

(玄宗と楊貴妃、相擁して泣いてゐる。忽ち下手の方で、兵士達の罵り騒ぐ聲が聞える。楯を叩く音がそれにまじる。玄宗と楊貴妃耳を蔽ふやうにしてゐる。高力士、駆けもどつて来る)

高力士 陛下!

玄宗 お、國忠は殺されたのか。

高力士 はい。

(楊貴妃泣きくづれる。舞臺にゐる三人の夫人も泣き倒れる)

玄宗 お、早く、出發の仕度をしてくれ。俺は、こんな呪はれた場所には、一刻も止まつてゐたくない。

高力士 陛下!

玄宗 何ぢや。

高力士 兵士どもは、まだ満足してゐません。

玄宗 え、つ! 何と云ふのぢや。

高力士 まだ、責任者はあれで盡きないと申すのでございます。

玄宗 なにつ! 無禮な。この俺を何と思つてゐるのぢや。俺が、自分で行く。俺が行つて、無禮な奴等を懲しめてやる。

高力士 それは、徒勞でございます。兵士達は、本當に陛下の御身上と、暗の社稷を思つてゐるの

でございます。思つてゐればこそ、國の疾病を除かうと一致團結してゐるのでございます。

玄宗 お、俺には、何も分らなくなつた! そして、その責任者は誰だと云ふのだ。まさか……。

(楊貴妃、屹となる)

高力士 恐れながら、楊貴妃の御姉妹に當る、三人の夫人達でございます。

玄宗 え、つ。

楊貴妃 え、つ!

玄宗 なぜ、なぜ、この夫人達に罪があるんだ。彼等はたかゞ女だ。彼等が、悪い譯はない。彼等が悪いとすれば、俺が悪いのだ。兵士達は、俺の親しいものを罰して、間接に俺を罰しようとするのか。

高力士 何う致しまして。彼等は、かう申してゐます。婦人が、大國に封ぜられてゐるのが、國の亂れの基だから申すのでございます。それを誰が、封じたか、そんなことよりも、先づ形を……。

さうです。大國に封ぜられてゐる夫人の方々を、無くしたいと申すのでございます。

(脅迫するやうな、激しい罵聲が聞える。つゞいて促がすやうな激しい楯を叩く音。陳玄齡出て来る)

陳玄齡 陛下、兵士達は楊國忠殿の血を見てから、血を嘗めた虎のやうに兇暴になつてゐます。大抵の者は、劍を抜き放つてゐます。もし、彼等の要求を拒んだならば陛下の御前へまでも、殺到して來さうな容子をしてゐます。あれをお聞き下さい。あの叫びを。

(烈しい叫びがつゞいて起る。「三夫人を殺せ!」「三夫人を殺せ!」の聲が嵐のやうに起つて来る)

高力士 到頭あんな所まで、参りました。もし、要求をきまませんと、陛下の前で、どんな殺伐なことをしないとも限りません。

玄宗 お、俺には、もう何うしていいか分からない。

(泣いてゐた三夫人、決然として身を起す)

三人 あゝ、妾達を連れて行つて下さい!

楊貴妃 そんなことは、妾がさせません。陛下、お止め下さい。陛下。陛下。

玄宗 (顔を掩うて聲なし)

楊貴妃 (狂氣のやうに) 決して行つてはなりません。妾が命に換へても、決して、決して、そのやうなことはさせません。

韓國夫人 貴妃よ、かうなつては、力には勝てません。貴女のお蔭で、妾達は長い間楽しい時を過したのです。こんな運命になつても、それを恨めしくは思ひません。妾達は、あまり楽し過ぎたのでした。行きませう。姉妹三人揃つて。

楊貴妃 あゝ行つてはなりません。待つて下さい! 待つて下さい! 行つてはなりません。

高力士 貴妃、御姉妹達は、あんなに立派な覺悟をしていらつしやるのです。どうぞ、お止めにならないやうに。大唐帝國の運命は、この刹那々々にかゝつてゐるのです。祿山の兵隊は、後を慕つて來てゐるのです。今武士の心を失つたならば、國の滅亡はもとより、陛下の御身の上もどうなるかわからないのでございませう。

楊貴妃 (だまつて泣き崩れる)...

(三夫人、侍臣達に助けられて歩み去る。陳玄齡も後にづく)

玄宗 (顔を上げて) あゝ死んでしまつた方がましだ。(兵士の激しい怒聲、どよめき、舞臺の人々は、唯一人聲を出すものはない。ふと、上手が騒がしくなる)

侍臣丁 使者だ! 使者だ!

(ト手へ吐け込む。舞臺の人々は、化石のやうになつて動かない。侍臣丁歸つて來る)

侍臣丁 陛下、李將軍からの使者でございませう。

玄宗 (顔を背けながら) あゝ。そんなものは、もうどうでもいゝ。

侍臣 ところが、よいどころではございませぬ。一旦斥けた祿山の軍が、三萬近い援兵と一緒にいつて押し寄せて來たと申すのでございませぬ。味方苦戰のため、いつ何時退却するか分らないから、一刻も早く鳳輦を進まされるやうにと、かう申すのでございませぬ。

高力士 御車の用意をするやうに。(兵士の烈しく罵る聲、耳を掩ふやうに聞えて來る。三夫人を送つた宮女達、泣きながら歸つて來る。やがて、白馬を附けた車が、引き出される。楊貴妃も玄宗も、なか／＼それに乗らうとはしない。兵士の罵聲が、益々烈しくなり、益々近づいて來る)

高力士 お、彼奴等は、まだ満足しないと云ふのか。
(玄宗も楊貴妃も、不安に襲はれる。突如、「楊貴妃を斃せ、楊貴妃を殺せ!」と云ふ叫びが嵐

のやうに起つて來る)

高力士 おうつ！
玄宗 えうつ！

(「楊貴妃を斃せ！」の聲益々近づく。戟が、樹の間に隠見する)

玄宗 あゝ彼奴等は、最後のものを求めてゐる。

楊貴妃 (玄宗にすがりつく) おうつ下。

玄宗 心配するな。日月が、逆さまに墜ちてもお前を渡さぬぞ。この俺の瞳の黒い間は。

兵士の聲 楊貴妃を斃せ！

他の聲 眞の國賊を亡せ！

他の聲 患難の源を除け。

(樹の間から、劍戟の光がほのめく)

(陳玄齡、色を失つて出て来る)

高力士 兵士達は、貴妃を要求してゐるのか。

陳玄齡 (それに答へないで玄宗に) お聞きの通りです。陛下。

玄宗 おゝ、俺を先きへ殺して呉れ。俺を先きに殺してから、女を何うにでもしてくれ。陳玄齡、俺

を兵士の所へ案内してくれ。

陳玄齡 滅相な。彼等は、陛下に對しては、忠實な兵士です。たゞ國家の……。

楊貴妃 (決然として起ちながら) おゝ何も云ふな。陳玄齡、妾を彼等の所へ案内しておくれ。

玄宗 (駭いて楊貴妃を抱きしめる) おゝ、何を云ふのだ。馬鹿な。お前を渡してよいものか。俺か

らお前を奪ひ取らうとするものは、先づ俺の息の根を止めてからにしろ。

高力士 陛下、今日の場合……。

玄宗 何もきゝたくない。云ふなく。

陳玄齡 陛下……。

玄宗 何も云ふな、亡ぶのなら亡んでもいい。この女を抱きながら亡びたい！

(「楊貴妃を斃せ！」の聲益々盛になる)

高力士 陛下！

陳玄齡 陛下！

玄宗 (答へず)……。

楊貴妃 (つと、身を玄宗の把握から脱しながら) 陛下、どうぞ、妾を死なせて下さい！

玄宗 馬鹿な！

楊貴妃 いゝえ。妾は死にたいのです。十年來妾の願を一つとしてお斥けにならなかつた陛下は、ど

うぞ妾の最後の願を許して下さい。妾は、心から死にたいのです。本當に死にたいのです。

玄宗 なぜ。なぜ。なぜ！

楊貴妃 妾は、逃れる道がないから、死にたいと云ふのではないのです。先刻、自分の顔を鏡に映し

てから、世の中が嫌になつてゐたのです。これから、年が寄るに連れて一日一日、一年一年、顔容が

醜くなるのかと思ふと、妾は死ぬよりも悲しいのです。一年々醜くなり、これが楊貴妃のなれの果かと、指さされるやうな、皺だらけのお婆さんになるのかと思ふと、ゾツとするほど怖しかったのです。陛下よ、妾を死なせて下さい。少しでも、妾が美しい裡に、死なせて下さい。そして陛下の御心の裡に、少しでも美しいまぼろしを止めておいて下さい！

玄宗 馬鹿を云ふな。それはお前の理窟だ。そんな理窟で俺の心が、慰められるものか。

楊貴妃 いゝえ理窟では、ありません。妾の心全體が、妾の身體全體が、それを要求してゐるのです。どうぞ死なせて下さい。妾は、先刻鏡を見たときから、死にたいと思つてゐたのです。その機會がこんなに早く来る！ しかもこんなに晴がましい死が。帝王の妃として三軍の前で殺される。大唐の天下を動かした傾國の美人として。おゝ、女としてこんな晴がましい死に方が外にあるものか。

(楊貴妃を斃せ)の聲が聞える)

おゝ、あれは妾の死を讀へる聲だ。おゝ、妾の死は後世まで、歌はれる。妾の美しさは、後代に傳はるのです。おゝ、陛下お喜びなさい！ 貴君の愛人は、中華第一等の美人になりますよ。おゝ手間取つてはならない！ 陳玄齡、妾を案内しておくれ！

玄宗 貴妃！ 待て。

楊貴妃 いゝえ。どうぞ、やつて下さい。これが、妾の最後の最後のお願ひです。おゝ私の愛する陛下。御機嫌よくお榮えあそばせ。

玄宗 (今は言葉なし)……。

楊貴妃 おゝ陳玄齡よ。妾をなるべく、美しく殺しておくれ。醜い死様はいやですよ。あゝ、柳英、妾はお前に、羅の布を預けておいた筈だ。

柳英 (持つて来る) 茲にごさいます。

楊貴妃 おゝ、これで身體を包むから、その上から縊り殺しておくれ。

(楊貴妃、それを髪の上から被ぶる)

玄宗 おゝ楊貴妃！

楊貴妃 おゝ陛下。妾のために、あまり心を痛めて下さいますな。妾はうれしく死ぬのです。それから、陛下妾をいつまでも忘れないで下さい。おほゝゝ。それから、もう一言、云つて置きたいことがある。都へお歸り遊ばしても、あまり美しい方を、お近づけ遊ばしますな。

玄宗 おゝ何を云ふのだ！ 俺の心は、いまそのまゝに地獄だのに。

楊貴妃 陛下、おさらばでございます。(宮女達に) みんな左様なら。陳玄齡！ 大唐國の妃が、どんな美しい勇ましい死様をするか。兵士達に見せておくれ。

(楊貴妃、陳玄齡高力士に伴はれ退場する)

玄宗 (その跡を見送りながら) おゝ、誰か俺を支へてゐて呉れ、倒れさうだ。

(玄宗、侍臣達に支へられて、おつと面を伏せてゐる。烈しい苦悶に堪へてゐることが分る。兵士達の聲、怒濤のやうに高くなり、しばらくあつて、急に「皇帝萬歳！」の聲が起る)

侍臣甲 (走つて出て来る) 楊貴妃には、立派な御最後でございました。お亡骸を、一目お目に入れ

ようかと、高力士殿が仰せになりました。

玄宗（苦悶が消え去つてゐる） 見たいけれども、よさう。それが、彼女の志だらうから。どつがへ深く埋めてやつてくれ。

侍臣甲 はつはつ。（駈け去る）

（「皇帝萬歳」の聲が、潮のやうに盛になつて来る。玄宗ちつとそれに耳を傾けてゐる。高力士が出て来る）

高力士（玄宗の前に蹲まりながら）

え、みんな甲を脱いで、罪を謝して居ります。立派な御最後でございました。兵士達も、さすがに感じたと思

玄宗（ほのじろい顔をして） さうか。

高力士 御心中のほど、申し上げる言葉もございません。

玄宗（黙つてゐる）……

高力士 御悲嘆のほど、お察しいたします。

玄宗（黙つてゐる）……

高力士 お悲しみのほどお察しいたします。

玄宗（青白い顔が漸く澄んで見える。静かな深い聲で） うむ。むろん、悲しい。が、思つてゐたのは少し違ふ。

高力士 はつはつ。

玄宗 彼女に死なれると、生きてゐる甲斐はないだらうと思つてゐたが、死なれて見るとさうばかりでもないな。悲しいことは悲しいが、十年來心の上に、かぶさつてゐた重みが、ひよつくりと、除

れたやうな氣もする。何だか手足を、延ばしてみたいやうなノビノビとした氣もする。

（兵士達が、段々近づいて来て、その中の隊長らしいのが、十人ばかり入つて来る）

隊長達 皇帝陛下萬歳！

玄宗（淋しい微笑で彼等にうなづいてから、高力士に） 萬歳と祝はれるほどの心持でないが、お前が

心配するほどの氣持でもない。解脱、そんなあはくしい氣がしないでもない。おゝ車に乗らう。

時が移る。高力士お前もこの車に乗らないか！ 急に一人だとやつぱり淋しい。

高力士 はつはつ。

（高力士車に乗る。車動き出す。「皇帝萬歳」の聲また一しきり聞える）

——幕——

袈裟の良人